
魔法少女リリカルなのはツインブレイダーズAS

少佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはツインブレイダーズAS

【Nコード】

N1365K

【作者名】

少佐

【あらすじ】

第九十七管理外世界地球、そこに降り立つは流れ者とすべてを失くした騎士

流れ者は友のために、騎士は愛すべき家族のために、それぞれの思いが

激突する始まりの物語！！

前書きとキャラ説明（前書き）

初めての挑戦です

前書きとキャラ説明

前書き

どうもみなさん！、初めまして、少佐です
最初に言います、自分は文才が最低なほどありません
この話は自分にたいする自己満足作品です
それでも楽しんで読んでくれたら自分にとって
この上ない喜びです。それではキャラクター説明をどうぞ！！

ラグラ・性別、男・年齢、13才

デバイス名、ヘイザーノクト

趣味、空を見ること（特に青空）

好きな物、甘い物・苦手な物、酸っぱい物

「第一期のラグラについて」

彼は無数にある次元世界を旅する流れ者（次元放浪者）であり、ヘイザーノクトと共に旅をしている

旅を続けて第97管理外世界地球にやってきたラグラは鉄槌の騎士との戦闘により危機に

落ちたある魔法少女を助けた事によりのちに闇の書事件と呼ばれる事件に巻き込まれていくことになる

性格は人当たりがよく、仲良くできる人とは積極的に打ち解けあう心を持ち合わせている

しかし堅つくるしい事が苦手である、物事に対処する時よく相手の気持ちを汲んだ方法を好んでいる、そのためか敵である相手をよく逃がしたりをしばしば、

そのもう一方でなにかに打ち込みたいという願いを心の奥に秘めて

いる

「ヘイザーノクトについて」

人格は男で温厚な性格をしておりいつもラグラの事を気にかけているインテリジェントデバイス？

レイウン・クラフトル、・性別、男・年齢、13才

デバイス名、ガラドボルグ

趣味、編み物

好きな物、はやての手料理、母の手料理・苦手な物、特に無し

「第一期のレイウンについて」

特殊なデバイス・ガラドボルグと魔力甲冑・ソリッドアーマーを扱う少年、ある戦闘に巻き込まれ第97管理外世界地球へと

来てしまい困っていたところを八神はやての誘いにより八神家の一員になる。性格はとても優しく、礼儀正しい少年である

行き場もなく見知なる自分を家族として迎え入れてくれたはやてにすぐ感謝しており彼女の事を支えたいという思いを心

に持っている。人を傷づつける事に恐怖を抱いており人と戦った事はあるが人を傷つけたことはないらしい。自分の過去に

深い傷跡があり自分の家族の事や過去の事を決して話題にだそうとしない。しかしはやてが闇の書の主選ばれたと同時に

彼女を守護するために出現した守護騎士・ヴォルケンリッターの登場により、数おおくの幸せと始まりをも意味する戦いの

運命に巻き込まれていくことになる。そんな彼だがなぜかある組織から重犯罪者として追われている

（なおレイウンは地球にきた段階ではある組織側からは死亡扱いとなっている）

「ガラドボルグについて」

性格は古風で人情深い特殊なデバイス、レイウンはこのデバイスをガーディアルデバイスと呼んでいる

ガーディアルデバイスとは？

ソリッドアーマー専用デバイスとして作られたデバイス、単体でも使用可能

デバイスの形や技や機能は話しが進んだら説明したいと思います、ついでにラグラとレイウンの二人が主人公です、それではプロローグを

どうぞ！

前書きとキャラ説明（後書き）

キャラ説明どうでした？、酷いですか？、よければ感想をください
！！！！

プロローグ（前書き）

始まります！

プロローグ

プロローグ

・ある世界・

少年は戦っていた、自分の目の前にいる二足歩行型の機械兵器と銀色の鎧を纏っている少年は銀色の大剣を振るい機械兵器の右腕を切断し一旦距離をとり、大剣を構えなおす

「（次の一撃で決める！）」

大剣から煙といっしょに何かが出てきたと思えば大剣が光はじめ少年は大剣を大きく振りかぶり

「おおおおおお！！」

振った

次の瞬間には機械兵器の上半身は真つ二つになっていた中から切断されたパーツからでる電流と流れ出る液体が見える。

「（やった・・・？）」

少年がそう思った矢先に爆発、爆発は少年を巻き込みその地域をも巻き込んだ、少年は爆発に巻き込まれながらも思った。

「（ぐ！、ここまで・・・か・・・）」

爆発が収まった後のそこにはなにも残されていなかった。

第97管理外世界地球・・・海鳴市・・・

幾つ物の建物がたくさんある所、言わば街、ここは海鳴市

海岸沿いにあるこの海鳴市、町並みは綺麗であり夜の夜景などは絶景である

今は午後2時20分、天気は晴れであり絶好のお出掛け日和である。

「はあ~~~~~」

だがそこにこんないい天気なのに溜息をもらす車椅子に乗った少女がいた

外見は茶髪でショートカットの髪の毛に赤と黄色のヘアピンをしている

少女の名前は八神はやて、自分がもっと小さい頃に両親を亡くし、自分も

病にかかり両足が不自由になった八歳の少女、傍から見れば可哀想な少女である

今は親戚の人が多大な出資をしてをしてくれているおかげで一人でも生活できる

環境があり一人で生活してきたためか八歳とは思えないほどしっかりしていて強い子である

「あかん、あかん、こんないいお天気なのに溜息なんて漏らしちゃあかん」

そうはやては自分に言い聞かせるが顔がすこし暗い、人間だれであっても一人ぼっちは

とてもつらいものである、彼女だって例外ではない、現に彼女は今、孤独に悩んでいる

人がいない道がさらに彼女の孤独感を増量させる、太陽の日も木々の影に隠れている

「うち、これからもずーと一人なんかなあ・・・」

はやてがそう言った瞬間、突然はやての目の前の空中から穴らしきものが現れた

「え？」

はやては声を上げ穴を見ていると中から人が落ちてきた

「うわわわわ~~~~！」

ドシン！と音を立てながら地面に落ちた人、見た目から金髪の男の子である

ついでにもう穴は消えている

「いててて・・・」

はやては突然現れた少年に驚きながらも声をかけた

「だ、だいじょうぶ？」

「え？、あ・・・大丈夫です」

少年はその声少し驚いた顔をしながら顔を上げはやての顔を見て立ち上がり自分の体を見まあして

再び少し驚いた顔をしたがすぐに表情を戻しはやてに向き直る

「すいません、ここは一体どこですか？」

「どこって、海鳴市やけど」

「海鳴市・・・（どうやら、違う世界に飛ばされたみたいだ、とりあえずどうしようか？）」

海鳴市という言葉をはやてから聞いた少年はすこし考え込んでいたそれを見ていたはやては言った

「なあ、よかったらうちの家に来んか？、聞きたい事もあるし」

「え！？、でもそれはそちらの迷惑に・・・」

「ええから、ええから、いこいこ！」

そお言うとはやては少年の手を引っ張りながら車椅子のレバーを動かし家に向かった

その時のはやての表情はさっきの暗い顔がうそのように明るかったついでに少年はなせれるままについて行った

・・・八神家・・・

「ここがうちの家や、さあ入ってえな」

「あ、はい」

はやてに促されて玄関に入る、少年が玄関を見回している間に後から入ってきたはやては先に靴を脱ぎ言う

「あ、靴はそこで脱いでえな」

「わかりました」

少年は頷くとすこし変わった靴を脱ぎ、家にかかる

「えっと、お邪魔します」

「うん、いらっしやいな」

玄関でのやりとりが終わり少年はリビングに招かれる

少年は玄関と同様にリビングを見回す、だがその行動には警戒と言う一言はなく、なにか懐かしい物を見ている感じである

「とりあえず座わろうか」

「はい」

少年は席を勧められたんでソファに腰をおろしはやても少年の向かい側に車椅子を

移動させ少年と向かい合う

「まずは自己紹介からや、うちは八神はやて、君は何ていうん？」

「僕はレイウン、レイウン・クラフトルと言います」

「（名前からして外国人なんかな？、いやでもそれにしても日本語がうますぎるし）」

レイウンやな、よろしゅうなレイウン」

「はい、はやてさん」

自己紹介を終えた二人、とりあえずはやてが質問をした

「じゃあレイウン、質問するけどええ？」

「どうぞ」

「どうしてレイウンはあそこに？」

「・・・信じられないかもしれませんが聞いてくれますか？」

その問いにはやてはコクツと頷いた、レイウンは自分が戦っている事を伏せ、

あるトラブルに巻き込まれてこの世界に来てしまったことを話した

「はあ、別の世界から来たんか」

「信じられないかもしれませんが・・・」

「いや信じるよ」

「え？」

「だって世の中そういう事一つや二つ起こっても不思議じゃないん、それにレイウンが嘘を言ってるように見えへんしな」

「……………」

レイウンは哑然とした表情ではやてを見ていた、そしてはやては二つ目の

質問をレイウンに聞いた

「それでレイウンはこれからどうするんや？」

「それがまだ決まっていなくて……………」

「そうか、そんならこの家でうちと暮らさへんか？」

いきなりのはやての提案にレイウンは慌てて声を出した

「ええ！？そ、そんな！悪いですよ！こんな他世界から来た

みしなる男を、それにお返しする物もないし、ご両親にも悪いですよ！」

「全然うちは構わへんで、レイウン礼儀正しそうやし、それに…………うち、家族えんから」

「え？」

「幼い頃死んでもうてな、今は一人暮らしなん」

「！…………すいません、へんな事聞いて」

「構わへんで」

暗いふいんきになってしまった、レイウンは少し考え席を立ちはやての目の前まで行き、跪き言った

「…………本当にいいんですか？」

「ええで」

「…………お願いします」

その言葉を待っていたかのように嬉しい顔をするはやて

「じゃあこれからよろしゅうな〜レイウン、

じゃあうち今日の晩御飯、頑張ちやるで〜」

「あの、はやてさん」

「さんはいらんでレイウン、ふつうにはやてって呼んでえな」

「…………じゃあはやて、これからお世話になります」

夜…………八神家…………

「よいしょと」

レイウンははやてのあてがわれた部屋のベットに腰を下ろし
あれからの事を思い出していた、あれから一緒に晩御飯の食材を買
いにスーパー

なる所に行き、その後家に帰りはやてが晩御飯の調理をしている間、
レイウンは

この世界について勉強していた、驚いたことに歴史など全く違うが
乗り物や食べ物、

物や季節などは自分の世界とかなり似ていた、ついでに言葉も（日
本語だけだが）一緒である

だからはやてと買い物に行ったとき違和感がなかったのだと帰って
本に目を通したとき

確信できた、その後の晩御飯はそれはもうごちそうであった、全部
食べてからレイウンが思った

感想は唯一つ、すごくおいしかったの一言であった、その後は一緒
に片付けをし

すこし雑談をした後、レイウンは自分が寝る部屋に案内されはやて
は「疲れたやろ？、もお寝や」

と言ったのでお言葉に甘えさせてもらい寝ることにしはやてはおや
すみの一言を言い

部屋をでていって今にいたるわけである

「（何やらなにまで本当に用意されちゃったな）」

もしこの世界に来たときレイウンははやてが目の前にいなければ恐
らく今頃

路頭に迷っていたであろう、これからお世話になることを考えると
いくら感謝しても

足りないかもしれない、だからせめて明日からがんばろうと思いを
頭に留めた瞬間、

頭の中に声が響いた

「（主）」

「（ガラドボルグ？）」

声をかけてきたのは自分のデバイス、ガラドボルグであった

「（ガラドボルグ、一年振りに家族らしい食事をしたよ、

すごく楽しかった）」

「（そうですか主、それは自分にとっても喜ばしいことです）」

「

レイウンは自分のポケットから八各形の小さな板を取り出した

「（しかし主、よろしいのですか？、万が一奴等に見つかったら

はやて殿を巻き込んでしまうかもしれませんよ？）」

「（あの爆発で死んだと思えばいいけど、もしばれたらはやてだけは絶対に巻き込まないようにしないと）」

「（・・・この平和がずっとつづくといいですね）」

「（僕もそう望みたい、ガラドボルグ、悪いんだけどこの地域全体を索敵しておいて）」

「（はい、主はもうお休みください）」

「（うん、おやすみ、ガラドボルグ）」

プロローグ（後書き）

どうでしたか？、是非感想などくれたらうれしいです。

第一話、始まり、そして願い（前書き）

第一話です

第一話、始まり、そして願い

「ん．．．うん？」

目を覚ませばすぐに見慣れない天井が目に入った、レイウンは体を起こし自分が

いる部屋を見回す

「（あれ？ここは？．．．あ、そうだそうだ、昨日はやてと出会って

ここでお世話になる事になったんだっけ．．．）」

ようやく自分がここにいる理由を思い出すと時計に目をやる

「七時．．．はやて起きてるかな？」

とりあえずベットから降りると部屋を出て、リビングに入ると誰もいなかった

「（いない、まだ寝てるのかな？）」

レイウンはリビングを出ては二階に上がりはやての部屋に入ると部屋の隅には

車椅子、ベットにははやてが寝ていた

「（あ、まだ寝てる、起こそうかな？、いやもう少し待ってみよう）」

そう思うとはやての部屋を静かに見回す、一番に目に入ったのは大きい本棚だった

「（大きいなあ、はやては本を読むのが好きなのかな？）」

と視線をはやてに移す、ふとはやての寝顔が目止まる

「．．．．．」

すこし前の記憶が頭に蘇り視線をそらし暗い顔をする、そんな暗い顔をしたときだった

「う．．．うゝん」

レイウンは暗い顔を消し寝ているはやてに声をかけた

「はやて、起きましたか？」

「うーん、ん？」

はやての本日はじめての視界に入ったのは金髪の少年だった
はやてはこの少年が誰だがすぐにわかった、昨日新しく家族になっ
てくれた

少年、レイウンだと

「あ、おはようさんや、レイウン」

「はい、おはようございます」

家族同士の挨拶、レイウンとははやてはお互いにとって久しぶりの朝の
挨拶

だがはやてはは頭に浮かんだ一つの疑問を口にした

「ところで、なんでレイウンがここにいるんや？」

「早く起きてしまったからははやてを起こしにきたんですけどなんか
起こすのも悪いかな

と思っしてしまって、起きるまで待っていたんです」

「そか、そんならええねん」

「ところではやて、はやては本を読むのが好きなんですか？」

「うん、好きやで、だって本には面白いこといっぱい書いてあるか
ら、

レイウンは？」

「僕は普通です、読まないわけでもないし進んで読もうとするわけ
でもありません」

はやてはそろそろ起きようと体を起こす

「えーと着替えるから外でてくれへん」

「わかりました、着替え終わったら言ってください、車椅子まで運
びますから」

そおいうとレイウンは部屋を出てしばらく待った

七分後・・・

「終わったでー」

「（はやいな、慣れているのかな？）あ、はい」

レイウンははやての前まで行き、失礼と言いはやての体を持ち上げた
「・・・お姫様だっこや・・・」

はやては顔を少し赤くして言い、レイウンは若干照れていた

「よいしょと」

はやてを車椅子に乗せ一階へ、ついではやてが下に降りる時は
壁に繋がった動く土台に乗り、下に下りていった、多分上に上がる
ときも

これを使っているのだろう、レイウンがはやてに聞いたところこれ
はバリアフリー

というらしい、二人はリビングに入りとりあえず朝食の支度をする
ことになった

「ところではやて、今日は何をするんですか？」

朝食を食べ終え、洗い終えたお皿を片付けながらレイウンははやて
に尋ねた

「うーん、今日は図書館に行こうと思うんやけど、あーレイウン、
そのお皿こっちの棚やで」

「あ、はい、・・・図書館ですか？」

「うん、そうや」

最後のお皿を片付け終えたレイウンは不思議そうな顔をするレイウ
ンの返事に

はやては笑顔で答えた

・・・海鳴図書館・・・

「ここが、図書館・・・」

「そうや、レイウンは図書館を知ってる？」

「はい、知ってます、僕のいた世界とだいぶ一緒ですね」

そんなやり取りをしながら中に入っていくとすぐ受付が見える

「（ここで本の貸し借りをするんだろうな）はやて、どの位ここに
いるんですか？」

「うーん、二時間くらいかな」

「そうですか、はやて、その間に町を探検してきていいですか？」

「え、別にええけど道だいじょぶなんか？」

「はい、こう見えても道とかを覚えるのはいい方なんですよ」

「そか、じゃあ二時間後ここに戻ってきてな」

「わかりました、・・・すいません、我俣言っちゃって」

「ううん、いいんや、気をつけてな」

「はい」

手を振り見送るはやてにレイウンは手を振りかえし図書館を後にした

・・・海鳴市・・・

図書館をでてしばらく歩いているとガラドボルグが念話を送ってきた

「（主、すみません、わざわざ時間を作ってもらい）」

「（いいんだガラドボルグ、はやくこの町の道とかを知りたかった
から

、ところで索敵終わってる？）」

「（終わってます）」

「（どうだった？）」

「（驚いた事にふつうより大きい魔力反応が一つありました）」

「（え？、あっ、おっと）」

ガラドボルグの報告に素直に驚くレイウン、ついでに赤信号をわた
りかけた

青信号になった、道を歩きながらレイウンは念話を送る

「（魔道士かな？）」

「（いえ、恐らく極まれのケースだと思います）」

極まれのケースとは様々世界がある中、まれに魔法などの存在を知らないもの

がその才能を開花させるということである、開花したといえど普段の生活に全く

支障はないが魔力索敵など行うとその本人が自分の魔力を隠さないかぎり引つかかってしまうのである

「(珍しいね、でもそれだけでよかった)」

「(はい、とりあえずこの索敵結果は以上です)」

「(そっか、ありがとうガラドボルグ)」

「(いえ、それでは・・・)」

話が終わる頃にはレイウンは公園のベンチに座っていた、ふと空を見る

今日も青い空、そして公園に設けられた時計を見る、ただいま10時20分、

はやてと約束した時間まで1時間10分

「(まだ時間はあるな、・・・ん?)」

レイウンはふと公園を歩く三人の少女達を見た、一人は栗色のツインテールの女の子、

もう一人は金髪のロングヘアーに最後の一人は紫色のロングヘアーの女の子達がすごく

楽しそうに話していた、レイウンはふと思った

はやてには友達はいるのだろうか？

いや、学校にすら行っていない、いや行けていないのではないのだろうか？

「(どうなんだろう、でももしそうだとしたら・・・)」

顔を俯かせ思う、もしそうだとしたらかわいそすぎると、足が不自

由で両親もいながために

学校にいけなく、いつも一人で食事を作り、一人で食べ、一人で寝て・・・

「（一人で図書館に行き本を・・・！！！！）」

そこまで考えレイウンはバツと顔を上げた

「（・・・なんて馬鹿な事をしたんだ僕は！！！！）」

ベンチから立ち図書館に向かって走りだした

「（そうだ。だからはやてはあんなに喜んでくれた、やっと一人じゃなくなると思ってた！！！！）」

覚えた道を全力疾走、道にいる人達から何事だという目で見られてたがそんな事を気にしてられる

場合ではなかった

「（謝らないと！、はやてに！！！！）」

なぜ最初から気づかなかったのだろうか？、という気持ちから出てくる

「（はやて！！！！）」

なんだかんだ考えている内に図書館についていた

レイウンは小走りに中に入り、はやてを捜し始めた

「ハア、ハア、ハア、ハア」

急いで走りすぎたのか気付いたら息を荒くしていた

「（・・・いた！！！！）」

レイウンはようやく机で本を読んでいるはやてを見つけそこに向かった

「・・・・・・・・」

その頃はやては黙って本を読んでいた、ふと誰かが隣に来たからそちらに目をやると

そこにはレイウンが立っていた、走ってきたのか呼吸が荒かった

「あ、レイウン、どうしたんや？、まだ二時間・・・ごめんなさい」

「・・・え？」

はやての言葉を遮り謝るレイウンにはやては少し驚いた顔をした

「ごめんさいはやて、僕は・・・はやてを一人にしてみました・・・」

「!?!」

「本当にごめんなさい」

「そ、そんなことあらへんよ！、気にせんでええで」

空っぽのような笑顔で言うはやてにレイウンは言った

「はやて、僕思ったんです、どうしてはやてが昨日あんなに喜んでいたのか、そして考えたんです、はやてが今までずっと一人だったって」

「・・・」

はやては暗い顔をし黙って聞いていた、さらにレイウンは言葉を繋げた

「教えてくれませんかはやて？、はやての気持ちを、僕はその気持ちに答えられるかどうかわかりませんが・・・」

「・・・側にいてくれへんか？、できるかぎりでええから・・・側に・・・」

「・・・はい・・・」

少年の返事を聞くと少女は両目から涙を流し顔を少年の胸に埋め両手で少年の服を掴み言った

「ありが・・・とうな・・・レイウン」

「いいえ・・・」

幸いそこには誰もいなかった、こうして少年は少女の思いに応える事にした、自分が応え続けられるその日まで・・・

第一話、始まり、そして願い（後書き）

書き終えてから気付きました途中からすごく濃いなど（笑）、なのはを知っている人ならあの三人が誰なのか気付いてと思います、感想等を心から待ってます！、次回はついにあの守護騎士達が！？（誤植修正しました）

第二話、誕生日そして出現（前書き）

第二話、どうぞ！

第二話、誕生日そして出現

第二話、誕生日、そして出現・・・

「ん・・・朝」

目を開ければ見えるのは見慣れた天井、レイウンは起き窓を覗き外を見る

「（ここに来てから一週間、はやいな）」

そう、あれから六日が過ぎ今にあたる

レイウンはいつもの日課をするために二階に行きはやての部屋に入る
はやてはやはり寝ている

「はやて、朝ですよ」

「う、うーん、おはようさんや、レイウン」

「はい、おはようございます、はやて」

朝の挨拶を終わらせるとレイウンははやてを抱えて一階の車椅子に
乗せる

その後はやては朝ご飯の支度をレイウンは郵便を取りに行く

「・・・よし」

新聞を手に取り空を見上げる、今日も青空、ふとレイウンは以前の
事を思い返す

「（あれから身寄りの物を買ってもらったり、石田先生に会ったり、
海鳴を案内してもらったり）」

レイウンはそこまで思い返すと家に入っていく

「（楽しい事だらけだったな・・・）」

新聞をリビングのテーブルに置きはやての手伝いをしはじめた

「そおいえば、はやては明日誕生日なんですよね？」

朝食を食べながらレイウンははやてに聞いた、ついでに今日の朝食はご飯と豆腐の味噌汁と焼き魚だ

「うん、そうやで」

「（うーん、プレゼントどうしよう？）明日で何歳に？」

「九歳やで、・・・ところでレイウンって歳いくつ？」

「え、十三歳です」

「はー、五歳も年上だったんか」

「ははははは」

レイウンの歳を聞いて驚くはやてにレイウンは笑っていた

「ふう、だいぶ手伝いがさまなってきたな」

朝食を食べ終わりその片付けをして洗濯物を干し朝の手伝いを終わらし言った、この一週間努力した賜物だ

「はやて、洗濯物干し終わりました」

「レイウン、ご苦労様やな」

「いいえ、全然」

朝の仕事を一段落終えた二人は今日について話始めた

「はやて、今日はどうします？」

「うーん、午後に図書館に行こうかと思うからお昼ご飯までのんびりしよ」

午前中は用事がないことを知ったレイウンは自分の用事をすませるためにはやてに外出許可を求めた

「あのはやて、出かけてきてもいいですか？」

「ええよ、でもどこにいくんや、レイウン？」

「秘密です」

いたずらっぽく笑いながら言うレイウンにはやてはさも聞きたげに

はやては

聞いた

「秘密く？、教えてくなくレイウン」

「ははは、それじゃお昼ご飯までには帰ってきますから」

レイウンはそう言うのと玄関で靴を履き八神家を後にした

「（しかしどうしよう、ガラドボルグ、なにかいい案はないかな？）」

結局、自分ではいい案を思いつけないのでレイウンは自分のデバイスに相談してみた

「（石田殿に相談するのはどうでしょうか？、恐らく長い事はやて殿の

担当をしていらっしゃるようですから何か助言をくださるはずです）」

「（それはいいアイディア！、さっそく海鳴大学病院に行こう）」

レイウンは駆け足に病院に急いだ

・・海鳴大学病院・・

ここは海鳴大学病院の一室、そこに椅子に座るレイウンとその向かいに座る女性が喋っていた

「すいません、時間取らせてもらって」

「いいのよ、それで話って？」

今レイウンの目の前にいる青い髪の毛の女性、はやての主治医の石田先生

初めて会った時は怪しまれたがはやてが色々と言ってくれたおかげで石田先生からは

レイウンははやての親の親戚の子となっていて深い訳ありで八神家

にすませてもらっている

事になっている、会うのはこれで三回目だが二回目で顔なじみになったのである

「明日、はやての誕生日なんです、それで誕生日プレゼントをどうしようと思

って、よかったら石田先生に助言をもらおうと・・・」

「助言ね、そうね・・・」

いい助言がないか目を瞑り指を顎に当て考える石田、三秒ほどして何か

思いついたのかパツと目を開け口を開いた

「はやてちゃんはゴテゴテしい物が好きじゃないからやっぱり自分で考えた方がいいかも、

うーんこれぐらいしか助言らしい事は言えないわね」

「そうですか・・・ありがとうございます、いろんな所を周りながら考えてみます」

そおいうとレイウンは席を立とうとするが石田が呼び止めた

「あ、レイウン君待って」

「?、何ですか?」

「これからははやてちゃんの事、色々とお願ひね」

「はい、石田先生もこれからよろしく願ひします」

椅子から立ち上がり扉の前で礼をしてレイウンは部屋を出た

・・・海鳴市、商店街・・・

「(ゴテゴテしい物がきらいか・・・)」

石田の助言を思い返しながらいウンは商店街を歩いていた
辺りを見れば食べ物や洋服に靴といった物をお店がいっぱいあった

「(お金ははやてから貰ってるから大丈夫だけど・・・うーん・・・

ん?」

あるお店に目が止まった、そこは小さな時計屋、レイウンはお店に足を入れ

店のなかに並べられた品々を見る

「(あ、これなんかよさそう)」

と商品の一つである、小さな懐中時計を手に取り

店の奥のレジに向かった、レジには二十代を越えているかと思われる男性がいた

「あのすいません、これお願いします」

「ん、ああ、よかったらプレゼント包みにしましょうか?」

「え、どうしてプレゼントだって……」

店員の突然の物言いに驚くレイウンだが店員の男性は笑いながら答え

「だって、お客さんの顔に書いてあるから」

「そ、そうでしたか……、それじゃあプレゼント包みでお願いします」

「はい、少しお時間かかりますが」

「構いません……」

「それでは少しお待ちを」

店員は瞬く間に懐中時計をプレゼント包みにした

「早いですね」

「手馴れてますから」

店員は笑顔で言う「と懐中時計の会計に入った

「(悩んだ末にこれになっちゃったけど、はやて喜んでくれるかな)」

会計を済ませ、時計屋を出たレイウンは今の時刻を確認するために時計屋の

時計を見る、現在の時刻11時54分

「(いけない!、お昼ご飯までには帰るんだった!!)」
レイウンは急ぎ八神家に走った

・・・八神家・・・時刻11時59分

「ハア、ハア、・・・ハア・・・生まれて・・・ハア・・・初めて思うよ・

・
人間やればできるって・・・ハア・」

「(お見事です、主・・・)」

そんな事を口走りながら玄関のドアをレイウンは開けるのであった
まさに人間、本気になればできるという光景であった

夜・・・八神家・・・時刻9時20分

「ふあゝ、そろそろ寝ようかな」

時は速くも夜、明日ははやての誕生日なため、早めに寝ておこうと
思い就寝準備に取り掛かるレイウン、部屋の明かりを消しベットに
入る

「(誕生日か・・・)」

それだけ思い、眠りについた

・・・?????・・・

そこは真っ白い世界だった、レイウンはそこに立っていた

「ここは?」

周囲を見回すがなにもない、地面も白い

ズボンのポケットに手をいれるが待機中のガラドボルグがない

部屋を出てはやての部屋である二階に直行しはやてのいる部屋の扉を行きよいよく開け部屋を見渡すとはやてが寝ているベットの横に黒い服を着た四人の男女が立っていた、そしてその集団の一人が、ピンクの紙をポニーテールに纏めた女がレイウンに向けて手にした剣を突きつけ言う

「貴様、何者だ！」

レイウンはベットにいるはやてが心配しながらも答えた

「僕の名前はレイウン、レイウン・クラフトル・そこにいる八神はやてに

訳あってお世話になっている者です、あなた達は？」

「そうか、主を狙う賊ではなかったか・・・」

そう言う女は剣を下げた、しかしレイウンには彼女達は何者なのか検討がつかなかった

「（剣を持つピンクのポニーテールの人に自分の身の丈ほどある金槌を持った女の子に

手に指輪を嵌めた金髪の女の人に最後は男の人だけど・・・犬耳が生えているのは気のせいかな？）」

そんな事をレイウンが考えている内に四人は一度顔を見合わせ、お互いに頷きあい、レイウンに

向き直り剣を持った女が口を開いた

「驚かせてすまなかった、我々の名はヴォルケンリッター、魔道書「闇の書」に選ばれたわれ等が主、

八神はやてにお仕えする為に存在する為に存在する守護騎士だ」剣を持った女は高らかにそう言った

「ヴォルケン・・・リッター・・・」

レイウンはその名を呟き目の前にいる四人の守護騎士を見ていた

第二話、誕生日そして出現（後書き）

守護騎士、ついに登場です！！・・・このだめだめ作者に感想な
どを

送ってくださるとマジで助かります（修正しました）

第三話、新たな家族（前書き）

二話です、どうぞ

第三話、新たな家族

第三話、新たな家族

「守護騎士・・・つまりあなた達はその闇の書の主に選ばれたはやてを守る

為の騎士達ということですか？」

「いかにも、右からヴィータ、シャマル、ザフィーラ、そして私はシグナムだ」

金髪の少年、レイウンの問いに目の前にいるシグナムと名乗る女は答えた

「それで、その守護騎士がいったい何の用でここに？」

「それは・・・なあ」・・・ん？」

レイウンがだした新たな問いをシグナムが答えようとした時、ヴィータと

呼ばれた少女が遮った

「こいつ、気絶してるみたいだぞ」

「「え？」」

レイウンとシグナムが声を揃えて言う、レイウンは慌ててはやてに近寄り具合をみた

はやてはといえば目をグルグル回しながら気絶していた

「（・・・よかった、気絶してるだけだ、でも一応石田先生に見てもらおう）」

レイウンははやてを抱えて床に立つと四人に向き直り言う

「えーと気絶してるだけみたいですけど、これからはやての担当医師に診せに行きますから

みなさんも一緒に来てください」

「わかった、我々も主の身が心配だからな」

シグナムの了承を受けレイウンははやてを抱えたまま四人を先導し

病院に向かった

「（たぶん、このシグナムさんがリーダー格なんだろうな）」
そんな事を考えながらレイウンは足を動かしていた

・・・海鳴大学病院・・・

病院に運ばれたはやてはしばらくして目を覚ました

「はやて！、よかった、大丈夫ですか？」

「全然大丈夫やで、心配かけてもうたなレイウン」

目が覚めたはやてに心配の声をかけたレイウンに笑顔で答えるはやて
するとすぐ近くにいた石田も安堵の声をかけた

「よかった、はやてちゃん・・・なんともなくて」

「ははは、すんません」

これには苦笑いの返事、石田はその返事にふっと笑うが、その後すぐ
何か怪しそうな者を見るような目で横を見ながらレイウンの耳元で
聞く

「ところで・・・何なの・・・あの人達は？」

言うとは横側を指差しレイウンもその指された方を向くと、そこには
シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人を立っていた
レイウンはここまで来る前に必死で考えた嘘をぶちまけた

「え、えーとあの人達ははやての親戚なんです、そうですよね、は
やて？」

「え、・・・あ・・・そんなとうりなんですよ先生！」

「親戚！？」

親戚という事にもちろん驚く石田、ここでレイウンは最後の駄目押
しをした

「遙々遠い国からわざわざやって来て、はやての誕生日を祝いにあ
んな仮装までしてきて

来てくれたんですよ、ねえ！、みなさん！！」

四人に話をふり、口を合わせてくださいという視線を送る

「え、ええ!! そうなんですよ!!」

「そのとおりです」

その視線にシャルとシグナムが答えてくれて、石田はまだ半信半疑なまま

「はあ、まあそう言う事にしておきましょう」

溜息をつきながら納得してくれた

その後はやてはすぐに退院でき一行は八神家に帰宅した

・・・八神家・・・はやての部屋

「そうかり、この子が闇の書ってもんなんやね」

はやては闇の書と呼ばれた分厚い本を両手で持ちそう呟いた

守護騎士はというと四人ともはやての前で全員跪いている

レイウンは横っちょでそれを見守っている、はやては言葉を繋げた

「物心ついたときからずっと棚にあったんよ、綺麗な本やから

大事にはしてたんやけど」

そう言うとはやては机までいき机の棚から大きな引出し箱を取り

出し何かを探し始める、そこにシャルが口を開いた

「覚醒の時に眠っている間に闇の書の声を聞きましたか？」

「うゝん、あたし魔法使いとちゃうから漠然とやったけど・・・あ

! あった!!」

シャルの問いに答えながら探し物を見つけたはやては捜しもの手に四人の前に行き言った

「わかった事が一つある、闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、

きっちり面倒みなあかんということや、幸い住むところはあるし料理は得意や

、それにこういうのはもうレイウンが来たから慣れとる、ええよな

？レイウン」

そこに事の成り行きを見守っていたレイウンにはやては同意を求めた
「僕が言うのは何なんですけど全然構いません」

レイウンは嬉しそうに答えるとはやては四人に言う

「よし！それじゃあみんなのお洋服こおてくるからサイズ測らせて
な」

そう言うのと巻尺を伸ばした、四人・・・守護騎士はただ唾然としていた

はやてはレイウンと守護騎士達に留守番を任せると服を買いに

一人出掛けていきレイウンは家事に勤しんでいた、するとそこにシ
グナムがレイウンに声をかけた

「クラフトル、おまえはどういった経緯で主はやてと？」

「・・・みなさんにも話したいほうがいいですね」

自分の経緯でここにいいのか話すためにレイウンとシグナム、シャ
マル、

ヴィータ、ザーフィーラはリビングのソファに腰をかける

「先に言いますが僕はここの世界の人間ではありません」

「え、それってほかの世界から来たということ？」

レイウンはシャマルの質問に頷く

「はい、僕は元の世界である事件に巻き込まれてここに来ました」

「元の世界に帰りたいとは思わな一のか？」

この問いはヴィータ

「帰ってもなにもいいことは・・・ありません・・・」

心底悲しい顔をしてレイウンは言った、守護騎士のみんなは野暮な
事を

聞いてしまったと思いこれ以上は聞かなかった

「みなさんはどうなんですか？」

「どうなんって・・・正直わかんね・・・」

「我らは主にこの様にされるのは初めてだから・・・」

「しかし・・・今までの主とは違うという事だけはわかる」

「そうね、はやてちゃんは・・・とても優しい主に見えるわ・・・」

ヴィータ、シグナム、ザファイラ、シャルの順にそれぞれの今の感想を口にした、レイウンは黙りながらそんな四人を見ていた

その後、はやてはほどなくして帰ってきた、両手には沢山の洋服が入った

買い物袋を持ち、守護騎士の四人は戸惑いながらうきうきしながら洋服に手をつけていった、ついでにザファイラは人間の状態から狼の姿に

なり服を着ようとはしなかった、レイウンは狼になっていたところを見て

「犬になった・・・」

「違う、狼だ」

というやり取りをするのであった、ついではやても犬と言った

夕飯の時、六人で食べる食事、守護騎士は食べ物を食べるおろかお箸を

使うのに手こずっていたがシグナムとシャルは慣れないながらも使って

いたがヴィータは途中で諦めたかお箸を手で鷲掴みにして食べていたザファイラは狼なのでそのまま口でパクパク食べていた

夜ご飯の片付けを終えたら、はやてはヴィータと一緒に風呂に

入らないかと誘った

「ヴィータ、一緒にお風呂入ろ」

「え？・・・その・・・あたしは一人で入る・・・から・・・」

そんな遠慮がちなヴィータの背中をシグナムが押した

「そう言わずに一緒に入れヴィータ、主に背中を流してもらおうとい
い」

「あ・・・うん」

「ほな、行こか」

はやてはうきうきしながら、ヴィータは戸惑いながらお風呂場に行
った

ふとレイウンが見たところシグナム、シャマル、ザファイラの三人
はその時、笑っていた

みんながそれぞれ自分の部屋に行く前、レイウンは悩んだ末に買った
誕生日プレゼントをはやてに渡した

「はやて、誕生日おめでとう、これプレゼントです」

「わあ、ありがとうなレイウン、さっそくあけてもええか？」

「はい」

はやてはプレゼント包みを綺麗にあけ、中身の懐中時計を手取る

「懐中時計・・・、ありがとうなレイウン！これ、うちの一生の宝
物にする！」

「ほ、本当ですか！、それはよかった！」

見事にはやては喜んでくれてレイウンは嬉しさを顔の表すのであった

その後、レイウンは自分の部屋に戻りベットに腰をおろし

今日の出来事を思う

「（今日は本当に色々あったな、さあ明日からもっと賑やかになる

ぞく」

明かりを消しベットの毛布の中に入り思う

「(でも・・・僕は・・・いいのかな?・・・このまま黙っていて?

・・・もしみんなを巻き込んだら?・・・よそう、奴等はまだ現れない・・・きつと・・・)」

そこでレイウンは寝付いた、彼は自分の想いを綴りながらも今ある幸せの中で生きるのであった

第三話、新たな家族（後書き）

どうでしたか？、次回は守護騎士達とのふれあいを書こうと思います！、これからは是非読んでください！！！！

第四話、フレアイ（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした！！、面白くないかもしれませんが、第四話どうぞ！！

第四話、フレアイ

第四話、フレアイ

・・・ある管理外世界・・・

夜、涼しい風が吹く草原の中、その草原に立つ黒髪の少年は口を開いた

「一日待ったが・・・本当に夜が明けないんだな、この世界」
そんな事を言う少年の言葉を返したのは少年の相棒だった

「はい、本当の夜が明けませんねマスター」

「世の中はやっぱり広いな、ヘイザーノクト？」

「そうですね、それにしても夜空がとても綺麗です」

「ああ、・・・よし！次の世界に行くか、ヘイザーノクト」

そお少年は自分のデバイスに言うど踵をかえし草原を歩き始めた

・・・海鳴市・・・

今日も平和な海鳴市、空は青、そろそろ冬の季節になりだんだん寒くなつて

きているにもかかわらず今日は暖かつた

「うん、今日も晴れだ、やっぱり晴れだと元気がでるな」

青空の下、洗濯物がいっぱい入った洗濯籠を手を持った金髪の少年が言った、

少年の名前はレイウン・クラフトル、ある理由からここ八神家にお世話になっている居候だ

「それにしても多くなつたな、洗濯物・・・」

そう言うど手に持っている洗濯籠に目をやる、ほとんど女性の物だちなみにザフィーラは常に狼モードなので洗濯物は一切出していない

「でも以前に比べて全部の所に干せるから、なんか干し終わると満足感がでるな」

「さっきからなに一人で喋ってんだ？レイウン」

声のするほうを見ると赤髪の少女、ヴィータが立っていた

「今思った事を口にしただけですよ、ヴィータ」

「ふーん、まあいいけどな」

洗濯籠から洗濯物を手に取り干し始めるレイウン、作業をしながら口を開く

「ヴィータ、今日ははやての診察日ですよね？」

「ああ、今日はあたしとシグナムとシャルがついて行く」

しばらく考えたあとヴィータは不安げな声でレイウンに聞いた

「なあレイウン、はやての足・・・治るかな？」

その言葉を聞くとレイウンは作業する手を止め、ヴィータの頭に手を置き答えた

「大丈夫ですよ、きっと、今は石田先生達を信じましょう」

「うん」

ヴィータは小さく頷くと家の中に歩いて行った、レイウンは作業に戻った

「ふう・・・よし、終わり」

ようやくすべての洗濯物を干し終わったレイウンは隣に置いてある洗濯籠を手を持ち

家の中に入る、入るとすぐ金髪の女性、シャルが味噌汁の入ったお椀を持って話しかけてきた

「レイウン君、はい、作ってみたから飲んでみて」

「あ、また作ったんですかシャルさん、それじゃあ・・・」

シャルから味噌汁が入ったお椀をレイウンは受け取り、飲む
近くのソファに腰をかけていたシグナムと床に座っていたザフィー

ラがそれに視線をむける

二人のその視線からは心配という念も入っている

「……シャルさん、こんどはお味噌の配分を間違えましたね」

「え！？、ちゃんとお玉一杯分……」

「シャルさんの一杯は多すぎるんですよ、それと隠し味にチョコレートを入れたでしょう？」

「それもわかったの！？」

「やつぱり……、なんでチョコを？」

「ほら、はやてちゃんもこの前作った料理にも入れていたから」

「カレーとお味噌汁は別物です！！、はあくこれじゃ上手くなるのはまだまだかかりそうですね」

ここでシグナムとザフィーラはいつも思う、レイウンの舌は何か特殊な物でできているんじゃないかと

よく見る光景だが見る者にとってはどうにも気になる事であった
ちなみにシャルは料理が下手であるため自分で練習をしてはレイウンに味見と指摘をしてもらっているのだ

「うべえ！！」

台所から突然悲鳴が上がった、みんなが行くとお碗を手に持ったヴィータが倒れていた

レイウンが慌てて抱き起こす

「ヴィータ！、大丈夫ですか！？」

「ま……まず……」

どうやらこの味噌汁を飲んだみたいだ、ついでにまともな舌を持つ者が

飲むとこうなるのである

「みんなだないしたん？、あれヴィータどうしたんや！？」

そこにこの家の大黒柱ともいえるべき人、八神はやてが来た
はやてはヴィータの惨状を見るなり心配の声を上げる

「シャル！、胃腸薬を！はやく！！」

「は、はい!!」

「しっかりしろ、ヴィータ!」

シグナムがシャルマルに指令をだしザフィーラは声をかける、そんな中レイウンは思う

「(そういえば、守護騎士のみなさんが来てから、こおいうことがいっぱいあったな・・・)」

守護騎士が来てからはや数ヶ月、レイウンはその数ヶ月の事を記憶から思い出す

ある日、ザフィーラと

「レイウン、お前は戦いをした事があるだろう」

突然のザフィーラの言った事に驚くレイウン

「え!、なんでそう思うですか?」

「普段の手際の良さと体つきから見ても、それとあえて言うなら目だな」

「目ですか?」

「ああ、お前の目は何かとてつもない者と戦っていたと語っているように見える・・・」

ザフィーラの指摘にレイウンは視線を逸らしながら答える

「そんな事ありませんよ・・・、戦いなんて・・・したくもないし、・・・やった事ありません」

「・・・そうか、すまなかった、私の思い過ぎだったようだ」

「いいえ、気にしないでください」

ある日のヴィータと

「ヴィータ、散歩に行こうと思うですが一緒に行きませんか?」

「ああいいぜ、・・・ただ」

「ただ？」

「ただ・・・その・・・」

なかなか言い出せないヴィータの言葉をレイウンはすぐにわかった

「ちゃんと途中でアイスを買ってあげますよ」

「本当か!？」

「もちろん」

「そうと決まれば早く行こうぜレイウン、ほら早く」

「ヴィータ、喜びすぎですよ」

子供のように喜ぶヴィータに手を引っ張られながらレイウンは散歩に行くのであった

ある日のシャルと

リビングのテーブルに置かれた大量の本や何かの資料集を見てレイウンは口を開いた

「あのシャルさん、この大量の本などは一体？」

「ああこれ、はやてちゃんが騎士甲冑を作ってくれるから、そのための資料」

「騎士甲冑？」

「簡単に言うと戦闘の時に着る防具服のような物よ、せっかくだからはやてちゃんに頼んで作ってもろう思ったの」

大量にある本のなかから一冊を手に取りながらレイウンは聞いた

「作ると言ってもどうやって作るんですか？」

「はやてちゃんが闇の書の主だから、はやてちゃんが頭のなかでイメージした物

を私達が自分の魔力で形成するの」

「なるほど、だからこおいう資料を見てイメージを作るというわけですね」

「ええ、かっこいいのを作るって張り切っちゃって」

「（騎士甲冑・・・僕でいうならバリアジャケットみたいな物か

な、
でも戦う事なんてきつとおきないだろうな」

ある日のシグナムと

その日、一人で夜風に当たりながら星を見ていると、そこに

「クラフトル」

「シグナムさん、どうしたんですか？」

「なに、私も星を見ようと思ってな」

「そうですか」

そう言うのと暫く二人で星を見ていた

「今でも不思議に思う」

不意にシグナムが口を開き、レイウンはシグナムを見る

「え？」

「主はやては今までの主と・・・何もかもが違っていた」

夜風が二人の髪の毛を揺らすなか、シグナムは言葉を繋げる

「主はやての我々の対応はこれまでの主のように高圧的で

あったり、道具のように扱う者でなく、まるで・・・家族にするような物だった」

「・・・・・・・・」

「ふっ、我ながら今さらなんでこんな話を話したんだろうな、
もしかすると誰かに言いたかったのかもしれないな・・・」

「・・・今はどうですか？、昔と比べると」

「そうだな・・・、すごく・・・幸せだ」

昔のような戦いに追われる日々がなくなったヴォルケンリッター、
その一人の烈火の将

シグナムは初めて幸せという言葉を口にした、レイウンはそんなシ
グナムに思い切って言う

「シグナムさん、・・・一つ、お願いがあるんです」

「なんだ？、クラフトル」

「僕はもしかしたら・・・急にいなくなるかもしれません」

「な!？」

レイウンの唐突な言葉に息を呑むシグナム、吹いていた夜風が急に吹き止む

「どおいうことだ？」

「ごめんなさい、理由は言えません、けど我儘を承知でお願いします、

僕がいなくなったら・・・はやてを・・・お願いします」

出来る限り傍にいたと言ったが、こればかりは誰かに頼んでおかなければならないと

思い、レイウンはシグナムに頼んだ

「・・・わかった、ただし条件がある」

「なんですか？」

「もしお前がいなくならなかったら、お前の抱えている物を話して貰おう」

「!・・・・・はい、必ず」

そおレイウンが言うとき家のほうからはやての声がした

「レイウン、シグナムー、ご飯出来たからこっち来てやー」

「はい、主はやて、ただいま行きます」

はやてに返事を返し、家の中へと歩きはじめるシグナムは家に入る前に

レイウンに向き直り言う

「だがなクラフトル、私・・・いや、我々は少なくともクラフトルにここに居て欲しいと思っている、それを忘れないでくれ」

レイウンは目を見開き家の中に入っていくシグナムを見ていた

「（居て欲しいと思ってきている・・・）」

さっき言われた言葉が頭に出てくる、そこに

「おいレイウン!、はやく来ねーとあたしがお前の分食っちゃもうぞ!」

「あ!、いきます、いきますからそれだけはー」

慌てて家の中に入っていったレイウン、その時、星の一つが美しく輝いていた

第四話、フレアイ（後書き）

最初に出てきた少年はオリジナルキャラの彼です、次回はついに戦闘かもしれません、どうかこれからも読んで下さい、お願いします
！！

第五話、発端（前書き）

ついにストーリー本格化です、それよりうまく書けているかな、とても不安ですがどうぞ

第五話、発端

第五話、発端

夜

海鳴市・・・八神家・・・

慣れた手つきで少年は作業をしていく、次々とターゲットを畳んでいき、ついに・・・

「よし、洗濯物を畳み終えたし夕食の支度でもしますか」

「本当によく働くな、レイウン」

とザフィーラが感心したように言う、ちなみにはやて、シグナム、シャル、ヴィータははやての診察に行っており今はいない

「働くのが好きなんです、あ、ザフィーラさん、そろそろみなさんが帰ってくる頃ですよ？」

壁にかけられた時計を見ながらレイウンは聞く

「ああ、まもなく帰ってくるはずだ」

「ただいまー！」

「うわさをすればですね、お帰りなさい」

話をしていればはやて達が帰ってきた、レイウンは返事をしながら玄関へいく

「ただいまレイウン」

「ただいま」

「ただいま、レイウン君」

「はやてにヴィータにシグナムさんにシャルさん、お帰りなさい・・・？」

帰ってきた四人にお帰りを言うとレイウンはシグナムがどこか暗い顔をしている

事に気がついた

「シグナムさん、どうしたんですか？」

「ん、・あ、いやなんでもない、ただいまだクラフトル」
一連の行動を終わらせ、この後何もなく夕食をみんなで食べ、雑談をしたり

テレビを見たりしたがレイウンは何かが違うと感じていた

「やっぱり何かおかしいな」

そろそろ寝ようかとみんな部屋に戻り、レイウンも自室に戻り
ベットに腰を降しずっと思っただけを呟いた

「（何かあったのかな？、どう思う？ガラドボルグ）」

レイウンは念話で自分のデバイス・ガラドボルグに聞く

「（きつと何かあったのでしょうか、主、明日シグナム殿に直接聞か
れてみては？）」

「（そうだね、そうするよガラドボルグ）」

そして枕元に置いてあった本を手に取り読み始めた、ついでに全部
はやてに

おすすめされた本である

二時間後・・・

面白い本だったため全部読みきってしまったレイウンは時計み目を
やり

「（もうこんな時間・・・みんな寝付いたでしょうね、僕も寝よう
か・・・？・・・）」

そんな事を考えていたら誰かが玄関のドアをととても静かだが開けて
出て行った気がした

レイウンは咄嗟に守護騎士達の魔力反応を調べる

「（四人とも外から？、・・・ガラドボルグ、反応追える？）」

「（はい、まだ遠くには行ってません）」
ベットから降り椅子に掛けてあった白いジャンパーを着てレイウンも家を静かに出て四人を追いかけていった

海鳴り市・・・海岸公園・・・

海岸公園で四人を見つけたレイウンは近くの茂みに隠れ耳を澄まして四人の会話を聞いた

そしてレイウンは・・・悲しい真実を聞いてしまった

「このままだと・・・主はやては死ぬ・・・」

シグナムの一言が茂みに隠れているレイウンを凍らせた、シャマルは知っていたのか暗い顔を俯かせた、ザフィーラは驚いて顔を上げ、ヴィータは目を剥いて驚いていた

レイウンは真っ白になりかけた思考を巡らせた

はやてが・・・・・・死ぬ？・・・

なぜ？どうして？病気が悪化したから？それとも新しい病気にかかってしまったとか？

そんな事を考えているとシグナムが今日の診察結果を話すと同時に理由を説明しはじめた

「主はやての足の麻痺は・・・病気などではなかった・・・」

「（え？）」

「闇の書の呪い・・・主はやてが生まれた時からあった闇の書は、主の体と密接に

繋がっていた・・・抑圧された強大な魔力はリンカーコアが未成

熟な主の体を蝕み、

健全な肉体機能おろか・・・生命活動さえ阻害していた」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「（つまり・・・まだ闇の書の所有者になっていないはやての体を闇の書が

蝕んでいるという事か・・・・・・・・そして・・・このままそれがつづけば・・・）」

3人は黙ってシグナムの話聞いており、レイウンは情報を整理しシグナムはさらに説明を続ける

「そして・・・主が第一の覚醒を迎えたことで・・・・・・・・それは加速した、

それは私達四人の活動を維持するため極僅かとはいえ主の魔力を使用して

いる事も無関係とはいえない筈だった・・・・・・・・」

「な・・・・・・・・！」

シグナムの説明によりついにザフィーラが驚きの声を上げた説明を聞き終えたレイウンは思う

「（それに・・・あんまり時間も残されていない・・・なんで・・・

どうして？・・・はやてが何をしたっていうんだ！！あんなまだ幼い子から

命まで取ると言うのか！？、どうすれば？・・・っ！・・・・・・）」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

守護騎士四人の沈黙が訪れる、だがその沈黙をすぐに破ったのが俯いていたヴィータだった

「助けなきゃ・・・・・・・・」

3人がヴィータに顔を向ける

「はやてを助けなきゃ！！、シャマル！、シャマルは治療系得意なんだろう！？、

そんな病氣ぐらい直せよー!!!」

泣きながらシャルの肩を掴み叫ぶヴィータ、しかしシャルは目を閉じ言う

「ごめんなさい、わたしの力じゃ・・・どうにも・・・」

シャルの言葉には悔しさという念も入っていた、自分にもっと力があればという

気持ちを噛み締めているのであろう

「なんでだ・・・なんでなんだよー!!!、うつ・・・うつ
う・・・うつ」

どうしようもないかもしれないこの状況に泣き始めるヴィータ、そんな中ザフィーラがシグナムに言う

「シグナム・・・」

「我らにできる事はあまりにも少ない、だが」

シグナムは自分のポケットから剣の形したアクセサリー、待機中の自分のデバイスを取り出し言う

「主の体を蝕んでいるのは・・・闇の書の呪い」

その言葉を聞いたシャルはハッと顔を上げて言う

「はやてちゃんが、闇の書の主として真の覚醒を得れば!」

「我らが主の病は消える、少なくとも・・・進みは止まる!」

とザフィーラ

「はやての未来を血で汚したくないから人殺しはしない、だけど・・・
・

それ以外なら・・・なんだってする!!!」

とヴィータが言う、ここまで聞いてようやくレイウンが四人がなにをしようとして

しているのかがわかった、四人いや守護騎士達は本来の使命であるリンカーコアの魔力蒐集

をやるつもりでいることに

「(みんな、戦うつもりでいる・・・はやてを助けるために・・・
なら・・・僕も・・・)」

と茂みから体をだそうとした瞬間、ある言葉が頭の中に出てきた

戦うのか？

また人を傷つけてしまうのかと？、と

自分もデバイス・ガラドボルグを持つ騎士だ、しか自分は戦いにおいて致命的な欠点がある

それを人を傷つける事への恐怖心だった、人が相手じゃないならまだわからないが

人を傷つける事には、今はどうかかわらないが恐怖心を抱いていた以前の自分だったら人に剣を向けるのでさえ難しいであろう

それに、はやてがこの事を知ったらなんて思うだろうか？、自分の予想が正しいければ

とても悲しむであろう、何の関係もない人達を傷つけてまで生を得たいと思うか？

いいや、絶対に思わないであろう、この事を知ったら絶対に止めるであろうと、

「（僕は……どっちを選べばいいんだ？……はやてを助きたいし、はやての意思も尊重したい……）」

はやての意思を尊重し今ここで四人を止めるか……いや、自分には止める権利すらない、

逆に助けようと四人に事情を打ち明かし協力しようとしても人を傷つける事に恐怖心を

抱いている自分は単なる足手まといでしかない、今自分に出来ることはただ立ち去るだけだ

「（僕は……また……）」

そう思い静かに立ち去ろうとすると

．．．．．ペキツ．．．．．

「(しまった、小枝を)」

そう、踏んでしまったのである、無論四人がこの踏んだ音に気付かないはずがない

「誰だ！」

シグナムが身構え叫ぶ、3人も同じく身構える

「(出るしかないな．．．．．)」

レイウンは覚悟を決め、茂みから出て四人と相対した

第五話、発端（後書き）

どうでしたか？、次回は戦闘です、あゝうまく書けるかな（不安）、
どうぞこれからも読んで下さい

第六話、白銀の鎧、かがやく魔剣（前書き）

とにかくがんばって書きました、どうぞ！！！

第六話、白銀の鎧、かがやく魔剣

第六話、白銀の鎧、輝く魔剣
夜

海鳴市・・・海岸公園・・・

波が音が聞こえる海岸公園、この公園には今、少し前に家族になった者達がいた

聞きたくもなかった悲しい真実を聞いてしまった少年と真実を受け止めそれに抗おうとする

四人の守護騎士、少年は四人の守護騎士達と向き合っていた、四人は少年に驚いていた

「レイウン」

「レイウン君・・・」

「・・・」

「クラフトル、今の話・・・全部・・・」

「はいシグナムさん、全部聞いていました・・・」

「そうか・・・」

残念そうに言うレイウンにシグナムはどこか失敗したような顔をして答えた

「やはり顔にだしていたのが原因だったか・・・我ながら不甲斐ない」

「様子がおかしいから後をついていったんです、でもまさか・・・こんな事に・・・」

「・・・」

「シグナムさん」

「なんだ、クラフトル？」

すでにわかっていたがレイウンはそれでも聞いた

「戦うつもりですか？」

「ああ、主との誓いを破る事になるがな」

「戦い以外に・・・はやてを助ける方法はないんですか？」

「・・・残念ながら・・・奇跡でも起きないかぎり、ない」

「そんな・・・」

すでに戦って蒐集活動をするしか方法がない、レイウンははやてを助けないという思い

のほかに四人に危険な目に遭って欲しくないという思いあった
四人は強いと思う、だが戦いはいつも危険と隣合わせ、何が起るかはその時のよる

だから今はあえて他の方法がないかに賭けたかったがそれもないに等しかった

「クラフトル、・・・主はやてには・・・この事を・・・」

「黙っていてくれ・・・そう言いたいんですか？」

レイウンの言葉に黙って頷くシグナム、しばしの静寂が訪れた、
聞こえるのは波の音だけ・・・、そんな中、ヴィータがレイウンに

近寄り彼の服の袖を掴みながら言った

「レイウン、頼む、はやてには黙っててくれねーか」

「ヴィータ、・・・でも」

「大丈夫、なんてったってあたしらはベルカの騎士だ、心配はいらねーよ」

ヴィータは自信たっぷりに言い、シグナムも口を開く

「クラフトル、頼む、我らは主を・・・主はやてを助けたい」

「レイウン君、お願い・・・」

「頼む、レイウン」

ヴィータにつづいて、シグナム、シャマル、ザフィーラに言われた
レイウン

は少し考えてからその口を開いた

「一つだけ・・・約束してください」

「なんだ？」

「絶対に・・・無茶だけはしないと・・・約束してください」

「わかった、闇の書に仕える守護騎士、ヴォルケンリッターの名の下に誓おう、

決して……無茶はしないと」

「ええ」

「ああ」

「うむ」

「ありがとうございます、はやてには何か言って誤魔化しておきま
すから、

みなさん、どうか……お氣をつけて」

「ああ、すまないなクラフトル」

「いいえ」

「我らはこれからいらない時が増えるが、その時は主はやてを頼む」

……海鳴市……

守護騎士は蒐集活動に行き、レイウンは一人、家に向かって歩いて
いた

そこに彼のデバイス、ガラドボルグが話しかけてきた

「(主、これでよろしかったんですか?)」

「(……まだわからないだ、これでよかったのか……、
だけどこれだけはわかる、結局僕はまた……戦いから逃げたんだ)
」

「(主、それは違います)」

ガラドボルグはそれを否定した

「(戦わなくていいならわざわざ戦う必要はありません、それに主は
はやて殿の傍にいたと言ったではありませんか)」

「(……)」

「(決してご自分をあまり責めないよう、主は……もう傷つく事は

なくてもいいんですから)」

レイウンがこの世界に来る前に起きた出来事があって以来、ガラドボルグは

レイウンを心配するようになった、彼にはあまり辛い目にあってほしくない

という想いがガラドボルグにはあった

「(それでも…….それでも!!…….ごめん、

気を遣ってくれて言ってくれてるのに)」

「(いいえ、さあはやく帰りましょう、もう夜は遅いです)」

「(うん)」

そう言うと、駆け足にレイウンは家に帰っていった

…….四日後…….

守護騎士がはやてに内緒で蒐集活動を開始してからはや四日がたった、あれから

守護騎士が家を空けるのが多くなった、レイウンははやてにみんなようやく

やりたい事ができたと言ってなんとか誤魔化している、守護騎士が帰ってくる

怪我はないが顔にはやはり少しの疲れが見えた、しかしこの日の夜、困った事が起こった

「うーん、困ったな」

「?、どうしたんですかはやて」

冷蔵庫の前で困った声をだしたはやてにレイウンは声をかけた

「それがな、明日使う食材がないんよ、明日はスーパー休みやし…….」

「あ、だったら僕が買いに行きますよ、今ならまだ間に合いますし、それにもうすぐみんなも帰ってきますし」

「ほんまにすまんなくレイウン、はいこれお財布」

はやてから財布を受け取るとレイウンは玄関へと行く、はやても見送るために玄関へ

「もうすこししたらみなさんが帰ってきますんで、それじゃあ行ってきます」

「氣いつけてなレイウン、レイウンが帰ってきたらご飯にしようか」

「はい」

そう言うレイウンは靴を履き玄関を出て外に出てった

・・・他世界・・・

砂漠が広がる世界、もう夜になりかけているこの世界に二人の守護騎士がいた

一人は帽子を被り緑の法衣に身を包んだ湖の騎士シヤマルと赤の色をした騎士甲冑に

身を包み、うさぎの装飾がされた帽子を被りハンマー型デバイス、グラーフアイゼン

を手に持った鉄槌の騎士ヴィータが立っていた

「ページはどの位埋まった、ヴィータちゃん？」

「だめだ、やっぱりどでかい奴とか倒さねーと全然たまんね」

「そう、そろそろシグナムとザフィーラが来るころだと思うんだけど」

「ああ、あーそれより腹減った、はやく帰ってはやてのギガウまご飯が食べてー」

ヴィータがそんな愚痴をこぼしている間に他の二名が戻ってきた「遅くなってすまない、待ったか？」

白の上着とピンクの騎士甲冑を纏い、剣型デバイス、レヴァンティンを手にもつ

烈火の将シグナムと人間形態の盾の守護獣ザフィーラが来た

「今日はもう終わりだな、帰るとしよう」

「ええ、今頃はやてちゃんとレイウン君が夕食を作って待っててくれてるわ」

「今日のご飯なんだろうな」

「今日は多分、おでんだったような」

四人は気付いてはいなかった、自分達の砂の中に潜む原生生物が自分達を

狙っていたことに、四人が転移魔法をしようとした瞬間、そこ一帯を魔力封鎖結果

がつつみ、自分達のテリトリーに入った獲物を狩るため原生生物達が一斉に砂中から出てきた

・・・海鳴市・・・

スーパーで買った食材が入った袋を片手に歩道を歩くレイウン、もうすこしで

家につくところだった

「（ふうー、だいぶ冷えるな、・・・あ、ついたついた）」

家に到着し玄関に入りレイウンは違和感を覚える、もう帰ってるはずの四人の

靴がないことに

「（え、おかしいな？、みんなまだ帰ってきてない）ただいま、はやて？」

靴を脱ぎリビングに入るとそこ泣いているはやてがいた、泣いているはやてを

見てレイウンは袋を投げ置き、慌ててはやてに駆け寄る

「はやて、どうしたんですか!？」

「あ、レイウン・・・・・・・・」

「みなさんは？」

「それがまだ帰って来たないんや」

「（何かあったのかな？、・・・・・・・・まさか!？、・・・・・・・・？）はやて

？」

万が一の事態が起きたんじゃないかと考えていたレイウンははやてが震えている事に気がついた

「なんか、嫌な感じが止まらへん・・・みんな」

レイウンはそんなはやてを見て、ある行動にでた、少年は車椅子に乗った少女の体を

そっと抱き寄せた、はやてはレイウンの突然の行動に泣きながらも驚いた

「え？、レ・・・レイウン？」

「大丈夫ですはやて、・・・僕が捜しに行きますから、だから・・・

・・・泣かないでください」

その言葉にはやてはどっと安心感がでた、そして涙を拭き言う

「うん！」

・・・海鳴市・・・

家をでたレイウンは人気のない道を走っていた、そして再び手に取る自身の剣に言う

「（ガラドボルグ！、みんな位置、特定できた？）」

「（はい、大体の位置が特定できました、しかし主）」

「（なに？）」

「（よろしいのですか？、戦いになるかもしれませんよ？）」

「（今は恐怖を感じない、みんなを助けたいという気持ちでいっぱいだ、

たとえ奴らに見つからうが関係ない、ガラドボルグ、力を貸して）」

「（承知しました、我が力・・・存分にお使いください、主！！）」

「

家族の危機、そしてはやてに涙により少年は再び戦いへと赴くのであった

・・・他世界・・・

夜空の星が輝く砂漠の中、四人の騎士達は苦戦をしいられていた龍に似た原生生物、砂龍はその多い数でただでさえ消耗していた四人の体力を削り取っていた

なおかつ封鎖結果があり、それを破壊しなければここから逃げる事もできない状況である

「くっ、まさか封鎖結果を張る生物がいろいろとは！」

「キリがねえ！！」

「シグナム、ファルケンは！？」

「こう敵の数が多くては・・・無理だ」

封鎖結果は並みの魔法や技で破壊できるものでわらない、それ相応の威力を誇る大技でないと

破壊不可能である、それに敵の数が多く、だす隙さえも与えてわくれない

状況は絶望的だった、そんな中、砂龍の一体を打ちのめしたザフィーラが声を張り上げた

「ヴィータ！！、後ろだ！！」

「え！？、うわぁ！！」

事すでに遅し、ついに砂龍がヴィータを尻尾で吹き飛ばしたのだ、砂の上に倒れこむヴィータ、

無防備になったヴィータに砂龍がその猛牙が迫る

「まずい、ヴィータ！！」

「ヴィータちゃん！！！！」

「ヴィータ！！」

シグナム、シャマル、ザフィーラが声を上げる、しかし三人とも位置的に

間に合わない位置に立っていた、ヴィータは悔しげに思う

「（くそ！、ここで終わりかよ・・・はやて・・・レイウン！！！！）」

家にいると思う二人の名を心の中で叫び、ヴィータは目を瞑った

「グギャー……！！！！」

しかし声を上げて倒れたのは砂龍だった、ヴィータは何が起こったのか目を開け驚く、

そこにはここにいないはずがない少年が立っていた、シグナムとシャマルとザフィーラも

それを見て驚いていた、いつも戦いとは無縁の優しさを持っていた傍から見れば

その優しい目からは戦いを感じないでいた少年が……四人にとって大切な家族の一員が

そこに立っていた、白銀の鎧を身に纏い、銀の大剣を右手に持った騎士が、そこに立っていた

砂龍は突然の乱入者に混乱していた、レイウンは倒れてるヴィータに手を伸ばし言う

「大丈夫ですか？、ヴィータ」

「あ、ああレイウン」

ヴィータは差し出された手を取りながら答えた、どうやら大丈夫そうだ

レイウンは無事を確認するとみんなに念話を送った

「（みなさんも大丈夫ですか？）」

「（クラフトル、助かった、とりあえず今はこの状況をなんとかしたい、

手を貸してくれないか？）」

「（はい、もちろんです、みなさんはまだいけますか？）」

「（ああ、まだやれる！）」

「（ええ、まだ戦えるわ！）」

「（無論だ、これしきの事で倒れるわけにはいかぬ）」

「（ああ、これからだぜ！）」

レイウンが来たのか守護騎士達の顔に活力が戻っている、砂龍達も動き始める

シグナムが動く、自分のデバイス・レヴァンティンに向かって叫ぶ
「レヴァンティン!!!、カートリッジロード!!!」

「Explosion」

剣から鳴り響く電子音と共にレヴァンティンから葉莢が排出される、その瞬間、

剣の刃の部分だけを包み込むように燃え盛る、そして

「紫電一閃!!!!」

叫び、砂龍に一閃、斬られた砂流はそのまま地面に倒れ動かなくなる
シャルマルが動く、指輪の形をしたデバイス・クラールヴィントに口付けをしよう

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、レイウンに優しい風が包み込み、体に負って

いた傷を治し、消耗した体力を癒す、これはシャルマルが最も得意とする回復魔法「静かなる癒し」

ヴィータが動く、手に持つ鉄の伯爵・グラフアイゼンにむかって叫ぶ

「アイゼン!!!」

「Raketenform」

グラフアイゼンをラケーテンフォームにしさらに叫ぶ、

「アイゼン!、カートリッジロード!!!」

「Jawohl!!!」

グラフアイゼンから葉莢が排出され、グラフアイゼンのハンマーの部分についてある

ブースターが点火され、その勢いを利用し砂龍に振るう

「ぶち抜け!!!!!!」

ヴィータの怒号と同時に体にぶち当たり、砂龍は他の砂龍も巻き込んで吹き飛んだ

ザフィーラが動く、両腕を拳を握り締め足元に白い魔法陣が展開され
「貫け!、鋼の軛!!!!」

そう言い放つと突如、砂龍達の足元から棘状の白い柱が砂龍達を貫いた

最後にレイウンが動く、ガラドボルグを構え、砂流に突撃しそのまま叩き斬る

そのまま何体か切り伏せた後、なにかに気付く

「(おかしい、数が増え続けている、どこかにリーダーが……見つけた!!!)」

辺りををよおく見渡すといっぱいいいる砂龍の中に角が生えている奴がいた

レイウンはリーダーに向かって飛びながら叫ぶ

「ガラドボルグ!、カートリッジロード!!!!」

〔御意〕

ガラドボルグから葉莢が排出される、レイウンは

リーダーの目の前で着地するとガラドボルグを逆手に持ち思いつきり振り上げる

「クウエイクエッジ!!!!」

振り上げられた刃から銀色の光がでていた、リーダーはそのまま断末魔を上げ崩れ落ちる

案の定、リーダーを倒された砂龍達は地面に潜って逃げていった、結果も程なくして消えた

レイウンはどこかやり遂げた顔をしてガラドボルグを鞘にしまった「やった、……守ったんだ……」

恐怖を一時的に脱し戦ったレイウン、だがこれは四人に自分が戦えるという事をばらす事でもあった

第六話、白銀の鎧、かがやく魔剣（後書き）

初めての戦闘でしたけどどうでしたか？、オリジナルのデバイスや技などに関してはもう少し話が進んだらで、それ以前に窓が明るくなってる、カラスの鳴き声がする、もう朝……（完徹）次回はずいぶんレイウンが……バタ（倒れた）

第七話、始まりへの扉（前書き）

なんか会話が変なような、前から変か（笑）、とにかく第七話・・・
・・・どうぞ！！

第七話、始まりへの扉

第七話、始まりへの扉

・・・他世界・・・

「レイウン！、大丈夫か！？」

砂龍との戦闘を終えて真っ先にレイウンの下にやってきたのは鉄槌の騎士ヴィータだった

ヴィータはレイウンに近くなり心配の声をだした

「大丈夫ですよヴィータ、それより無事でよかった」

そう言うヴィータの頭を帽子ごと撫でる、するとそこにシグナム、シャル、

ザフィーラの他の三人も来る

「レイウン君、あの・・・そのあなたは・・・一体？」

そう、今、シャル言った事が守護騎士四人の疑問だった、なぜレイウンが

そのような格好をしてここにるのが四人には不思議でしょうがなかった

レイウンの格好は通常のバリアジャケットとは全然違い、首から上以外の

全身が鎧で包まれている、腰にある鞆には先ほどしまったガラドボルグがしまわれている

「それは後で必ずお話します、今は帰りましょう、はやてが心配して待っています」

「うむ、確かにな」

「わかったわ」

「ああ」

「では、戻るとしよう、ずいぶん遅くなってしまったからな」

今も家で四人や自分を心配しているはやての為に五人は今帰ることになった

海鳴市・・・八神家・・・

「シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、シグナム、どこ行ってたんや！？、すごく心配したんやで！！」

家に帰った四人を真っ先に出迎えたのは勿論、この家の主であり、闇の書の主でもある車椅子に

乗った少女、八神はやてである、今の彼女からは心配という名の怒りを感じられる

「ごめんなさい、はやてちゃん」

「すまない、主」

「ごめん・・・なさい、はやて」

「申し訳ありません、主はやて」

守護騎士の四人は即座に謝罪の言葉を言い、レイウンはワケを行った「みんな、道に迷ってたらしくて、本当に見つけるのに苦労しました」

「・・・なんや、そうやったんか、みんな、もうこないな事アカンからな」

「「「はい」」」」

言うなりしばらくみんな黙ってしまふ、そんな状況を見かねたレイウンは

「さあ、遅くなりましたが夜ご飯にしましょう！！」
パンツ、と手を叩きながら言った

夕食を食べ終えたレイウンはベランダに出て夜空を見ていた、そして今日の戦闘について振り返っていた

「（今日の戦いは不思議と恐怖を感じなかった・・・、なんでだ

ろう？

相手が人じゃなかったから？、それとも・・・みんなが危なかったから？

いずれにせよ次はこうわいかないかもしれない・・・」

「レイウン」

突然の呼び声に考えを中断し振り返るとはやてがいた、車椅子のレバーを前に倒し隣にくる

「何しとんの？」

「星を・・・見てました」

「そか」

しばらく二人で星を見ていたらはやてが口を開けてきた

「レイウン、ありがとうな」

「え？」

「みんなを捜しだしてくれて、それと・・・励ましてくれて・・・」

「いえ気にしないでください、あ、それとあの時は抱きしめたりしてすいませんでした」

若干、頬を赤くしながら謝るレイウンにはやては慌てて言う

「そ、そんな事あらへんよ！、・・・（うちも嬉しかったし）・・・

・

「え、今なんて？」

「ああ！、何でもないん！、とにかくありがとうや！」

頬を赤くしながら家の中に入っていくはやてを見送りながらレイウンはポツリと

聞こえたはやての言ったことがなんだったのか考えていた

深夜、レイウンは自室で椅子に座りながら黙っていると念話が飛ばされてきた

「（クラフトル）」

「（シグナムさん？）」

「（話を聞かせてもらいたい、海岸公園まで来てくれ）」

「（はい、わかりました）」

念話を切り、部屋でて静かに靴を履き家を出て行った

海鳴市・・・海岸公園・・・

海岸公園についたレイウンは前のように四人と向き合っていた

「ではクラフトル、まずはお前が何者かを教えてはくれないか？」
最初に言葉をだしたのシグナムだった、ほかの守護騎士達もそれぞれ複雑な

表情でレイウンを見ていた

「はい、僕は・・・ある魔法技術が発達していた世界で生まれた・・・
デバイス、

ガラドボルグを扱う騎士です」

「ガラドボルグとは、あの銀色の大剣の事か？」

ザフィーラの問いに頷き、自分のポケットから八角形の小さな板、
待機中のガラドボルグを取り出す

「お初にお目にかかる、自分はガラドボルグという」

それを見たシャルマルは質問をだす

「その、ガラドボルグはインテリジェントデバイス？」

「いえ、自分はガーディアルデバイスと呼ばれています」

「がーでいあるでばいす？」

「何なのだ、それは？」

「その事は主の方が詳しいです、主」

「僕が着ていた、あの甲冑を覚えていますか？」

「ああ、あのいかにも堅そうな鎧か」

「あれは魔力甲冑、通称ソリッドアーマーといいます」

「魔力甲冑といことはバリアジャケットとかよりも優れているのか？」
？」

「はい、通常のバリアジャケットの数倍の防御力を誇りまし、武装

機能も

ついています」

「武装機能って・・・一体何があるの？」

「誘導式小型砲台、いわゆるビットに肘と踵からだす魔力刃、あとは肩からの砲撃が可能です」

あんな鎧にそんな武装がついているのかと四人は息を呑むがヴィータがある疑問を感じ質問をだす

「でもそんなすげーもん、どうやって動かしてんだ？、まさか自分の魔力で？」

「いいえ、ソリッドアーマーはエターナルコアという半永久魔力炉で動いています」

「「「なっ!？」」「」」

こんどこそ四人は驚いた、半永久魔力炉・・・それは文字どうり半永久的に魔力を生み出す

コアである、それは軽くロストログアに入る品物であり、使い方を誤まれば大変な代物である

「そ、そんな・・・」

「なんと・・・」

「うそだろ・・・」

「・・・」

それぞれが驚きの声を上げるがレイウンは淡々と説明を続けた

「ガラドボルグはそのソリッドアーマーと連動するもの、つまり端末です、

まあそれ以外はインテリジェントデバイスと変わりはありません」

そんな説明を聞いた四人は未だに驚いていたがシグナムが聞いた

「あれを装備するとデメリットはあるのか？」

「あります」

即答するレイウン

「ソリッドアーマー装備中は防御魔法が使用不可能になり、スピードも若干落ちますし

なにより通常より自分の魔力消費が激しいことです」

「なるほど、無敵の兵器というわけではないのだな」

「はい、そおいうことになりますね」

これには苦笑いしながら答えるレイウン、シグナムはさらに言う

「しかし、なぜ自分が戦える事を黙っていたんだ？」

「それはすいませんでした、みなさんに知られたくはなかったんです、

自分が騎士だっということを・・・」

暗い顔をしながら答えるレイウンに四人は笑って言う

「なんだ、そんな事かよ」

「え？」

「戦える事は決して悪い事ではない」

「ええ、そうよレイウン君、戦いは時に何かを傷つけるけど

何かを守ることでもあるのよ、それはあなた自身だって知ってるでしょう？」

「そうだクラフトル、それにお前はその力で我らを助けてくれたではないか」

「みなさん・・・」

みんなの物言いに嬉しくなり目から涙がでかけるが出る前に手で拭い、みんな向き直り

「ありがとうございます」

レイウンは四人に心からお礼を言った、今の自分は戦える事がいけない事だっと思ってたから、みんなの言葉がすごく嬉しく聞こえた

「それとクラフトル」

「なんですか？」

「これからもお前は主の傍に居てはくれないか？」

「え？、・・・でも」

「この活動は本来、我らの勝手でやっているからな」

「お前をこれ以上巻き込みたくはない」

「ああ、大丈夫だって！、今度はあんなへまはしねーからよ」

「それに、レイウン君ははやてちゃんの傍にいたほうがいいと思うわ」

みんなの巻き込みたくわないという想いすら伝わってくる、恐怖心の事も

あるのでレイウンはそうすることにした

「はい、わかりました、そうさせてもらいます」

「そうか、では帰るとしよう、さすがに今日は疲れた」

シグナムがそう切り出すと四人は歩き始めるがレイウンは立ち止ま
ったままだ

「レイウン、はやく帰ろうぜ」

「え、・・・あ、はい」

ヴィータが手を引っ張ったことで我に帰ったレイウンはようやくその足を動かした

「（これから先、はやてが助かるかどうかはわからない、だけど今は四人を・・・信じる！）」

第七話、始まりへの扉（後書き）

ど、どすか？、次回からついにA S編の時間軸からスタートです！、
ついになのはやフェイト達が出ます！、どうかこれからも読んで下
さい！

第八話、始まりは突然に（前書き）

ついにA S編スタートです、第八話、どうぞ!!!!!!

第八話、始まりは突然に

第八話、始まりは突然に

次元世界・・・平原の世界エルトフレム・・・

ここ平原世界エルトフレムはもう夕日が出ている、そんな夕日の照らされている

平原に大きな木が一本、その木の根元に黒髪の少年は目を瞑りながら座っていた

「そろそろか・・・」

「マスター、次の世界に行くんですか？」
相棒の問いに少年が答える

「ああ、この世界ともお別れだな」

「気に入ってたんですか？」

「ああ、また・・・これるかな？」

「これますよ、きっと・・・」

次元世界は多い、また同じ世界に行くのは困難かもしれないがまた来たいという

想いを抱き、少年は立ち上がり歩きはじめるが急に足を止める

「ん？」

「どうしたんですか？」

「いや、・・・ただ、・・・すまん、なんでもないヘイザーノクト、行こう」

再び歩きはじめる、しかし少年は微かな考えを頭に浮かべていた

「（いつまで旅を続けるんだろう？俺は、・・・そんな事、今はいいか・・・）」

地球時刻、午前七時四十九分・・・戦艦アースラ・・・

「ふうー」

時空管理局が保有する巡航Ⅰ級艦アースラのブリッジにいるこの船の艦長、

リンディ・ハラオウンは息を吐きながら最近の次元犯罪者リストに目を

通していた、次元犯罪者・・・、次元世界を知ってなおその他世界への

犯罪や違法研究やロストログアの悪用などで管理局が追う犯罪者達だ
「最近はまだ増えていないわな、いいことね」

現在この船は時空管理局の本局へ向かっていた、それは本部への帰還であり

この船のメンテナンスも兼ねてだ

「艦長、なに見てるんですか？」

そこにアースラのオペレーター、エイミィ・リミエツタは不思議そうに尋ねた

「ああ、エイミィ、最近の犯罪者リストをね」

「あー、最近は犯罪者の減り具合が著しくくないですよね、以前はガフデル准将が

力をいれてましたからね」

「ええ、でもどうしたのかしら准将、半年前まではあんなに力を入れていたのに」

「はい、最近は辺境世界の警護の指揮に回っていますからね」

「まあ本局に帰還したら、あたし達とアースラもようやく一休みで

きるわね」

「そうですね、やっとお休みがもらえますね!」

リンディはそう言うときーボードを叩き、犯罪者リストのデータを画面から消した

だが犯罪者リストの死亡覧にはレイウン・クラフトルという名が重犯罪者と

して書かれていた

午前十一時四十分・・・八神家・・・

「!!!!!!」

今日も平和? な八神家、ここに住む居候、レイウン・クラフトルは弾かれたように

顔を上げた、ちなみに今レイウンがいる部屋ははやての部屋である、そして

手に持っていた掃除機の電源を切り、大急ぎで一階にむかう

階段を降り、リビングへと入り台所の冷蔵庫の前にいる犯人を見つけ

「ヴィータ!」

「げえ!!」

犯人の名前を叫んだ、その手には恐らく自分の分だと思われるアイスが握られている

ヴィータは恐る恐るレイウンに聞く

「レ、レイウン、なんで?」

「うーん、あえて言うなら直感です、それより駄目じゃないですか、貰いたいときは聞いてくださいって言ってるでしょう?」

「ごめん・・・」

「まだ言うことがあるでしょう、言ってください」

「その・・・貰っていいか?」

「どうぞ」

「あ、ありがとうレイウン!」

嬉しそうに駆けて行くヴィータを見ながらレイウンは今日の近況を考える

「（はやてとシグナムさんはそろそろ図書館から帰ってくるな、シヤマルさんと

ザファイラさんは蒐集活動に行って夕方まで帰ってこない、闇の書のページは徐々に増えていってるし・・・このまま何も起きないといいけど）」

もしもの最悪、時空管理局が嗅ぎつけてきたらの事を考えた

「（もしやつらが現れたら・・・どうするか？・・・）」
悩みながらも二階に戻っていった

十二時六分・・・アースラ・・・

「お疲れ様リンディ提督、予定は順調？」

通信中のディスプレイに映っている女性、レティ・ロウラン提督はリンディ・ハラオウンの古くからの知り合いである

「ええレティ、そっちは問題ない？」

「うん、ドッキング受け入れと、アースラの整備の準備はね・・・」

・

「え？」

古くからの知り合いが発した言葉から何か厄介な事が起きているとリンディは思った、そこに報告にしにきたのかクロノ・ハラオウンも

来た、クロノはそこに居るリンディの息子であり本局執務官である

「こっちの方だと、あんまり嬉しくない事態が起こってるのよ」

「嬉しくない事態って？」

「ロストログアよ、一級搜索指定がかかってる超危険物」

「な！？」

その言葉にクロノは思い当たる節があるのかハッと顔を上げる

「いくつもの世界で痕跡が発見されてるみたいで、搜索担当班はもう大騒ぎよ」

「そう・・・」

「捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね」

「そっか~~~~」

またかという感じでいうリンディ、クロノはなにかを考えたのか表情を曇らせた

十二月一日、午前七時八分

・・・海鳴市・・・

冬に入り本格的に寒いこの時期の朝、朝から青空を覗かせている空そんな海鳴市のビル街のある人氣が全くないところに漆黒の魔方陣が展開され

その魔法陣の中から

「よっと・・・」

黒髪の一人の少年が出てきた、少年は辺りを見回しながら

「(だれも居ないっど・・・ヘイザーノクト、ここは何ていう世界なんだ?)」

自身の相棒に念話を飛ばす

「(第九十七管理外世界、地球という星ですマスター)」

彼、ラグラの相棒のデバイス・ヘイザーノクトは答えた

「(地球か、まあとりあえず行くか)」

念話でそういうとビルとビルの隙間から出ると青い空が見えた

目の前には出勤途中の大人や学校に行く子供の姿が見える

「(青空だ、やっぱいいなあ青空は、てかこの人達と着てるものがないだいたい似ていてよかった)」

青空を見て喜ぶ反面、自分の服装がここの世界と違和感がなくてホッとする

ラグラの今の服装は黒いロングコートの下に灰色の半袖のシャツに青色の長ズボン

を履いている格好だ

「（見たところ、他の世界とは文化レベルは一緒かな？、まずは調べてみつか

図書館かなにか無いか捜すか・・・）」

青空の下、ラグラは歩みはじめた

午後四時三十一分、海鳴市・・・図書館・・・

「（うーん、うーん、もうちょっとやねんけど・・・届かへん・・・）」

八神はやてはそう思いながらも懸命に本棚の上のほうにある本に手を伸ばす

が・・・届かない

「（もうちょっと！、もう・・・あ）」

するとそこに誰かきてその本を取りはやてに差し出して言う

「あの・・・これですか？」

見た目は紫色のロングヘアーで何より優しそうな目をしている女の子だった

「はい、ありがとうございます」

はやては笑みを浮かべてお礼を言った

「そっかー、同い年なんだ」

はやては先ほど本を取ってくれた少女と向かい会うように座り話し込んでいた

「うん、ときどきここで見かけてたんよ、あつ、同い年位の子やつて」

「あ、実はあたしも」

どうやらお互い前から姿は見かけていたらしい、そして今ようやく口を開きあっていた

「えっと、あたし月村すずか」

「すずかちゃん、八神はやていいいます、ひらがなではやて、変な名前やろー」

恥ずかしげに言うはやてに対してすずかは

「そんなことないよ！、綺麗な名前だと思う」

「・・・、ありがとう！」

自分の名前を綺麗だ、と言ってくれるすずかに対してはやてはまたお礼を言った

・・・図書館玄関・・・

図書館の玄関付近、湖の騎士シャルは自分の主を迎えに来ていた
「（えーと、そろそろだと・・・あつ、きたきた）」

主が来たことに気付くとその車椅子を押している子に一礼をした
押していた子、すずかも礼を返した

「ありがとうすずかちゃん、ここでええよ」

「うん、それじゃあ」

そう言うと車椅子に掛けさせて貰った鞆をとった

「お話してくれて、おおきに、ありがとうな」

「うん、またね、はやてちゃん」

図書館の出口を出た辺りでシャルは車椅子を押しながら聞く

「はやてちゃん、寒くないですか？」

「うん平気、シャルも寒ない？」

「わたしは全然」

話していると二人は駐車場に出た、するとその駐車場にピンク髪のポニーテールの女性が立っていた、はやてはその女性を見て

「あ、シグナムー！」

「はい、我が主」

烈火の将シグナムは愛すべき主に凜と答えた

「晩御飯、シグナムとシャルは何食べた？」

はやては本日の晩御飯の献立を二人に聞いた

「そうですね・・・、悩みます」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか」

「うん、そやね、・・・そういえばヴィータは今日もどこか出かけ？」

はやての問いにシャルはぎこちなく答える

「ああー。えーとそうですねー」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていますのであまり心配はいらないですよ」

「そおか・・・」

「でも少し距離が離れても私達はずっとあなたの傍にいますよ」

「はい、我らはいつも、あなたの傍に」

「・・・ありがとう・・・」

不安な声を上げたはやてを二人は慰めるよう言う、はやてはそんな二人に心から感謝した

午後四時四十一分・・・八神家・・・

「うー、寒くなったから洗濯物が乾きにくくなったな」

そんな事を言いながらレイウンは洗濯物をとりこんでいったすべてとりこみ終わり洗濯籠の中に入れるで一息つく

突然、突風が吹き起こった

「うわ！、な、なんだ!!」

レイウンは慌てて洗濯籠を押さえ飛ばされないようにする
ようやく吹き止み、洗濯籠から手を放して思う

「(なんだったんだろう?、でも・・・何かいやな予感がする・・・)」

不安な顔し空を見上げる、まもなく夜だ

七時四十五分・・・市街地・・・

もう夜になった海鳴市の市街地の上空に二つの影があった

一人は鉄槌の騎士ヴィータ、もう一人・・・いや一匹は盾の守護獣ザフィーラ

「どうだヴィータ、見つかりそうか？」

「いるような・・・いないような、・・・こないだから妙に出てくる

魔力反応、そいつがつかまれば一気に二十ページくらいはいきそうなんだけどな・・・」

「わかれて捜そう、闇の書は預ける」

「ああザフィーラ、あんたもしっかり捜してよ」

「心得ている」

そう言うのと飛び去っていく、ヴィータはデバイス・グラーフアイゼンを

構える、そしてヴィータの足元に赤い魔方陣が展開する

「封鎖領域、展開！」

言い放つと市街地一帯は静寂に包まれた

同時刻・・・海鳴市・・・

「はあ~~~~、なんか色々している内にもうすっかり夜だな」

「(ですね、マスター)」

呑気にそんな事を言うラグラ、彼はあらから図書館に行きこの世界の事を一通り学び、その後街を見ながら歩き周り、今にいたっているのである

「さてと寢床を探すか」

「野宿ですか？」

「それしかない……！！……」

言い終わる前にあたり一面を静寂が支配した

「これは……封鎖結界！？」

「（……妙ですね、この世界にも魔導士が？）」

「わからん、兎に角、これを張った奴がどこかに居るはずだ、まずそいつを捜す！」

ラグラは相棒にそう言うのと封鎖結界の中を走っていった

封鎖結界を張ったヴィータは目を瞑り魔力反応を捜していた
そして何かを見つけたのか目を見開く

「魔力反応……二つある……まあまずは一番近いほうからだな、

いくよ、グラーフアイゼン」

「ヤボール（了解）」

数分後……市街地……封鎖結界内

「ヘイザーノクト、ここら辺なんだな？」

「（はい、確かにここ周辺から魔力反応が）」

しかしラグラは辺りを見回すが何も見つからない

「しかし、一体なにが……」

ガキイン！！！！

「ん？」

不意に何かがぶつかる音が聞こえた、空を見上げるが何もない
ラグラは自身のデバイスに聞く

「ヘイザーノクト、聞こえたか？」

「(はい、確かに聞こえました)」

もつとよく捜そうと思い、ラグラはその足を動かした瞬間

「きゃああああー！」

ラグラは突然の悲鳴に顔を上げ空を見た、そこには白い服を着た少女が

ビルの一室へと窓ガラスを割り吹き飛ばされていった、そしてそれを追尾するかのように赤い服を着た少女が入っていく、それうを見たラグラは

「どうやら・・・なんかやばそうだな」

「(マスター!!)」

「わかってる!、取り合えず止めるぞ!!」

ラグラは駆け出しながらズボンのポケットから長方形の小さな板を取り出した

「うつ・・・あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

市街地内あるビルの一室にいる彼女は、すでにボロボロだった自分の愛杖もボロボロになり、今はコアの部分がよわよわしく光っている

だけであつた、彼女・・・高町なのはもう戦える状態ではなかったそれでも、恐怖と痛みに耐えながら、なのはは傷ついたレイジングハートを襲撃者に向け

るが襲撃者、鉄槌の騎士ヴィータはとどめをささんとばかりにグラーフアイゼンを振り上げる

「(こんなので・・・終わり?・・・ユーノ君・・・クロノ君・・・フェイトちゃん!!)」

そんななのはの想いを打ち壊すかのようにグラーフアイゼンが振り

下ろされた瞬間

ガキイン！！・・・

振り下ろされたグラーフアイゼンはなのはに当たる前に何かに防がれた、そう大きい片刃の剣によって防がれた、ヴィータは防がれた事に驚きつつも後ろに二歩ほど後退し、自分の攻撃を防いだ張本人の姿を見た、レイウンと同じ年くらいの黒髪の少年、漆黒のロングコートに真っ黒いズボン、両手には大きめの片刃の剣が握られている、そう二刀流というものである、ヴィータはその乱入者に向かい叫ぶ
「何だてめえ！、そいつの仲間か！？」
乱入者はただ答えた

「違う、・・・単なる流れ者さ」

第八話、始まりは突然に（後書き）

どうでしたか？、ようやくもう一人の主人公、ラグラの登場です！、これからどうかラグラとレイウンの活躍にご期待ください！、それとどうかこれから読んで下さい！

第九話、流れ者、そして戦いの嵐（前書き）

どうも、少佐です、ついにA S編、初の戦闘ですが・・・とても長いです、必死に書いたんでどうか読んで下さい、どうぞ！！

第九話、流れ者、そして戦いの嵐

第九話、流れ者、そして戦いの嵐

海鳴市

・・・市街地・・・封鎖結界内

「流れ・・・者?・・・」

鉄槌ヴィータはビルの一室でそう呟くと自身のデバイス、グラーフアイゼンを

構え直し考える

「(恐らく、二つ目の反応がこいつだろうな、・・・だけどこいつ、ただよらねー気がする

・・・、なんだ?、レイウンと感じが・・・似てる気がする・・・)」

そこまで考えると今度は、ヴィータの目の前にいる少年、ラグラが口を開いた

「一つ聞きたい・・・」

「あ?」

「この結界を張ったのはお前か?」

「(何を聞かかと思えば、そんな事か) ああ、そうだよ、だったらなんだって言うんだよ?

それとお前、流れ者とか言ったな、お前一体何もんだ?、管理局か!？」

ヴィータの問いに不思議げな顔してラグラは答える

「管理局?、いや、俺は単なる流れ者・・・簡単に言うとな次元放浪者だ、当然この女の子

の事も知らない、だがもうこの子は戦える状態じゃない、もういいだろう?、戦闘をやめて

話し合いますか、それともこの結界を解いて大人しく帰ってくれるか、どっちかにしてくれ」

その言葉にヴィータはアイゼンを握る手の力を強くし、一瞬の迷いもなく言い放つ

「わりぃーが、そいつはできねー」

ラグラはヴィータの返答に目を瞑り、すぐに目を開けて答え

「そうか、なら・・・」

右手に持つ片刃の剣、ノクトを切っ先をヴィータに向け

「俺が、相手をしよう・・・」

言い放った

「へっ！、どうせお前も蒐集対象だったんだ・・・、まずお前からぶっ潰す！！」

地面を蹴り、ラグラに突進しハンマーフォームのグラーフアイゼンを容赦なく振るう

ラグラは右手のノクトと左手のヘイザーを前に出し二本の剣でガードする

「（こいつっ！！！！）」

「（なんつう、力！！）」

お互い頭の中で素直な感想を抱いていた

「おお！！」

ラグラはノクトとヘイザーで受けたアイゼンを力任せにヴィータを払う

「（ちっ！！、ここじゃ狭すぎる！、でけー攻撃とかができねー！

！、それにカートリッジ無しじゃあ

キツイ相手かもしれないし、それにあいつもまだまだ何かを隠しもっているにちげーねー・・・）」

振り払われたヴィータは内心で毒づきながらも踏みとどまり言う

「流れ者！、来な！！、外で相手してやらー！！」

というとヴィータは割れた窓ガラスから外に飛び出しにいったラグラはすぐに追おうとするが、何かに気付いたのかすぐにやめ、

ノクトと

ヘイザーを腰の鞆に仕舞い、傷ついたなのはのもとに駆け寄って声をかけた

「大丈夫か？」

「あ、はい！、大丈夫です・・・、あの助けていただいてありがとうございます・・・」

あの・・・私、高町なのはっています、あなたは？」

「ん？、俺か？、俺はさっき言った通り、単なる流れ者さ、それと一つ聞きたい、

君はなぜあの鉄槌を振るう騎士と戦っていたんだ？」

ラグラはさっきヴィータが放った言葉から自分なりに推測するところなのはという子と

自分があゝの騎士に狙われていた事がわかる、自分には狙われる理由がないのでこのなのは

という子にはなにか心当たりがあるんじゃないかと思い聞いてみた
「それが・・・私にも・・・全然わからず・・・突然襲われたんです・・・」

「・・・そうか」

とりあえず今はそんな事は後回しにしようと思い、今はなのはの安全とここからの

脱出を目標にした、ラグラは自分の着ているバリアジャケットであるロングコートを

脱ぎ、なのはに被せる

「え？」

「着ているといい、少なからず防御力が上がると思うし・・・、それに落ち着くと思う」

言われてみればなのははコートの暖かさに少しだけ落ち着きを取り戻していた

「行って来る、ここから動かないでな」と言い、鞆からヘイザーとノクトを引き抜き

割れた窓ガラスの外を見て言う

「いくぞ、ノクト……ヘイザー……」

「はい、マスター」

デバイスがそう返事を返すとラグラは窓から市街地へと飛び出したのははそんな彼の背中を心配げに見送った

「ようやく出てきたか……ん？」

市街地の上空でラグラが出てくるのを待っていただろう、ヴィータはある事に気付く

「（コートがねえ？、脱いできたのか……、まあいい）」

手から小さな鉄球を四つ出し自分の目の前に浮遊させ

「アイゼン！！」

「Schwalbefliegen」

ラグラに向かってグラーフアイゼンで叩きつける、

叩きつけられた鉄球は、赤い光り纏った砲弾と化し、ラグラに迫る

「攻撃感知、誘導弾四つ……来ます！」

デバイスが警告を発したと同時にラグラは空を翔る、しかしシュワルベフリーゲンは

ラグラを追尾してくる、ラグラはシュワルベフリーゲンを器用にかわしていく

「（消えないか、なら消すだけだ！）」

回避行動を中断しノクトとヘイザーを振るう、一つ、二つ、三つ、四つ、

二刀を交互に振るいすべて切り消した

「な！？」

まさか切り消すという事は予想していなかったのか少し驚くヴィータ、無論ラグラはそのチャンス逃さない、そのまま接近し左手もヘイザーで斬りかかる

「!、障壁!!!」

「Panzerhinderis」

ヴィータも咄嗟に障壁を展開し防ぐ、しかしラグラは右手のヘイザーで障壁を

殴りつけるように斬る、その攻撃により障壁には微かヒビが入る

「させるかっ！ー！ー！ー!!!」

叫ぶなりグラーフアイゼンを振るい、なんとかラグラを引き剥がすラグラも冷静に距離を取り、ヴィータの出方を待つ

「(誘導弾はそこまで脅威ではないが、恐らく接近戦での攻撃は危険だろう、

バーストモードを使うか?、いや、まだ相手の出方を待とう)」

「(くそっ、ぶっ潰すとか大口叩いたけど……、こいつ……強え!、

それに倒さず魔力を持って帰らなきゃいけねえ、カートリッジ残り二発……いけっか!?)」

戦いは今は互角、あとはどちらが大技を出すかだった、そんな時だった

「そこまでだよ!!」

突如聞こえた声と共にヴィータの手足に金色の輪が出現し、彼女の手足を締め上げた

「な!?! バインド、この!……くそ!!!」

ヴィータは必死に茂垣ながら空を見上げる、ラグラも釣られて空を見ると

「(?!、狼の尻尾と……耳なのか?、獣人みたいな女の人に、黒い漆黒のマントに

身を包んだ金髪の女の子、女の子の方はなのはっていう子と同年に見えるな……)」

そんな事を考えるていとバインドで拘束されているヴィータが声を張り上げた

「何もんだ!!、てめえら!？」

ヴィータの問いに金髪の女の子は淡々と答えた

「・・・時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。君は民間人への魔法攻撃を行なった。

軽犯罪では済まない罪だ。　だけど、これ以上抵抗しないこと、名前と出身世界、

目的を話してくれば、君に弁護の機会を与える事ができる」

それを啞然と聞いているラグラに獣人かと思われしき女性が声をかけてきた

「あんただね、なのはの言ってた流れ者って」

「あ、ああ、あんたちはあのなのはって子の仲間なのか？」

「ああ、そうさ、それとあたしの名前はアルフ、

まずはお礼を言わせてもらうよ、なのはを助けてくれてありがとう」

「そんな事より、なのはって子は無事なのか？」

なぜかその事が一番気になっていた、少々焦りながら聞くとアルフは二ツと笑い答えた

「大丈夫、今あたしらの仲間、ユーノっていうんだけど、そいつが介抱してるからね」

「そうか、・・・よかった・・・」

ふうー、と安堵息を吐くラグラ、とにかくなのはが無事であった事ともうヴィータも

拘束され、戦いが終わりになってる事に、フェイトがヴィータを問い詰めてるのが

見える、しかしラグラは何か違和感を感じとった

「・・・・・・・・?!?!・・・・・間に合え!」

一人叫びながらフェイトの下へと急ぐ、三人はラグラの突然の行動にただ驚いていた

ラグラがフェイトの下にきた突如、フェイトの真横に、ある人物が

右手に

持っていた剣で容赦なく攻撃を仕掛けてきた、咄嗟のことで対処できない

フェイトをラグラは庇うように立ち襲撃者の攻撃をノクトで防ぐ

「ぐっ!!」

「え!？」

「ほう……」

ラグラは曇もった声を、フェイトは驚きの声を、襲撃者は自身の攻撃を防いだ事に

感心した声を上げている、ラグラはそのまま襲撃者の剣を押し返す

「(新手か……、しかも……強い……)」

襲撃者は自分の剣を掲げいう

「レヴァンティン、・カートリッジロード」

[Explosion]

電子音が鳴り響くと同時に襲撃者が掲げている剣が燃え盛る、それを見たラグラは

「(カートリッジシステム!?!、まずい!)」

「紫電……一閃!!!!」

まずいと思った矢先に襲撃者がラグラに斬りかかる、ラグラは咄嗟にノクトとヘイザーで防御するが

「はあああああ!!」

「……っ!……ぐっ!!!!」

ヘイザーとノクトとレヴァンティンの接触部で魔力爆発がおき、ラグラは自分の

デバイスごと吹き飛ばされ、下にあったビルの屋上をつき抜け、その下の階へと吹き飛ばされた

「流れ者っ!!」

アルフはすぐにラグラを助けに行こうとする。だが それを阻むように

、襲撃者である烈火の将、シグナムと共にやってきた盾の守護獣、

ザフィーラが立ちふさがった

「くっ!!」

そんな中、フェイトはシグナムのレヴァンティンの攻撃を自分のデバイス・バルディッシュで防いでいたが

明らかにフェイトは一方的に押されていた、フェイトはなんとかレヴァンティンの払い

一旦、ラグラの吹き飛ばされた場所まで退いていった、シグナムはフェイトが退いていったのを

確認すると、ヴィータに掛けられていたバインドを解除し外した

「どうした?、ヴィータ、油断でもしたか?」

「・・・うるせーよ、こっから逆転するところだったんだよ!」

恥ずかしながら言うヴィータにシグナムは、フツ、と笑い言った

「そうか、それは邪魔したな、すまなかった」

ヴィータは消費したカートリッジをグラーファイゼンに補充し、シグナムに向き直り言う

「その・・・ありがとう・・・」

「お前が礼を言うなんて珍しいな」

「うるせーな!、・・・レイウンのが少しうつちまったんだよ!」

「ふっ、そうかもな、だがあんまり無茶はするな、お前が怪我でもしたら

我らが主とクラフトルが心配する、それに無茶はしないとのクラフトルとの約束もある」

「わかってるよ!、ただ、最初はその流れ者を倒せると思ってたんだよ・・・」

「流れ者?、あの二刀流の男か?」

「ああ、管理局の奴じゃないらしいけど、もしかしたらあいつらの仲間でも

ないのかもしれない、それと・・・なんとなくだけ感じが・・・」

「クラフトルと・・・似ている・・・か?」

ヴィータはシグナムの言葉に少し驚いたが、すぐに頷いた

「ああ」

「そうか、だがあの・・・流れ者といったか、お前をそこまでこずらしたのだから

相当できる奴なのだろう、一度戦ってみたものだな」

シグナムは素直な気持ちを述べ、上を見る、そこではアルフとザフイーラが

激しい空中戦を繰り広げている

「シグナム、わりーがあの流れ者はあたしがやる」

「ほお、お前が自ら相手を選ぶのは初めてかもしれんな、わたしもその流れ者と

戦ってみたかったが、まあいいだろう、・・・しかし倒せるか？」

「ああ、心配はいらねー、それに対一ならあたしらベルカの騎士に」

「負けわない、そうだったな、いくぞ、ヴィータ！」

二人は話を済ますと飛翔を開始した

ビルの階層、ラグラは瓦礫に塗れた体を起こして

「っ！、いってゝゝゝ、結構吹き飛ばされたな」

自分が吹き飛んで開いた穴を見上げた、体にそこまで外傷もなければ内臓にダメージもなかった

「（カートリッジシステムか・・・厄介だな、恐らくあの鉄槌を振るう騎士にも

あるだろう、・・・ん？）」

穴を見上げていたら先ほど庇った黒いマントに身を包んだ少女、フエイト・テストロッサ

が降りてきた、フエイトはラグラに近づき心配そうに声をかけた

「あの・・・大丈夫・・・ですか？」

「ああ、大丈夫だ、それよりそっちも少しやられてしまったようだな、大丈夫か？」

フェイトのデバイスを見てラグラはそう言った、先ほどシグナムの攻撃を防いだ時に

ついたものである、フェイトは首を横に振り答える

「はい、バルディッシュはまだやれます」

「Yes」

バルディッシュもそう答える、ラグラはその返答に笑みを浮かべ

「それはよかった」

そのラグラの笑みにフェイトもつられて笑う

「あっ・・・名前、まだ言ってませんでしたね、私はフェイト、フェイト・テストロッサ

一緒にいた子はアルフ、あなたは？」

「俺か？、俺はたんなる流れ者だよ、それと敬語は使わなくていいぞ、なんか慣れてないから

くすぐったいんだよな、それに堅くなるしいの苦手なんだ」

そお言うとすぐに顔を引き締め、開いた穴から空を見ている

「フェイト、お前のデバイス、・・・バルディッシュだっけ？」

「うん」

「バルディッシュにカートリッジシステムって搭載されてるか？」

「え？、・・・そんな物は搭載されてないけど・・・」

「・・・そうか、（だったら勝つのは難しい・・・いや無理に近い、技術的には

なんとかなるかもしれないが、デバイスの性能差がありすぎる、なら）フェイト、ここは

なんとか逃げよう」

「私も同じことを考えてた、ちょっと待ってて、ユーノ、聞こえる？」

「（え？、フェイト、今どこに？）」

「（ビルの屋上の下、流れ者と一緒にいる）」

「(本当?)」

「(うん、ユーノ、この結界内から全員同時に外に転送、できる?)」

「(うん、アルフと協力すればなんとか・・・あと、この結界を破壊できれば・・・、」

「恐らく相当頑丈に出来てるはず・・・僕やアルフじゃ破壊できないと思う)」

「(なら私が・・・)」

「(いや、フェイト、ここは俺がやろう・・・)」

「(え!?)」

ラグラの突然の申し出に驚く二人、ユーノはそんなラグラに念話を送る

「(ええっと、流れ者だっけ、その・・・できるの?)」

「(ああ、ああいうのを破壊するのは得意だ、二人はアルフと一緒に時間を稼いでくれ)」

「(流れ者、でも・・・)」

「(心配するな、必ず結界は破壊する、それと・・・破壊したら、俺はもう・・・次の世界に」

行くからお別れだな)」

「(え、そんな・・・)」

「(どうして?)」

「(あんまりこういう事には関わらないって決めてんのさ、それと俺はあいつらにばれない」

位置から攻撃すつから、少し時間が掛かるかもしれない)」

「(・・・)」

せっかく知り合えたのにもうお別れだという事に二人は少し悲しむ、まだなのは助けてもらった

御礼もしていなし、彼の正体も知りたかったからである、ラグラは黙った二人に対してわざと

明るい声をだして言った

「(まあ、そう暗くなるな!、・・・縁があればきつとまた会えるさ)」

「(うん)」

「(そうだね、きつとまた・・・会えるかもしれないね)」

「(よし、敵さんも動き出したようだし・・・、さあて・・・がんばろう!)」

そう言うのと念話を切り、目の前にいるフェイトはラグラの顔を見て力強く頷き

穴から飛び出していく、ラグラは飛び出す前にやっておきたい事があった

「ラスト・・・一個・・・、また作んなきゃな」

自分のポケットから拳銃の弾丸に似た物、自分が持つてる最後のカートリッジ

を手に取り、ヘイザーに装填する

「よし、・・・いくか」

自分も穴から出ようとするが突然、

「(流れ者さん・・・)」

なのはから念話がかかり、行動を中断する

「(なのは・・・か、どうした?)」

「(その・・・ユーノ君から聞いたんだけど・・・行っちゃうって・・・本当?)」

「(・・・ああ、お前ともお別れだな・・・)」

「(ほんとうに行っちゃうの?)」

「(・・・)」

正直な所、ラグラは悩んでいた、せっかく出来たきっかけをふいにするのか?、と

「(以前、・・・いや・・・いいか、それじゃあな、最後に話が出て・・・」

嬉しかったよ、なのは・・・)」

念話を切り、穴から飛び出す、外に出てみればみんな戦っていた

「（絶対にあいつらは逃がす！、絶対に！）」

ラグラは強く決意すると夜の市街地の空を駆けた

その頃

・・・八神家・・・

市街地では壮絶な戦闘が行われている中、ここ八神家では闇の書の主であり

ここの家主である八神はやてと居候のレイウン・クラフトルが夕食を作っていた

レイウンは左手にある物と右手に皮むき機を手にはやてに

「はやて、ジャガイモの皮、全部剥き終わりました」

「あ、ありがとうレイウン、ジャガイモ切るからこっち持ってきてな」

傍から見ればそれはとても仲のいい兄弟かなにかに見える、ちなみに今日の

晩御飯はホワイトシチューである、はやてはレイウンから剥き終わったジャガイモ

の入ったボールを受け取り、流しの傍に置いた、レイウンは皮をゴミ箱に捨てに行く

するとそこではやての携帯が鳴った

「ん？」

はやてはポケットに入った携帯を取り出し、通話ボタンを押し、顔に当て言う

「もしもし？」

「あ、もしもし、はやてちゃん？、シャマルです」

「シャマル、どした？」

そこにジャガイモの皮を捨て終わったレイウンが戻ってきてきてシチューの火加減を見る

「（火加減は・・・大丈夫っと、今日は暖かいシチューですよ、み

なさん)」

笑顔を作り、今家を出掛けてる守護騎士四人に心の中で言う

「すいません、いつものオリーブオイルが見つからなくて、ちょっと遠くの

スーパーまで行って捜してきますから」

「うん、別にええよ？、無理せんでも・・・」

「出たついでに、みんなを拾って帰りますから」

「そおか」

「お料理、お手伝いできなくてすみません・・・」

「あはは、平気やって、レイウンも手伝ってくれたから、もうちょいで完成や」

「なるべく急いで帰りますから」

「あ、急がんでもええから、気をつけてな」

「はい、あ！、それとレイウン君に変わってくれますか？」

「あ、今変わるから待って、レイウン」

「はい、なんですか？」

はやては声にレイウンはジャガイモを切る手をやめ、返事を返した

「なんですか？、はやて」

「シャマルが変わって欲しいって」

自分の携帯を差し出し言う、レイウンはそれを受け取り顔に当てる

「もしもし、シャマルさん？、どうしたんですか？」

「あ、レイウン君、実は・・・荷物が多くて・・・その・・・」

レイウンはすぐにその言葉に隠れた意味を理解し言う

「荷物持ちですね、わかりました、今行きます」

「ありがとう、遠い方のスーパーの入り口で待ってるから」

「はい、それじゃあ・・・」

と言い、通話を切ると、携帯をはやてに返して言う

「荷物が多いそうなので、手伝いに行ってきます」

「うん、気をつけてなレイウン」

「はい、行ってきます」

リビングのソファに掛けてあったジャンパーを手に取り家を出て行った

外・・・海鳴市・・・

家を出てしばらく歩いたところで、レイウンはシャルに念話を送った

「(シャルさん、なにかあったんですか?)」

歩いている最中に封鎖結界が張られている事に気付いたレイウンは、電話の会話で

何かあったと思っていたが、その封鎖結界を見てそれは確信へと繋がった

「(今、ヴィータちゃんが張った、封鎖結界の中に五人の魔導士がいるの)」

「(シグナムさん達も中に?)」

「(ええ、それで今、五人の中の一人はヴィータちゃんが戦闘不能にして

あとの四人は今、シグナム達と戦っているわ)」

「(シグナムさんやザフィーラさん、それにヴィータは無事なんですか!?)」

「(大丈夫、無事よ、むしろこっちが押しているわ・・・でも・・・)」

「(でも?)」

「(五人中、四人は管理局の人達なんだろうけど・・・あと一人、全く

わからない子がいるの)」

「(全くわからない子?)」

「(ええ、今はどこにいるかわからないけど・・・何か仕掛けてくるかもしれないの、

・・・その・・・レイウン君、万が一があるかもしれないから、その・・・)」

どうしてもシャルはレイウンに、手伝ってほしい、が言えなかった、言う直前に

なって迷ってしまった、そんなシャルの言葉を聞いてレイウンは

「（わかりました、今そちらに向かいます）」

「（え？、でも・・・）」

「（みんなが万が一、危機に陥った時のためです、任せてください）」

「（ごめんなさい、レイウン君、こんな事の巻き込んだじゃって・・・）」

「（いえいえ、気にしないでください、・・・逆に・・・みんなの足を

引っ張るかもしれないんで・・・、それじゃあ）」

念話を切り、封鎖結界のある方を見つめていると、レイウンはあることに気付く

「！、・・・震えている？」

右手が、若干ガクガクと震えていた、みんなには恐怖心を持っていることを

話していなかった、だからシャルは今回の件をレイウンに頼んだのだ

震える右手を左手で押さえて思う

「（今回は戦えるか？、・・・戦えなくなつて・・・盾ぐらいにはなつてみせる、

それに・・・時空管理局・・・ついに現れたか・・・偽りの正義を語る悪魔共・・・）」

そこまで思うとレイウンは歩道を走っていった、果たして彼は・・・戦うのであろうか？

市街地・・・封鎖結界内・・・

相手に悟られない位置を目指して、ラグラは飛んでいた

「ヘイザー、ノクト、まだか？」

「もう少しです、しかしマスター、よろしいのですか？」

「何がだ？」

飛び続けながら自分のデバイスに問いかけた

「残らなくて、ですよ」

「……」

そうヘイザーとノクトに言われるとラグラはみんなが戦っている方を見る

フェイトはシグナムに圧倒的に押されているがなんとか戦っている
ユーノはヴィータの攻撃をきっちりガードし避け、引っ掻き回すしながら戦っている

見たところユーノは攻撃形はからっきしのようなだが防御や補助に力があるようだ

アルフはザファイラは互角だった、拳と拳が何度も激突している、見たところ

アルフは体術と補助系に特化しているのかもしれない

「……今はやく、スターダストブレイカーが撃てる位置まで移動……な!？」

「どうしたんですか、マスター？」

突然ラグラが飛行を中断して止まり、下の方を向いていた、視線の先には

自分のコートをあげた少女がボロボロになった愛杖を構えていた、構えた杖の先には桜色の魔方陣が展開され、大出力の魔力をチャージがされている

「（何やってるんだ!、あんな状態であんなでかいの撃ったら……くそ、止め……）」

「（マスター!）」

止めようと思った矢先にヘイザーに止められた

「なんだ!?!、ヘイザー!、はやく止めないと!」

「落ち着いてください、この近くに微かですが魔力反応が・・・」
「なに？」

その言葉に落ち着きを取り戻したラグラはすこし考える

「（魔力反応、妙だな・・・、フェイト達の仲間だったらとつくに出てきても

おかしくない、・・・ということは）」

「スキャン完了、魔力反応は遠隔魔法で・・・なのはさんを狙ってます！！」

「なんだって！？、くっ、破壊はなのはに任せるしかないか・・・、」

ラグラは大急ぎで魔力反応の下へと飛んだ

そこはなのはいる所に割りに近い、ビルの屋上だった

そこには金髪の女性、湖の騎士シャルマルがいた、その右手には闇の書があった

そしてシャルマルは砲撃魔法を放とうとしているなのは姿を認め、ついに

行動を起こした、自身のデバイス、クラールヴィントに口付けをし

「クラールヴィント、お願い」

クラールヴィントが二本の糸を出し、その糸が空中で円を形取る。

そしてその内部に出来上がった空間へと、シャルマルは勢いよく手を入れにかかった

そして、なのはが砲撃魔法・スターライトブレイカーを放とうとしたその時

「え……！！？」

「あっ……しまった、外しちゃった。」

突然、なのはの胸から一本の手が生えた。

クラールヴィントを通じて、シャルマルの手が彼女を突き破ったのだ
とはいっても、なのはには肉体的なダメージはない

シャマルの目的は、それとは別にあった、

彼女は狙いが外れたのを感じ、すぐに手を入れなおす、
直後、その手には赤く煌く光球が握られた、

これこそが、魔道士にとっての力の源。その者が持つ魔力の中樞

——リンカーコア

「リンカーコア、捕獲……蒐集開始!!」

シャマルはもう片方の手を、闇の書へと乗せた。

その瞬間……白紙だった筈の書物のページに、文字が次々に浮かび
上がり始め

その一ページ目を蒐集し終わった瞬間、二つの刃と黒い影が襲い掛
かった

「なっ!？」

「おおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

獣じみた叫び声の正体は、流れ者……そうラグラ、ラグラはシャ
マルにありつたけの

力を込めてヘイザーとノクトを振った、シャマルは慌てて円から手
を引っ込めラグラの

攻撃を避ける、距離を取る、なのはから蒐集できたページはたった
の一ページだけだった

「くっ、いつの間に……」

「お前、あいつらの……あの騎士達の仲間か？」

ラグラの問いにシャマルは答えない、黙っている

「ヘイザー、ノクト、……バスターフォーム」

「バスターフォーム、リリースします」

電子音が鳴り響くとラグラはノクトとヘイザーを合わせ合体させ大
きい両刃の長剣を

つくる、これがヘイザーとノクトが合体した本来の姿、ヘイザーノ
クト

「カートリッジロード」

「ドライブ……エンゲージ」

ヘイザーノクトから葉莢が飛び出し、ラグラはシャルに突進する
呆気を取られていたシャルはすぐに障壁を張ろうとするがすでに
遅し

「残・・・光!!!!」

しかしラグラはヘイザーノクトの刀身をシャルの一步先の地面に
叩きつける

「・・・・えっ？」

てっきり攻撃がくるのかと思い、目を瞑っていたシャルはまた呆
気にとられるが、

ラグラは言葉を繋げた

「裂翔波!!!!!!」

その瞬間

地面に叩きつけられたヘイザーノクトの刀身から巨大な衝撃波がでた
シャルは自分の足元付近からでた突然の衝撃波、残光裂翔波を防
御もできずに

まともにくらってしまった

「きゃあああああ!!!!」

悲鳴を上げながらビルの上から吹き飛ばされ、ビルの下へと落ち
ていき

その瞬間、

「スター・・・・ライト・・・・ブレイカアアアアアア!

!!!!!!」

天に向かい、桜色の巨大な砲撃が放たれ・・・・なのはの放った砲撃、
スターライト・ブレイカーが結界を貫いた

そして、それと同時に……なのはは地に膝を着き、そのまま前のめ
りに倒れこんだ

結界が崩壊していき、守護騎士達が動く、シグナムがヴィータとザ
フィーラに念話を飛ばす

「（結界が壊れた、・・・離脱するぞ!）」

「（ちよつと待てよ!、シャルはどうすんだよ!?）」

「（落ち着けヴィータ、シャルはきつと無事だ、とにかく今は管理局の部隊が

来る前に離脱するぞ!、急げ!!）」

「（くっそ!、無事に逃げてくれよシャル!!）」

守護騎士はそれぞれ念話を切ると、どこかに飛び去って行ってしまった

ラグラは急いでなのは所に行き、彼女の倒れた体を抱き起こして言う
「おい!、大丈夫か!?、しっかりしろ!」

ラグラは腹が立っていた、なぜもう少し早くに気付いてあの女の動きを止められなかったん

だ、と、今は自分を攻めたってどうしようもないのでなのはの容態を見た

「（・・・やっぱり、リンカーコアが減っている、だが今ならまだ間に合う・・・）」

ラグラは自分の右手をなのはの胸元に当てると目を瞑り、右手に魔力を集中させる

「（・・・ふう、間に合った・・・）」

そう思うと右手を離し、なのはを屋上の床に寝かせ、自分があげた黒いコートを掛け

立ち上がり、言う

「じゃあ、こんどこそじゃあな・・・くっ・・・」

心配は尽きなかったが歩き始めるラグラ、だが

「流れ者、待って!!!!!」

後ろからフェイトの呼び止める声が聞こえたが、敢えて無視して飛び去っていった

恐らく返事をしたら、絶対に残ってしまうからである

こうして・・・長くも、始まりを意味する戦いは・・・終わった

第九話、流れ者、そして戦いの嵐（後書き）

どうでしたか？、よければ感想等ください、お願いします、これからもうどうか読んで下さい

第十話、それは運命か？偶然か？ 前編（前書き）

第十話です・・・が、なんかとてもベタなような気がします・・・
・、とりあえずどうぞ！

第十話、それは運命か？偶然か？ 前編

第十話、それは運命か？偶然か？前編

海鳴市

冬場の夜はとても寒かった、海鳴市にある人気がないある場所である三人は集合していた

「シャル・・・・、来ないな・・・」

「落ちてヴィータ、まだここに集合してから十分しか経ってないぞ」

足ふみしながら言うヴィータの声は明らかに焦っていた、前回の戦闘で、ヴィータ達、守護騎士の一人の湖の騎士シャルはその戦いの乱入者、流れ者を名乗る男の攻撃により行方知らずになってしまった

管理局に捕まったのか？、それとも逃げ切ったのか？、詳しい事は残った三人とも

わからないでいた、そんなヴィータを盾の守護獣ザフィーラが宥めていると、

「みなさん！、ここにいたんですか！」

三人共、その聞きなれた声のする方に顔を向けると、そこには三人が今しがた

心配していたシャルを抱え、手にはスーパの袋を持った八神家の居候、

レイウン・クラフトルが立っていた

「みなさんの魔力反応がなくなったんで見つけるのに苦労しました」

「レイウン、どうして・・・、それよりシャルは！？」

「大丈夫ですよヴィータ、今は気絶してますけど、傷は直しておきましたから

・そろそろ起き・・・、話をすれば・・・ですね」
「ん・・・うん?・・・」

言ってる間に抱えられていたシャルが目覚めた、三人は傍に駆け寄り安堵した

「あれ?、レイウン君にみんな・・・、そうだ、私・・・落とされて」
レイウンはシャルを降ろすと、自分がどうしてここまで至ったのかを四人に話はじめた

数分前・・・封鎖結界内・・・市街地

・・・スターライトブレイカー発射数秒前・・・

「・・・よし、なんとか結界内に入れた」

シャルに頼まれてやってきたレイウンはようやく結界内に入ったそのまま道路を走っていると彼のデバイスが声を掛けてきた

「主、魔力反応が九つ、確認しました、その内の四つは守護騎士のみなさまでですが、

残り四つは・・・」

「管理局と・・・シャルさんが言ってた、全くわからない子か・・・」

「はい」

ガラドボルグは返事を聞いたレイウンは黙って右腕を見た、まだ少し震えている右腕

レイウンは少し目を瞑り、深呼吸すると、目を開けて言う

「・・・よし、・・・いこ・・・?」

「どうかされたんですか、主?」

「今・・・、シャルさんの声が・・・」

そう言うのと声が聞こえた、上を見ると、ビルの屋上から落ちてくるのが

見えた、レイウンはその人をよく知っていた、なぜなら

「シャルさんっ!?、ガラドボルグ!」

「御意、起動します」

叫ぶと同時にレイウンは跳躍、その時には白銀の鎧・・・ソリッド
アーマーを

纏っており、その腰の鞘には銀の剣、ガラドボルグがしまわれていた
レイウンは空中でシャルルの体を受け止め、そのまま抱えて道路に
着地する

「シャルルさん！、シャルルさん！、・・・よかった気絶してる
だけだ」

しかしシャルルの体には、軽いが怪我があった

「（取り合えず傷を治そう・・・、どこか・・・）」
そう思った瞬間、

「（！・・・何だ！？）」

空に向かい巨大な砲撃魔法が発射された、レイウンはその桜色の砲
撃魔法に

一瞬見とれてしまったが、その砲撃により結界が破壊された事に気
付き

「（主！）」

「（・・・！！・いけない、・・・はやく、逃げないと！）」

シャルルをしっかりと抱えるとそのまま急いで、レイウンは市街地を
後にした

「・・・と、いうわけなんですよ」

四人はレイウンの手短な説明を聞き、納得したように頷いた

「とにかく、シャルル、無事でなによりだ」

「全くだぜ」

「うむ」

「みんな、心配かけてごめんなさい」

シャマルは心配していた四人に頭を下げ謝った、よほど心配してたんだろうなく、

とレイウンが思いながらその光景を見ていた

「しかし・・・、あの流れ者いう男・・・」

「あいつ、今度会ったらギッタンギッタンにしてやる!!」

「ヴィ、ヴィータ・・・、その、落ち着いて・・・」

「気がかりでもあるのか?」

「ああ」

ザフィーラの問いに頷くシグナム、シグナムは内心、流れ者の事に驚いていた、なぜならそれは、あからさまにこちらが有利だった状況を

あの男はある意味、自分の力であそこまでの戦いをしたのだ

ヴィータを苦戦させ、シャマルを倒し、拳句の果てにはせっかくした

闇の書への蒐集も最悪のタイミングで妨害した、ヴィータが倒した

あの白い

魔導士から蒐集できたのはよかったが、蒐集できたのはたったの一

ページだけ、

闇の書は一度、蒐集を行った者へは蒐集できないという難点を抱えている

「あの流れ者には、注意が必要かもしれんな」

「このまま、奴が我らの敵として現れるのならな」

「どおいう意味だよ、ザフィーラ?」

「奴は、流れ者だ、厄介事は好まん筈だ」

「じゃあ、あのままどこかに行ったという可能性も?」

「ああ、十分にある」

「ずいぶんと詳しいんですね、ザフィーラさん」

「昔、会って話をした事があるんでな」

「ええ!?!、あいつにか?」

「いや、別の男だ」

「そ、そうか・・・そうだよな」

ヴィータの言葉を区切りに、レイウンは四人に言う

「それじゃあ、帰りましようみなさん、はやてが待ってます」

海鳴市・・・

「ハックション!!!!」

海鳴市の海岸近く、流れ者ことラグラは盛大にクシャミをした

「だいじょぶですか?、マスター?」

「くーーーーー、誰かに噂されたなこりゃあ、それとも寒いせいかな?」

「両方だと思いますよ、たぶん」

「そっか」

あれからラグラは管理局に捕捉されない、場所まで移動して今の至っているのである

近くに見える海を見ながらラグラはヘイザーノクトに言う

「それにしても、何とかなったなヘイザーノクト」

「はい、しかし、あの人たちは一体?」

「さあな、だがあの術式はベルカ式だった、カートリッジも使ってきたしな、

たぶん、・・・・・・いやいいか、それよりヘイザーノクト」

「なんですか?」

ラグラはもう一度、海を見ると思い切った顔で言う

「次の世界に行くから、・・・・転移システムを起動しろ」

「・・・・・・くどいようですが聞きます、本当によろしいのですか?」

「・・・・・・ああ、頼む」

「わかりました、起動します・・・・」

そうヘイザーノクトは言ったが、しばらくしても何も起こらなかった
「・・・・・・?・・・・・・、どうした?」

「いえ、それが・・・システムが起動できません」

あまりにも予想外の展開に驚くラグラ、慌てて聞く

「どっか、故障したんじゃないか!？」

「いえ、損傷等は調べましたがありません」

「じゃあなんで・・・、あー、考えても仕方がない・・・」

「どうするんですか？」

「取り合えず、人気がないところを捜して、カートリッジ作りだ、それが終わったらもう寝る」

「わかりました!♪」

歩きながら今のヘイザーノクトの言葉に違和感を感じたラグラは口を開く

「ヘイザーノクト、・・・お前、喜んでないか？」

「え?、気のせいですよ、きつと♪」

「そうか?、全く・・・」

妙に納得がいかないながらもラグラは歩きながら星が出ている空を見上げ思う

(しかし、あいつら元気かな?、・・・全く初めて会ったのに、

心配性だな俺は・・・)

今さっきまで一緒に戦った者達の事を心配しながら歩いていた

・・・時空管理本局・・・

本局にある幾つものエレベーターの中、先ほど本局に入港し、今は修理中である

戦艦アースラの艦長、リンディ・ハラOWNとアースラオペレーターであり執務官補佐

であるエイミ・リミエツタは艦長に先ほどの戦闘で倒れてしまったなのはの容態を報告をしていた

「検査の結果、怪我は対した事ないそうです。ただ、魔道師の魔力の源『リンカーコア』が少し小さくなっているそうです」

「・・・・・・そう。じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね」後ろにいるエイミに振り向きもしないでリンディは答えた

「はい、間違いないみたいです、・・・・・・休暇は延期ですかねー、・・・・・・」

流れるにうちの担当になっちゃいそうですし・・・・・・」

少し残念そうに答えるエイミにリンディは

「しかたないわ、そおいうお仕事だもの」

「やっぱり、そうですね」

「ところで、フェイトさん達が言ってた」

振り向きながらリンディがそう言うと言いつつエイミは思いだしたかのように答える

「ああ！、流れ者さんですね！、今回の戦闘の功労者ですもんね」

「ええ、彼がいなかったらなのはさんをもっと、沢山のリンカーコアを

奪われていたはずよ、それにフェイトさん達もあれだけの怪我ですんだわ」

もし流れ者、ラグラがいなかったら先ほど戦闘はこれだけの被害で済まなかった

であろう、だが唯一残念なのは彼が、そのまま行ってしまった事である

「縁があったらまた会える、って言ってたらしいですよ、ああ、会いたくない」

また会えるかどうかかわからないがエイミは大事な妹分を助けてくれた流れ者に会いたがっていた

「ええ、是非、私も会ってみたいわ」

そう言うのと、ちょうどエレベーターのドアが開く、リンディはエイミと一緒に

エレベーターを出ながら思った

「(流れ者、……彼が……最後の一人なのかしら?……)」

本局……整備室……

時空管理局にある一室、そこには今、ユーノとアルフがいた

今二人は先ほどの戦いでボロボロになってしまった、なのはのデバイス・レイジングハート

とフェイトのデバイス・バルディッシュの修理をおこなっていた

「二つとも……、ずいぶんと壊されたな、これは修理に時間がかかりそうだ」

「そうだねー、しばらくは使うことできないね……」

ユーノの言葉に肯定しながらアルフは答える、するとそこに意識を取り戻した

なのはにフェイト、クロノもやって来た、ユーノとアルフはなのはを見るなり

席から立ち上がり

「なのは!フェイト!」

アルフは嬉しそうに言う、三人に近寄る、ユーノもその後続いた「ユーノ君、アルフさん!」

なのはも、ようやくまともな場所で再会できたのを喜び、駆け寄る

「なのは!、久しぶり!」

「なのは、よかった、怪我は大丈夫?」

「うん!、全然平気だよ!」

一旦区切りができたのを確認するとクロノはユーノに修理状況を聞いた

「破損状況は?」

「うん……、あんまりよくない……、今は自動修復をかけてるけ

ど、基礎構造の

修復がすんだら、一度再起動して部品交換とかしないと・・・」

「・・・そうか・・・」

クロノは短く返事を返した、なのはとフェイトは自分のデバイスを心配そうに見ている

「ねえ、そういえばさあ、あの連中の魔法って・・・なんか変じゃなかった？」

自分の尻尾を揺らしながら、言うアルフ、その問いにはクロノが答えた

「あれは、・・・たぶん、・・・ベルカ式だ」

「ベルカ式？」

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

ユーノが言葉を繋ぎ、クロノがまた口を開いた

「遠距離や・・・広範囲攻撃を、ある程度どがいしして、対人戦闘の特化した魔法で

、すぐれた術者は・・・騎士と呼ばれる」

「確かに・・・あの人、ベルカの騎士って言ってた・・・」

先の戦闘でフェイトが戦っていた、剣を持った女性がそう言っていたのをフェイトは

思いだして口にした

「最大の特徴はデバイスに組み込まれた、カートリッジシステムと呼ばれる武装、

儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に・・・爆発的な

破壊力を得る・・・危険で物騒な代物だ・・・」

ユーノがそこまで言うのと、フェイトはそこでハッと顔を上げて思い出す、流れ者が言った言葉を

バルディッシュにカートリッジシステムって搭載されてるか？

「あっ！」

「ん？、どうしたんだい、フェイト？」

ハッと顔を上げたフェイトにアルフは不思議そうな顔をして聞いた
「流れ者も、そのカートリッジシステムの事を言ってた」

「なんて言ってたんだ？」

クロノが聞く

「うん……、バルディッシュにカートリッジシステムは搭載されてるかって……」

「それで、フェイトちゃんはなんて答えたの？」

これはなのは、フェイトは自分が流れ者に言ったことを言った

「搭載されてないって答えたら、逃げようって答えて……」

そこまで聞くとクロノは

「そうか……、勝てないと判断したんだろうな……きつと、

あ、そういえば」

何か思い出したのか、クロノは四人に言う

「その流れ者だが、彼のコートからこんな物が見つかったんだ」

そう言っ自分のポケットから、銀色の小さなロザリオをだした

「ロザリオ？」

「ああ調べてみたんだが……、ただのロザリオだった」

「それ、もしかして……流れ者さんの？」

「その可能性は高いな」

「あのクロノ君」

「ん？」

「その……ロザリオ、よかったら、あたしが持っていていい？」

「ああ、構わない、……もしかしたらまた会えるかもしれないしな」

そう言うクロノはなのはにロザリオを渡す、なのははそのロザリオを大事そうに

持つと、ぎゅっと握りしめて思う、またきつと、会えるんじゃない

かって……

同時刻

海鳴市……八神家……

そこ頃、ここ八神家にいるレイウンは夕食の後片付けをしていた
ちなみに今リビングに居るのはシグナムとザフィーラとレイウンだけ
はやてとシャルとヴィータは今さっきお風呂に入りに行った
シグナムは読んでいた新聞を畳み、何かを考えるかのように目を瞑
った

「……今日の戦闘か？」

「聡いな、……そのとうりだ」

「どうかしたんですか？シグナムさん」

そこに後片付けを終わらしたレイウンが来てシグナムに聞く

シグナムは少しばかり衣服を捲り上げ、二人に下腹部を見せた

「わ！、シグナムさ……え？……」

急にそんな事をするんで焦った声を出したレイウンだが、すぐに意
味が

わかった、彼女の下腹部には黒い傷跡があった

「お前の鎧を打ち抜いたか……」

「澄んだ太刀筋だった……良い師に学んだのだろう」

武器の差が無ければ、少々苦戦したかもしれん」

「シグナムさん、大丈夫ですか？」

「ああ、心配はいらない、それよりすまなかったなクラフトル、
お前を駆り立ててしまつて……」

「いいえ、それに僕はシャルさんを助けた以外、何もしていませ
んよ」

「いや、お前が来なければシャルは管理局に捕まっていた、そし

てシャマルが

持っていた闇の書も奪われていた、感謝する」

「やめてくださいよザフィーラさん、家族なんだから当然じゃないですか」

レイウンは照れたように言うのと笑顔を作りザフィーラの体を擦った

・・・海鳴市・・・

そのころラグラは先ほど出来た、カートリッジをツインフォームにした

ヘイザーとノクトにそれぞれ十発づつ入れて、ホッと一息つく

「よし！、これでいいだろう・・・」

「お疲れ様です。マスター」

ヘイザーとノクトを鞘に居れ地面にべたりと座り込むラグラ、さすがに疲れたらしい

「なあ、ヘイザーノクト」

「はい？」

「これから。忙しくなるかもな・・・もしかしたら」

「忙しくなりますよ、色んな意味で」

後編に・・・つづく

第十話、それは運命か？偶然か？ 前編（後書き）

ど、どすか？、次回は後編です、・・・これからもどうか・・・どうか！よんでください！、（作業BGM、機神乱舞を聞きながら創意創作中！）

第十話、それは運命か？偶然か？ 後編 (前書き)

遂にアクセス数が一万を突破しました！、これもみなさんのおかげです！、後編どうぞ！

第十話、それは運命か？偶然か？ 後編

第十話、それは運命か？偶然か？後編

??????

物心ついた時？、そんなの知らない、．．．いや、わからないんだ
え？なんでわからないかって？、記憶があちこち途切れてんだ、
覚えているとしたら．．．．．

そこは荒れた世界だった、吹く風はなく、天気は曇っており

地面は硬く、岩みたいな地面だった、そこには一人の九歳ぐらいの
少年が倒れていた、暫くすると少年は目覚め体を起こした

「．．．．．？」

少年は体を起こすなりキョロキョロと辺りを見る

記憶を手繰ってみると、辺りが途切れ途切れで、深く思い出そうと
すると頭が痛くなり、それをすぐにやめた

「．．．．．」

取り合えず少年は歩いた、フラフラした足取りで歩いていく

「．．．．．」

少年は黙っている

「（仲間．．．．．大切な人．．．いない．．．いない．．．い
ない？．．．．．）」

足取りは相変わらずフラフラしたまんまだ、それでも歩き、覚えて
る事を思い出す

「（．．．．．ラグラ．．．自分の名前？、ラグラ．．．ラグラ．
．．．）」

ラグラという名前が頭の中からでてきた、少年はそれが自分の名前

なのか、それとも

だれか知っている人の名前なのか、わかないでいた

「(助けた……、仲間……助けた、……奴らから……、奴ら?)」

歩いても、歩いても、同じ景色ばかり、まるで同じところをグルグル回っている

みたいだった、少年はそれでも足を止めなかった

「(どこ?、……ここはどこ?、わからない……わからない)」

なぜか目から涙が溢れ出そうになる、耐えようがない孤独感が体を襲った

「(一人……そう一人……、何もない……ここも……俺も……)」

目から涙がとうとう溢れ出た、だけど少年は歩くのをやめなかつた

どの位歩いたのだろうか?、一時間? いや二時間?、そんな事わからない

景色は変わらず、天気も変わらず、少年はボーっとしながら歩いていた

「……」

「よお!、こんなところで何してんだ?」

突然、誰かに声をかけられた、少年は弾かれたように声のした方向へ向く

そこには深緑のジャケットをきた男性が立っていた、顔はフードを被っていて

見えないが、少年は不思議とその人がいい人に見えた

「……誰?」

「俺か?俺は……」

そう、それが切欠だった、その言葉が……

「流れ者だ」

翌日

午後三時二十分

・・・海鳴市・・・

「!!!!!!!!!!」

ラグラはそこで目を覚まし自分のデバイスに声をかけた

「（ヘイザーノクト、今何時だ!?!）」

「（あ、起きたんですかマスター、えーと午後の三時二十分丁度です）」

それを聞くとラグラは海岸公園のベンチから立ち上がると顔についていた汗を拭った

「（大丈夫ですか?、マスター）」

「（・・・ああ、大丈夫だ）」

「（一体、どんな夢を?）」

「（昔の夢・・・、何もなかった世界で、一人だった夢を）」

「（そうですか、でも今は・・・私がいいますよ）」

「（ああ、今はお前がいてくれるな、ヘイザーノクト）」

昔、あの男性の言った言葉を、今もラグラは忘れてはいなかった、ずっと

自分の胸に刻みつけている、ラグラは空を見上げ

「（・・・よし、いくぞヘイザーノクト）」

「（どこへですか?）」

「（図書館だ、せっかく場所を覚えたんだから、もう一回いってみたいくなってな）」

「（わかりました、行きましょう、マスター）」

同時刻・・・

・・・八神家・・・

「えーと、今日は・・・豚カツだったかな」

今日も平和？平和？な八神家にいる居候、レイウン・クラフトルは
はやてが言っていた今日の晩御飯のオカズを口にしていた

「シグナムさんとシャルさんは図書館に行ったはやてを迎えに行
っちゃったし

ヴィータとザフィーラさんは蒐集活動に行っちゃうし・・・」

そう、ハッキリと言ってしまおうとレイウンは今、とても暇なのである
家事はもう済ませてしまい、夕食のしたくははやてが帰ってきたら
一緒にやる

予定になっている

「(本当に・・・、これでいいのかな？・・・)」

レイウンは今になって考えた、このままでいいのかと？

「(このまま、闇の書を完成させて・・・、完成したら・・・本
当に

はやての足が直るだけなんだろうか？・・・それに、時空管理局・
・・・)」

レイウンは今のところは、管理局にその存在を察知されてはいなか
った

本当なら管理局が出てきた段階でここを離れるべきなのだが、まだ
離れられずにいた

なぜかというとはやてとみんなが心配だからであった、せめてはや
てが足を直るまで

ここにいたいと思った、それに未練があった、ここ八神家に・・・

「(もし、・・・ばれたら、みんなを巻き込んでしまうのは絶対だ、
そうなる前に離れなくちゃ・・・、・・・でも、せめてはやて
の足を・・・命を・・・)」

そこまで思うと、自分の手を強く握った、結局自分は巻き込んでし

まうんじゃないか？」

思うのである、自分は単なる疫病神だと思ってしまおうと、みんなに申し訳ないという気持ちで

いっぱいになる

「……っ……、結局僕は……」

今のレイウンの姿は誰から見ても悲しく見えた

午後三時三十五分

……図書館……

いつも人はいても静かな図書館、流れ者……ラグラは外見や性格から

見ても、意外な事に本が好きだった、そんなラグラが目をつけた本を手にとる

「お、これはおもしろそうだな」

「あっ」

「ん？」

本を手にとった瞬間、ふと横から声がかかった、ラグラは本を手横に

顔を向けるとそこには車椅子に乗った少女がいた

「すまん、目当ての本だったか？」

「いや、平気や、うちはまた今度借りるから……」

少し残念そうに言う車椅子の少女を見てラグラはすぐに手に持つ本を差し出して言った

「いやいや、俺こそ借りるわけじゃあないんだ、ほら」

差し出された本を受け取り、少女は嬉しそう言う

「ありがとう！、うちは八神はやて、あなたは？」

「俺か？俺は単なる流れ者さ」

「流れ者？」

「まあ、放浪者みたいなもんだ」

ラグラの物言いにはやては何かききたげな顔をして聞いた

「名前……、あらへんのか？」

「……名前か……」

考えてみれば、かれこれ二年は名前を呼ばれた覚えがなかった、い
つも

流れ者ですましていた、自分の名前は

「あるにはある」

「その……教えてくれへんか？」

ラグラは一瞬躊躇ったが、なぜか言ってみるきになり、二年ぶりに
自分の名を口にした

「ラグラ、……そう呼ばれていた」

「呼ばれていた？」

「まあ、色々あってな」

「そうか、まあよろしくラグラ」

はやては手を差し出し言う

「ああ……よろしく、はやて」

ラグラはその差し出された手を握り返し言った

「そっかり、ずっと一人で旅をしたんやね」

「まあ、一人ってわけじゃあないけどな」

はやてはいつかのように今日知り合った人と机に向かいあいながら
座り、雑談していた、目の前に座っているのはラグラである

「でも、ラグラ似とるなあ」

「ん？、誰と？」

「うちの家族なんやけど、感じというか……なんかが似とるんや」
はやての言った言葉にラグラは興味を持った、こんな自分に似てる
人がいるという事に

「その似てるって奴はどんな性格をしてるんだ？」

「すつごく優しくて、家事とかいつもやってくれて、すごく頼りになる人なんや」

「そ、それはすごそうだな」

はやての言葉にすこし驚くラグラ、はやての言葉には不思議と気持ちがちがこもっていた

はやては館内に設けられた時計を見て言う

「あ、もういかんと、みんな待っとる」

はやてがそういうとラグラは有無を言わず立ち上がり、はやての車椅子の後ろに回り言う

「外まで押していこう、いいか？」

「あっ、ありがとう」

外、・・・図書館入り口前・・・

はやての乗る、車椅子を押しながらラグラは図書館の入り口を出た

「どこに行けばいい？」

「この先の駐車場、そこに待ってるんや」

「家族がか？」

「うん！」

はやての口振りからすると、相当いい家族なんだろうなとラグラは思いながら車椅子を押していった、この後、大変な事が起きるとも知らずに・・・

・・・駐車場・・・

そこには自分達の愛すべき主を迎えに烈火の将シグナムと湖の騎士シャマルが

はやてを迎えに来ていた

「そろそろだな」

「ええ、そろそろよ・・・」

そろそろはやてがここに来る時間であることをお互い確認しあい図書館の方を二人は見る、そして車椅子の少女が二人の視界に入っただ

「あ、来た来た、はやて・・・!!」

「な!？」

はやてが来たのは問題ではない、問題なのはその主の車椅子を押している者だ

はやては嬉しそうに二人の名を呼ぶ

「シャマルー!、シグナムー!」

とうのラグラも押しながら驚いていた、なんでここに?、と
なんでかんだではやては二人の目の前にやって来ていた

「?、どないしたんや、二人共?」

「あつ、いえなんでも・・・」

「主はやて、そちらの方は」

二人はなんとか落ち着きを取り戻し、シグナムははやてにきいた

「ああ、ラグラや、二人共、もしかして知り合い?」

「えっ、・・・ええ!、そうなんですよ」

「はい、知らない仲ではありません」

二人の言っている事はあながち間違っではないなかった、ラグラはそんな二人を

見ながら、口を開いた

「それじゃあ、俺はこれで・・・」

「待て」

さっさと行こうとするラグラをシグナムは呼び止める

「ん?」

「すこし話をしないか?」

「・・・構わないが」

「そうか助かる、シャマル、主と一緒に先に帰っていてくれ」

「ええ、わかったわ」

「ラグラ、シグナムの事、よろしゅうな」

「あ、・・・ああ、わかった」

「主、夕食にまでは戻りますんで、・・・さあ、いこう」

ラグラは歩きだすシグナムに黙ってついていく

「（気をつけて・・・）」

「（（ああ））」

「（ヘイザーノクト、メンテ終わってるか？）」

「（はい、いけます）」

「（よし、だが万が一だ）」

「（わかってます）」

シヤマルはシグナムに念話を送り、ラグラはヘイザーノクトに念話を送り歩いていった

この出会いは運命なのか？それとも偶然か？、もしかすると神の気まぐれなのかもしれない

第十話、それは運命か？偶然か？ 後編 (後書き)

どうでしたか？、次回もどうか読んで下さい！

第十一話、黒き流れ者と烈火の将（前書き）

第十一話どうぞ！！

第十一話、黒き流れ者と烈火の将

第十一話、黒き流れ者と烈火の将

・・・他世界・・・

夕暮れ時のこの世界、平地が広がり、小さな岩があちこちにあった
その世界に今、二人の人間がいた

「それで、話しとは？」

バリアジャケットを着込み、腰には二本の剣が携えている

黒髪の少年、ラグラは自分から三メートル先にいる女性に言う

「単刀直入に訊こう、お前は今回の件にどれほど熟知している？」

女性、烈火の将シグナムもラグラと同じくバリアジャケットを着込み
本題をストレートに切り出した

「いや、何も知らない、管理局とかいうのにも関わりはない、昨日
来て

いきなりあの戦闘にでくわした」

ラグラは信じてもらえるかわからないが本当の事を簡潔にシグナム
に告げた

「そうか、だがこれ以上、この件に関わらないでほしいな」

納得したように言うシグナム、そこでラグラも聞きたかった事を訊
いた

「・・・教えてほしい、なぜあんた達はある事をする？、あの
本と

何か関係があるのか？、あんた達は悪気があってあんな事をする
とは思えない」

ラグラの問いにシグナムは表情を変えずに答える

「答える必要はない、しかしなぜそう思う？」

「目さ、戦ってるあんた達の目は何かを大切な者を守る目だ、あの

鉄槌を振った

騎士もそうだった」

「・・・そうか」

「まあ、駄目なら無理には訊かないさ、話はこれで終わりか？」

「ああ、話はこれで終わりだ、だが・・・」

「！！」

シグナムは言い切ると同時に自分のデバイス・レヴァンティンを構えその切っ先をラグラに突きつけ言う

「烈火の将として、貴様に決闘を申し込む！！」

「決闘？」

「そうだ、ヴィータを苦戦させ、シャルを倒し、あの我れらが有利だった戦況を

ひっくり返した男と戦ってみたくな

「買い被りすぎだ、あれは偶然が重なっただけだ、それに俺だけの力じゃない」

「ふっ、そうかもしれないな、だが・・・逃がすつもりはない」

シグナムの声に覇気がこもっている事に気付いたラグラは逃げられないと

判断し、自分のデバイスを引き抜いて構える

「いくぞ・・・」

「ああ、・・・来い！」

お互いのデバイスが咆哮をあげる、流れ者と烈火の将の対決が今始まった

その頃

・・・八神家・・・

「ただいまー」

「お帰りなさい、はやてにシャルさん、・・・？・・・シグナムさんは？」

帰ってきたはやてとシャルを迎えにきたレイウンはその中にシグ

ナムが

いないことに気付き二人に訊いた

「ああー、シグナムならラグラと一緒にどこいってもうたけど」

「ラグラさん？、だれですかその人？」

「なんでも流れ者っていうてな」

「!!」

流れ者と言う言葉に一瞬固まってしまうレイウン、シャルははや
ての隣で

あちゃー、といわんばかりの顔をしている

「？、どうしたんやレイウン、かたまってる？」

「・・・えっ、ああー、いや何でもありませんよ！、それより早く
晩御飯を

作りましょう！」

「うん、そやな」

取り合えず話を逸らしたレイウンはシャルに念話を飛ばした

「（どおいう事なんですか、シャルさん）」

「（ごめんなさい、その偶然というかなんというか、とにかく会っ
ちゃったの・・・）」

「（それで、シグナムさんは？）」

「（今は多分、流れ者と・・・戦ってると思う）」

「（大丈夫でしょうか・・・）」

「（大丈夫よ、きっと・・・、シグナムはとても強いから）」

「（・・・そうですね）」

シグナムの強さはわかってるつもりだった、しかしそれでもレイウ
ンの心配は尽きることはなかった

・・・他世界・・・

「はあああああ!!」

「おおおおお!!」

ラグラのヘイザーとノクトがシグナムのレヴァンティンが何度も火花を

散らしはがらぶつかる、クロスレンジ（近距離戦闘）での勝負は手数では

ラグラが、技量ではシグナムが勝っていた

「（つつ、強い!）」

「（くっ!、やはりできる!）」

一旦距離をとったシグナムはカートリッジをロードし自身のデバイスに叫ぶ、

「レヴァンティン!」

「Schlangeform」

デバイスから電子音が鳴ると同時にシグナムはレヴァンティンを距離が

開いているにも関わらず、ラグラに目掛けて振った

「?、なんだ・・・、!?」

シグナムのその行動に声を出すラグラだったが、すぐにその行動の意味を理解した

「鞭になった!?!、・・・いや、連結刃か!」

「はあっ!」

シュランゲフォームになったレヴァンティンの切っ先がラグラ目掛けて地面を

抉りながら迫る

「あっぶね!」

ラグラは下からくるレヴァンティンを体を横に動かしてよけるが「無駄だ!」

シグナムが叫ぶと避けた切っ先が方向を変え、再びラグラに向かって迫った

「なに!?!、ぐあっ!」

咄嗟に反応したものの、左肩を掠り切られてしまいラグラは小さな

悲鳴を上げる

、非殺傷予定だから外傷はないが、自身の魔力を削られて、痛みを味わうのは変わりない

そんなラグラに容赦なくレヴァンティンの三撃目がくる

「くっ！、させるか！」

ラグラは右手に持つヘイザーを横薙ぎに振るいレヴァンティンの刀身を

弾き飛ばし、自身のデバイスに叫ぶ

「ノクト、・・・バーストモード！」

「了解、バーストモード、リリースします」

ノクトを握る柄の横にあるグリップを握る、そしてノクトの切っ先から

ライフルの銃口がでてきた

「！？」

今度はシグナムが一瞬驚かされた、大きいただの片刃の剣が銃になったことに

そんなシグナムにラグラは躊躇いなくノクトのトリガーを引いた

「クオインタムショット！！」

ノクトの銃口から野球ボールほどの大きさの魔力弾が発射された

シグナムはいそいで障壁を発動させる

「レヴァンティン、私の甲冑を」

「Panzerhinderis」

障壁、パンツァーガイストを発動させる、クオインタムショットがシグナムに

当たり爆発し爆風があがる、爆風はすぐに晴れ、シグナムが見える

「まさか・・・、銃にもなるとはな・・・」

「そっちこそ、まさか連結刃に」

しかし様子からするとクオインタムショットではシグナムの障壁は破れなかった

シグナムは再びレヴァンティンを振るい、連結刃を動かす

ラグラは再び動き出した連結刃の動きに注意しながら言う

「ノクト、カートリッジロード……」

「カートリッジ、ロードします」

葉莢がノクトから排出されると銃口をシグナムに向けるが、トリガーを

引かず、連結刃の動きに警戒する

「（どこからだ、どこからくる？）」

連結刃はラグラを包囲する形で動いている、そしてその包囲していた刃が

収束していく、ラグラはすぐに上空に飛び、それを避け、自分の斜め下に

いるシグナムにノクトの銃口を向け

「クオンタム……バスター！」

「（砲撃だ！？、くっ！）」

シグナムは間一髪のところでは上空に飛び、クオンタムバスターを避けレヴァンティンを本の剣の状態、シュベルトフォルムに戻しそのまま上空にいたラグラに斬りかかるラグラもノクトをバーストモードからブレイドモード

に切り替えており二本の剣でシグナムの剣を迎えうった

「はあっ！」

「うおお！」

罅迫り合いになるがラグラはヘイザーをバーストモードにし、ノクトのみで

シグナムのレヴァンティンを受けとめ、シグナムの腹部にヘイザーの銃口をつきつけ

「な！？」

「吹き飛ばし！」

クオンタムショットを発射した、勿論シグナムが障壁をはれるわけがなく

そのまま吹き飛ばされて、地面に叩きつけられた

「ヘイザー、ブレイドモードに戻れ」

「了解」

地上に降りながら言い、地面に降り立つ時にはシグナムが立ち上がっていた

だがその体は少しふらついていた、しかしシグナムはレヴァンティンを鞘にしまいはじめた

「（デバイスをしまった？、……また連結刃か？）」

「（この一撃を……奴は受けられるか……）」

シグナムの足下に魔力陣が展開されその周囲には魔力の波が発生していた

デカイ一撃が来ると感じたラグラは自身のデバイスに指示を飛ばした

「ヘイザー、ノクト、バスターフォームに」

「バスターフォーム、リリース！」

ヘイザーとノクトを合体させ一本の長剣にすると、シグナムが動いた

「飛龍……一閃！！！！」

抜刀すると同時にレヴァンティンをシュランゲフォームにすると連結刃を

竜巻を描くように振り回し、その刀身に宿った強大な魔力を放出させ巨大な真空波を繰り出した

「カートリッジ……ロード」

「ロード」

ヘイザーノクトの左右からカートリッジが排出される、ラグラはヘイザーノクトを

上段に構える、飛龍一閃はもう目の前まえに迫っていた

「残光……裂翔波！！！！！！」

構えていたヘイザーノクトの刀身を地面に叩きつける、叩きつけられた地面と刀身から

巨大な衝撃波が出た、飛龍一閃と残光裂翔波が激突し

ドオオオオオオオオオオ！！

爆発、爆風がラグラの視界を遮った、その瞬間をシグナムは待っていた

「くっ！、どこだ？」

「もらった！！」

「なに！？」

煙の中からシグナムが現れ、すでにカートリッジをロードし終えたかにみえる

シュベルトフォームに戻ったレヴァンティンを振りかぶっている、その刃には燃え盛る炎が宿っていた

「紫電・・・一閃！！！」

「（くっ、間に合え！！！！）」

ラグラはすぐに体を捻って避け・・・・・・・・・・

「なんだと！！！？？」

「（あぶな・・・かった・・・）」

避けた・・・のである、腹のところをすれすれで、しかしシグナムの攻撃は

終わらない、すぐに刃をかえしてきりかかる、ラグラもヘイザーノクトを振りかぶり

夕日がもうすぐ隠れるこの世界、消えかけている夕日が二人を照らした

シグナムのレヴァンティンの刃はラグラの首すれすれのところで止まっております

ラグラのヘイザーノクトもシグナムの首すれすれのところで止まっている

「「ハアッ、ハアッ、ハアッ、ハアッ」」

二人の息が荒い、まだお互い切り札を使っただけで体力は底を突きかけていた

「ハアッ、ハアッ、・・・まだ・・・やるか？」

「ハアッ、・・・いや、もういいだろう？」

「フッ、そう・・・だな」

その言う二人はお互いのデバイスを下げ、緊張を解いた

「それにしても・・・やはり強いな、お前は」

「いやいや、技量とかではあんたの方が格段に上だ、もう一回戦ったら絶対に俺が負けるよ」

「謙遜するのか、そんな良い剣を十分扱えているにもかかわらず」

「ありがとうございます」

「そっちこそ、あんたの剣は、強く・・・そして逞しい剣だな」

「ダンケ（ありがとう）」

これからお互いが敵になるかもしれないのにも関わらず、戦いを終えた二人は

妙に親しく見えた、それにシグナムは内心喜んでいて、こんなに強くてこんなにも自分を奮い立たせた戦士と出会えたのだから

「私はそろそろ行く、夕食前には帰ると言ったのでな」

「ああ、俺も・・・行くか」

多分この男は敵として、私たちにきつと立ち塞がるであろう、そんな気がした

シグナムはラグラに背を向ける前に言った

「守護騎士ヴォルケンリッターの烈火の将、シグナムだ、お前は？」

「流れ者・・・、ラグラだ」

それだけ聞くとシグナムはラグラに背をむけて

「縁があったらまた会おう、ラグラ」

「ああ、シグナム」

そのまま歩きだしながらシグナムは思った

「（クラフトルとラグラのなにが似ているのかが・・・なんとなくだがわかった気がする）」

ラグラは黙ってその背中を見送った、シグナムが転送されるのを見届けた後

「……さて、俺達も行くか、ヘイザーノクト」

「はい、マスター」

夕日が完全に沈み夜になった、夜になったこの世界には誰もいなかった

・・・海鳴市・・・

転送魔法陣から出てきたラグラは取り合えず安堵の息を吐いた

「ふう〜、・・・烈火の将シグナムか・・・」

「どうしたんですか？」

「いや、・・・本当に強かったなって」

「確かに・・・、こっちも切り札は使いませんでしたけど、あっちもまだ

使ったようには見えませんでした」

「しかし・・・、あんなにすごいシグナムがなんであんな事を・・・」

今しがたシグナムと戦ったラグラは、シグナムのあの時の行為が未だにわからなかった

なぜヴォルケンリッターはあの時、なのはを襲ったりしたのだろうか？、

ラグラは自分の推測からするとあの本が何かと関係してるように思えた

それにシグナムははやての事を主と呼んでいた、守護騎士ということとははやてを

守るための騎士達なのではないのであろうか？と思った

「（わからないな、・・・、全く・・・）」

考えててもしかたないかと思い、歩き始めたラグラだが突然バラン

スを崩して

横にあった壁にもたれかかってしまう

「マスター！？、どうしたんですか！」

「っ！、……我慢弱いな俺は……」

「まさか……あの時の……」

ヘイザーノクトが言ったあの時とは、ラグラがシグナムの飛龍一閃を
残光裂翔波で

相殺した時にシグナムが出した紫電一閃が避けた時である

「あたって……いたんですか？」

「……ああ、心配するな、すこし休めば大丈夫だ」

心配するヘイザーノクトを宥めると、不意に後ろから声した

「流れ者……さん？」

ラグラはこの声に聞き覚えがあった、そう昨日聞いた声だ、自分が
助けたあの少女の声

ラグラは振り返り言う

「……なのは」

あの時とは姿が違い私服だが、間違いなく彼女・高町なのはがそ
こに立っていた

ラグラはこの再会が自分にとってなんなのかは今はわからなかった

第十一話、黒き流れ者と烈火の将（後書き）

どうでしたか？、次回もお楽しみください！！
（タイトル間違っていましたから直しました、すいませんでした！）

第十二話、管理局との出会い（前書き）

更新、遅れて本当にすみませんでした！、駄文ですがどうぞ

第十二話、管理局との出会い

第十二話、管理局との出会い

・・・海鳴市・・・

海鳴市のある一角で、少年と少女は再会した、思えば意外に早い再会だと

二人は思っていた、少年・・・ラグラは壁に寄り掛かった状態で口を開いた

「また・・・会ったな」

「・・・うん・・・」

少女・・・高町なのはは心配顔で返事をした、なぜかというラグラの状態が

決して健在ではないように見えたからである

「怪我はもう平気なのか？」

「うん、それより・・・流れ者さんのほうこそ、・・・その」

「俺ならだいじょ・・・っ・！」

「流れ者さん！」

大丈夫といいかけたラグラの体が痛みで体勢を崩し前へと倒れかけたなのはは声を出し慌ててラグラの体を支えた

「すまないな」

「ううん、それよりなんで？」

「ちよつとな、・・・それよりどこか休める場所に・・・公園かなんかに連れて行ってくれないか？」

・・・八神家・・・

その頃、八神家に烈火の将シグナムが帰ってきていた
帰ってきたシグナムは靴を脱ぎすぐにリビングに入る

「あ、シグナムさん、お帰りなさい」

「おかえりシグナム」

リビングに入ったシグナムを迎えたのはレイウンとはやてっであった
ちなみにヴィータとザフィーラは蒐集活動から帰っており、まだ
帰ってきてない者はシグナムが最後であった

「遅かったな、なんかあったのか？」

「まあ・・・な」

シグナムがどこに行っていたか知らないヴィータの問いにシグナム
は凜と答えた

「夕食の支度終わってるから、はよ食べよう」

「はい、我が主」

はやての言葉を笑顔で返事をするシグナムだがレイウンとザフィー
ラには

なにかおかしいという思いがあった、シグナムがなにかやせ我慢を
している

様にしか見えなかった

「（シグナムさん、・・・何かへんだな）」

「（何かあったか・・・）」

二人は自分の頭で考えながら夕飯の席についた

・・・公園・・・

「ありがとう・・・だいぶよくなったよ」

「ホント！、よかった〜」

あれからラグラはなのはに連れられて公園まで来ていた、ベンチで
少し休んでいた

ラグラの言葉になのはは安心の声を上げた

「しかし、まさかまた会うなんてな」

「にやはは、そうだね」

苦笑いで言うラグラと比べてなのは嬉しそうであった、なのはは自分のポケットから

会ったら渡したいと思っていた、ある物を取り出した

「あの・・・これ」

「ん？、・・・！」

ラグラはなのはが取り出したある物を見りなり驚いた

「あれ？、それ・・・どこに？」

「流れ者さんのコートの中に」

「・・・そういえばいれっぱなしだったか」

バツが悪そうに言うラグラはそのままなのはが持っていたある物・

・
ロザリオを受け取り言う

「悪いな、わざわざ」

「全然、それよりそれ・・・大切な物なの？」

「ああ、俺にとってとても大切な物だ」

「そうなんだ」

ラグラは受け取ったロザリオを自分の首に掛けながらいった

「あの後・・・、みんなはどうしたんだ？」

「うん、あの後私たちはそのまま管理局の本局に行ったの」

「時空管理局だったか？、その管理局っていうのは一体なんなんだ？」

ラグラの問いになのはは驚いて声を出した

「ふええ！？、流れ者さん、管理局知らないの！？」

「ああ、全く知らない」

「そう・・・なんだ」

「なんだ、そんなに有名なのか？」

「うん、流れ者さんデバイス持ってたからてっきり知ってたと思っ

てた」

「ヘイザーノクトは拾い物だしな、ただミッド式とかベルカ式とかの知識は知っている」

「流れ者さんのデバイス、ヘイザーノクトっていうの？」

「ああ、いつも助けられてる」

「なに言ってるんですか、マスターがいてこそ私が力を発揮するんでしょう」

「ふええ？、ヘイザーノクトってインテリジェントデバイスなの？」
今まで黙っていたヘイザーノクトが声をだし、なのはビックリしながらもの聞いた

「そうだな、まあ簡単に言ってしまうとそうだな、てかヘイザーノクト、よく今まで黙ってたな」

「いえいえ、もう黙っているのも我慢の限界でしたので」

「そうか、悪かったな」

「あの・・・ヘイザーノクト・さん？」

「初めまして高町なのはさん、私はヘイザーノクトといいます、主にマスターの補佐をやっています」

「ついでに相談役でもあるな」

「へえ〜、そうなんだ」

「ところでなのは、フェイト達は？」

なのはとは今会っているがフェイトやユーノにアルフの三人はどうしてるのか

ラグラには気になっていた

「フェイトちゃん達ならこの町にいるよ」

「え、ここにか？」

「うん、今日引っ越してきたんだよ」

「引越し！？、それに今日！？、・・・それはまたお早いな」

「あ、そうだ流れ者さん、フェイトちゃん達に会いに行かない？」

「会いに？」

「うん！、みんな会いたがってるよ」

「しかしな・・・」

会いに行くのをどうも渋っているラグラを見たのははラグラの手を取り、引っ張った

「ほらほら！、いこ！」

「あ、ちょ！？、引っ張るな！、痛い！痛いって！」

・・・数分後・・・

今、ラグラとなのはが立っているのは海鳴市にあるマンションの前
ちなみにラグラはなのはに引っ張られて来たので紫電一閃の傷がツ
キヅキ痛んでいた

「うーうー、いてえーうー、ひどいよなのはーうー」

「にやはは、ごめん」

「まったく・・・それで、ここに居るのか？」

「うん、フェイトちゃん達はここに住んでるの」

「へえーうー、なあフェイトってこの世界に人間じゃあないよな？」

「うん、もとは別の世界の子だよ」

「やっぱそうか、どうりで・・・」

そんな会話をしつつ階段を昇り、フェイトの家なのだろう扉の前に
ついた

「じゃあ、入るよ」

「ああ」

鍵がかかっているのかふつうに扉を開けるなのは、ラグラは思わず
鍵あいてんのかい！、っとツツコミかけたがやめた、なのはにつづ
いて中に

入ると玄関の廊下にエメラルドグリーンの長い髪の毛の女性が居た

「あ、リンディ提督」

「なのはさん、・・・あら、そちらの方はもしかして」

「はい、流れ者さんです！、たまたま会っちゃいました」

「そうだったの・・・」

そう言いリンディはラグラの方を見る、リンディにとっては前回の戦闘の参考人であり

なのは達を救ってくれた恩人であった、見た目からしてまだ子供であることに少々驚いていた

ラグラは取り合えずリンディに向かって小さく頭を下げた

「取り合えず中で話をしましょう」

「あ、はい」

リンディに促され、ラグラはリビングへ入るとそこには見覚えがある顔がいた

「なのは、リンディ提督・・・！・・・流れ者！？」

最初に声を出したのはフェイトだった、フェイトはそのまま流れ者の近くにより言った

「流れ者、どうしてここに？」

「まあ、そこにいるなのはに引っ張られてきた」

ピツとなのはを指を刺しながら言うラグラ、なのはは苦笑いしながら頭を掻いていた

そこにもう一人、なのはと同じ位の身長をした少年が寄ってきた

「流れ者、こうして近くで会うのは初めてだね」

「お前は・・・ユーノか？」

「うん、あの時はなのはを助けてくれて本当にありがとう」

「いやいや、気にするな」

「気にするなって言ったって、あんたがいなきや状況はもっと最悪になってたんだ」

「アルフ、あれはみんなの協力があってこそだと俺は思うんだけどな」

狼の耳と尻尾を生やした女性、アルフもいた

「まあ、それもそうだね」

ニヤッと笑いながら言うアルフに対してラグラもニヤツと笑い返した

「なるほど、確かにみんなの言ったとおりの男だな」

「?・・・あんたは?」

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ、君が流れ者だな?」

「ああ、そうだ」

「そうか、まさか僕と同じ年位とは驚いた」

「そんなに驚く事か?、えーとクロノでいいか?」

「ああ」

ラグラはクロノはお互いに握手をし、紹介を済ませた

「もークロノくんずるいよー!、わたしも流れ者さんに自己紹介したいよー!」

するとそこに頬を膨らませながらエイミィ・エミリエツタはクロノ言った

「ごめんごめん、エイミィ」

クロノがエイミィと呼んだ女の子をラグラは見た、見たところなのは達より

年上に見える、たぶん自分より年上だろうと思った

「?、その人は?」

「初めまして!流れ者さん、あたしはエイミィ・リミエツタ、アー
スラオペレーター

及び執務官補佐をやってるんだ、よろしくね!」

「ああ、こちらこそ」

笑顔で手を差し出すエイミィの手をラグラは握り返し言った

取り合えずこの場にいる全員の紹介をうけたラグラは先ほど玄関で
会った

リンディ・ハラオウンと向かい合うような形で座っていた、ちなみ
にラグラの

隣にはなのはとフェイトが座っている

「さあて、まずは自己紹介からね、時空管理局提督リンディ・ハラ

オウンです」

「ハラオウン？、ということとは・・・」

ラグラはクロノの方に視線をむけ言った

「はい、クロノはわたしの息子です」

「へえ〜」

外見は父親似なのだろうか、確かに感じが若干似てると思っていた
ちなみにクロノは若干照れていた

「それで、あなたは？」

「俺か？俺は・・・俺は流れ者だって言いたいんでしょ？本当の名
前はないんですか？」・・・！」

ラグラの言葉を途中で遮り言うリンディの言葉に少し驚きながらも、
ラグラは一瞬躊躇ったが

本名を口にした

「ラグラ・・・という」

「そう、じゃあラグラさん、まずはお礼を言わせてもらおうわ、もし
あなたが

あの場に居合わせてなかったら間違いなくなのはさんはリンカーコ
アをもっと

沢山奪われていたわ、本当にありがとうございます」

「よしてくれ、俺はただ助けただけで後は何も大したことは何もし
ていない」

少し照れながらぶっきらぼうに言うラグラを見てリンディは嬉しそ
うに笑みを浮かべて言う

「ふふふ、そうかしら？」

「ああ、そうだ」

「それはそうとラグラさん、少し質問をしても構わないかしら？」

「ん、ああ、構わない」

「じゃあ最初の質問、なぜあなたはこの世界に残ったのかしら？」

「それがあの戦闘が終わった後、俺は別の世界にいくつもりだった
んだが・・・」

時空転移システム、通称・旅の足が起動しなくてな」

「旅の足？」

フェイトがラグラに質問を飛ばす

「簡単に言うとな数にある次元世界のどれかにランダムで転送するシステムだ」

「えっ、じゃあまさか、ヘイザーノクトさん、あの時の戦闘でどこか壊れちゃったの？」

この問いはなのは、ラグラは首を横に振りながら答えた

「いや、一回ヘイザーノクトを全部バラバラにしてみたんだが、破損は見やたらなかった」

「それで、つまりその旅の足というのが起動しなかったわけですね？」

「ああ、だからこの世界に残らずおえないという状況になってしまったわけだ」

「そうだったの」

領きながら机に置かれていた湯飲みに入った緑茶の中に砂糖と牛乳をいれるリンディ

それを見たラグラは何となく違和感を感じ隣にいるのはに小声で聞いた

「（ああやって飲むのか？）」

それを聞かれたなのは首を横にブンブンと振りながら否定した

「それじゃあ次の質問、あなたは今回の件に関してどれほど知っていますか？」

「いや、全く知らない、ただあの分厚い本がああ騎士達となにか関係しているんじゃないかと俺は思っている」

何気にもすごいラグラの推測に少しリンディは驚き、ラグラに最後の質問を飛ばした

「じゃあ最後の質問ねラグラさん、あなたはこれからどうするの？」

「それがまだ決まっていらない、こんな事は初めてだから・・・、困った」

初めての状況に正直お手上げなラグラにリンディはある提案した

「ラグラさん、もしよろしければあなたの力を・貸してはくれないかしら？」

「「「「「！！」」」」」」

真顔で言うリンディの提案に驚くのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノ、エイミィ

当然、ラグラ本人も驚いている

「！、・・・なぜだ？その時空管理局もそれ相応の戦力をもっているんだろう？」

俺なんかの手を借りるまでもないんじゃないか？」

「当局は今回の件に関しては私達の部隊しか回していません、本当なら

こんな事はしかたくはないのだけど、今は猫の手でも借りたいところなの」

「そう・・・なのか」

突然の申し出に悩むラグラ、つまりこれはこの件に介入するのと同じなのである

ラグラはあまりこういう事には関わりたくないようにしているのだが、今回は少し違った

「・・・」

「ラグラ君・・・」

「ラグラ・・・」

なのはにフェイトはラグラの名前を口にしながら彼の解答を待つ、その他の

面々も同じ感じで待っている、ラグラは少しだけ考え口を開いた

「二つ、条件がある」

「なんですか？」

「一つ、俺のデバイス、ヘイザーノクトを絶対に詳しく調べないこと
それと二つ、俺が突然いなくなったりしてもお咎め無しにすること
だ」

「・・・わかりました、確約はできませんが約束はしましょう」

「助かる」

ラグラはそう言うと言席を立ち、みんなに向き直り言った

「それじゃあみんな、力になれるかわからないが・・・これからよろしく頼む！」

流れ者・・・ラグラは再び、戦いの渦へと飛びこむことになった
過去に犯した自分の失敗を・・・振り払うかのように

第十二話、管理局との出会い（後書き）

ど、どすか？、次はもっと早く更新できるようにがんばりますので
どうかこれからもよろしくお願いします！

第十三話 お世話になります！（前書き）

更新遅くて本当にすいません！つてか明日テストだ・・・、そんなわけで駄文ですがどうぞ！

第十三話、お世話になります！

第十三話、お世話になります！！

海鳴市・・・八神家・・・

ここ、八神家では夕飯を食べ終わり家族全員がのんびりする時間に
シウルシウルシウルシウル

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ある一室に金髪の少年とピンク色のポニーテールの女性がいた
女性のお腹には青ざめているアザがあった、少年はそのお腹に塗り
薬を塗り

今、包帯を丁寧に、優しく巻いていた、そして巻いた包帯をテープ
でしっかり固定すると

「・・・はいシグナムさん、終わりました」

「すまないな、クラフトル」

金髪の少年、レイウン・クラフトルはシグナムに手当てが終わった
事を言った、

先ほど戦った流れ者・ラグラとの戦闘により負ったシグナムの傷を
みんなには内緒で

レイウンが治療していたのであった

「いいえ」

レイウンは首を横に振った

「それにしてもシグナムさん、こんな怪我をしているのにすごく上
機嫌ですね」

「まあ・・・な、久々に二人の強敵に会えたのだからな」

「強敵？」

「ああ、今日の戦いは久しぶりに心が踊った」

「心が・・・踊る？」

「クラフトルにはないか？、自分の心が踊る時というのが？」

シグナムの問いにレイウンは少し考えた、自分の心が踊る時・・・

それは自分の嬉しい気持ちが高潮に達した時の事を示すのであろう
「あります」

「ほお、それはどんな時だ？」

「それは、はやてにシグナムさんにシャルさん、それにザフィーラさんとヴィータが

・・・家族がみんな揃ってる時です、みんなが一緒に居る時がなによりも嬉しく

僕の心が踊る時なのかもしれません・・・」

「・・・そうか・・・」

シグナムはレイウンの言葉に微笑で答えた、彼女にとってその返答はとても嬉しいものであった

「その・・・シグナムさん」

「なんだ？、クラフトル」

「流れ者・・・そのラグラさんっていう人は・・・一体どんな人なんでしょうか？」

みなさんから色々聞いてはいるんですけど僕は会ったことはないんでどんな人なのか・・・」

戦いの話なるとよくみんなが口にしてる流れ者・・・ラグラという人物、管理局の者ではないことは

確かであるとレイウンは思っている、現にシグナムは先ほど今日の事情を聞いたかぎりだとラグラ本人は

嘘をつく男ではないと思ってるためラグラの言った事は信じられると言っていた、だからこそ

レイウンはどんな人なのか聞いてみたいと思ってシグナムに聞いた
「・・・そうだな、歳はクラフトルと同じ位で快活な男だな、そ

は恐る恐るラグラの

服を触るや臭いを嗅いだりした

「ふえっ？、服は汚れてないし匂いも臭くない・・・」

「まあ、服は特殊な材質でできてるしな、結構便利だぞこの服」

「じゃあ匂いはなんで？」

「それはトップシークレットです」

ユーノの問いをヘイザーノクトが答えた

「ヘイザーノクト、お前突然だなく、まあそういうことのしといてくれユーノ」

「う、うん」

「でもラグラ、今日も野宿なの？」

「そうなるな」

ラグラはやれやれといった顔でそう言うとなのははある提案をした

「ねえラグラ、だったら私の家に来なよ！」

「えっ、いいのか？」

「うん！、全然いいよ！」

「（なんかすごい自信たっぷりだな）」

ラグラはなのはの自信ありげな言い方に少し驚きつつもなのはの言葉に甘えることとした

海鳴市・・・高町家前・・・

「ここがそうなのか？」

「うん、ここが私の家だよ」

普通の家より大きいなあっとラグラは思った、家の前には道場と思われる建物が

あるがさすがにこれは別の人のだな〜と考えつつ視線をなのはに向ける

「なあ、本当にいいんだぜ、俺なんかに気を遣わなくても？」

「ラグラがこんな寒い夜に野宿する方が私にとってはすごく嫌だよ」

「そうか？、案外涼しくて気持ちいいぞ？」

「ず、随分と変わった神経だね」

ユーノが正直な感想を漏らすとなのはが玄関の扉を開けラグラの方をむいて言った

「じゃあ、お父さんとお母さんに訊いてくるからちよつと待ってて」

「あ、ああ」

そういうとなのはとその肩に乗っているユーノは家に入って行ってしまった

ラグラは一人外でポツンとしてしまった

「(・・・・・・・・)」

暫くボーっとしているが当然何も起こらない

「(本当に大丈夫なのか・・・・・・・・?)」

やっぱりこのままどっか行っちゃおうかな？っという言葉が頭に浮かんだ瞬間

「(駄目ですよマスター、勝手に行ってしまったは)」

「(こらこら、勝手に人の心を読むんじゃないヘイザーノクト)」

そんなやりとりをしていたら扉が開いてなのはがひょっこり顔を出してきた

「ラグラ、入って来ていいよ」

「(まじかよ・・・・・・・・) ああ」

そう言うラグラは家に中に入ると中にはなのはは勿論、あとは両親？らしき男女が立っていた

「初めまして高町桃子です、ラグラ君でいいかしら？」

「あ、はい、あの〜〜なのはのお母さんですよね？」

「ふふふ、そうですよ、姉かと思いましたか？」

「はい」

「ははは、素直な子だな」

「もお、お父さんも挨拶してよ〜」

「悪い悪い、ラグラ君だっけか、なのはの父、高町士郎だ」

「あ、はい、その・・ラグラです」

やや緊張気味に答えるラグラ、取り合えずそんなラグラの思った事は「(二人とも若すぎる・・・)」

きつとなのはが一人目の子だなんだと勝手に思い、取り合えず勝手に納得

そんな中、桃子がラグラをビックリさせるには十分な言葉を言った

「ラグラさん、なのはを助けてくれて本当にありがとう」

「へっ？」

ラグラは一瞬面食らってしまう、確かに自分は助けたは助けたが、一つの疑問も浮かんだ

なのはは魔法の事を家族には黙っているんじゃないか？という疑問だ

「いや、車に轢かれそうになった所を助けてくれたらしいな、本当にありがとう」

「い、いえ、あの時はビックリしましたよ、目の前で轢かれそうの子がいたから

慌てて助けましたよ、まあ轢こうとした奴には逃げられましたが・・・」

ラグラは何とか口を合わせなのはに念話を送った

「(なのは、これは一体・・・?)」

「(あははははごめんね、これしか思いつかなかったの)」

ひとまずリビングで話をするようになった、まず口を開いたのは士郎だった

「それでラグラ君、君はこの日本に外国から友人を訪ねに来たのが右も左もわからないで

右往左往していた矢先になのはを助けてくれたわけだね？」

おい、こんな壮大な嘘を言ったのはだれだーーーー！(勿論作者)つと言いたくなったがラグラは

なんとか返事を返した

「はい、そういう事にんまりますね……」

「そうか、君はこれからどうするんだい？」

「……取り合えず友達を捜しますね、まあ見つかるかはわかりませんが……」

「そう、じゃあ今夜はゆっくりしっていったちようだいね」

「はいはい……って、ええ!？」

まさかまさかのお泊りOK的な桃子の言葉にビックリするラグラ

「い、いいんですか？」

「勿論だよ、なのはの命を救ってくれたせめてものお礼だよ」

「……じゃあ、その……たのみます」

そう言うラグラは頭を下げた

リビングでのやりとりが終わった後、すぐに夕飯になった

夕飯どということになったから家族全員が揃うわけだ、なのはの兄妹だと思われる二人も来た

一人は女の人でどこかなのはに似ていてメガネをかけている、もう

一人は父親の士郎にそっくり

な男の人だった、見たところ二人共ラグラより年上だ

「あれ?、お客さん？」

「ええ、ラグラ君よ、なのはの命の恩人よ」

「ええ!、恩人!？」

「何かあったのか？」

「車に轢かれそうになったのを助けてもらったそうなの」

「へえ〜」

そう桃子から聞くと女の方はラグラの方に視線を向け言う

「あたしは高町美由紀、なのはを助けてくれてありがとうラグラ君」

「いえいえ、美由紀さんですか、なのはのお姉さんですよね？」

「そうだよ」

そこに男の方も声を掛けて来た

「まさか轢かれそうになったところを助けてくれたとはな、高町恭也だ」

と言って手を差し出してくる、ラグラはその手を握り返し言う

「恭也さんは士郎さん似ですね」

「そうだろう？、自慢の息子だ」

「父さん、こんなところで・・・それに俺はまだまだだよ」

照れたように言う恭也を見てラグラは笑みを漏らした

さあ全員席について夕食、だが今夜はいつもより一人増えている
ちなみに今晚の夕食はサンマの塩焼きにご飯に豆腐の味噌汁だ
「それじゃあ・・・」

みな両の手と手を合わせる、ラグラもそれに見習って合わせる

「「「「いただきます！」」」」」

「・・・いただきます・・・」

一歩遅れだがラグラはそれも見習って言った

「？、どうしたの、ラグラ？」

握っているお箸をジッと見ているラグラになのはは訊いた

「いや、これはその・・・どうつかえбайいんだ？」

「ええっとね、それはこうやって持つんだよ」

ラグラにお箸の使い方を教えるなのは、この光景は高町家のみんな
にとっては

とても微笑ましいものであった、みんなから自然と笑みが出てしまう

「こうか？」

「うん、そうそう」

十五秒ほどかかったがなのはのレクチャーのおかげでラグラはお箸

の使い方を覚えさっそく料理を・・・

まずはサンマから

「パクツ・・・・・・」

つい視線をラグラに向けるみんな、ラグラは

「！！！！、こ・・・これは！」

「こ、これは？」

「うまい！」

つと言いまもりもり食べていくラグラ、桃子が作った料理がそんなにおいしいかったようだ

食事が終わった後はみんなと雑談になった、ラグラは今まで自分が見てきた風景や

自然の神秘などをみんなに話した、本当は別な世界の話なのだがなのはとユーノ以外の

みんなは冗談半分で聞いてくれた、時間はもう夜遅くになり寝ることになった

さてラグラはどこで寝るかということになったのだが

「リビングのソファでいいですよ」

という本人のつよつよい意見によりソファで寝ることになったのである

「本当にソファでいいの？」

「全然いいですよ、ご飯まで頂いた挙句に泊まらせてもらうんですから」

桃子は最後まで渋っていたが本人がそう言うならしかたがないと思い、毛布と枕を

ラグラに渡し部屋に行ってしまった、士郎と恭也、美由紀になのはとユーノもそれに続いて戻っていった

・・・深夜・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

普通ならみんなが寝付いているこの時刻、ラグラはソファに座っていた

簡単に彼の状況を説明すると眠れないのである

「（まいったな・・・・・・・・眠れない）」

そんな事を考えているとふと違和感を感じる、廊下に行く扉の先に誰かが立っていると・・・

そんな風を感じた、しかしラグラはそれが誰かがなんとなく予想できていた

「・・・・・・・・なの？」

「えへへ、ばれちゃった」

照れながらでてくる少女にやっぱりといった顔でラグラは返事をした

「どうした？」

「その・・・なんだが眠れなくて」

「そうか、俺もだ・・・」

そう言うとなのははラグラの隣に座った、冬の夜の月光が窓からつき抜け二人は照らした

「ユーノは？」

「ユーノ君はもう寝ちゃった、私は寝そびれちゃったかな」

「かもな」

苦笑いしながら答えるラグラ、ラグラは顔を下げ言う

「なにか訊きたげな顔してるな」

「えっ・・・」

「遠慮なくていいぞ、訊きたい事があったら訊けよ」

「うん、じゃあどうしてラグラは流れ者をやっているの？」

「うーんそうだな・・・、何か打ち込める事を捜しているからかな」

「打ち込める事？」

「ああそうだ、でも結局まだ見つからないから流れてんだけどな・・・」

「そうなんだ・・・」

「まあ、簡単に見つかるものでもないからな」

「・・・以前に何があったの？・・・」

「え？」

「あの時念話で言ってた、あの言葉」

「あれか・・・」

「教えてほしいの、ラグラに何があったのか・・・」

強い目で言ってくるのはを見てなぜかラグラは言ってみる気になった

「以前な、一年位前か・・・、俺はある世界で厄介事に首を突っ込んだ」

淡々と言う、ラグラは目を閉じそのままつづける

「そこで大ミスやっちゃってた・・・、沢山の人が傷ついた・・・、死者が出なかったのが幸이었다」

「!？」

「多くの人が俺を恨んだよ、お前は厄介者だ！ってな、まあ当然なんだけどな」

「しかしマスター、あれは相手の逆恨みでは・・・」

「いいんだヘイザーノクト、切欠を作ったのは俺だ」

「じゃあそれでラグラは厄介事には手を出さないようにしたの？」

「ああ、もう関わらないって思っていたんだけど、今回の件でまた首を突っ込んでしまった」

「・・・ごめん」

「なのはが謝る事はないさ、協力を決めたのは俺自身なんだからさ」

「・・・でも」

「心配すんなよ、それにこっちこそ悪いなこんな事までさせてしまっ
って」

「ううん、お母さん達、すごく喜んでたから」

「そうなのか？」

「うん！」

「そうか、それは嬉しいな・・・」

ラグラは嬉しさを顔を出し、リビングにある時計を見て言う

「それじゃ、もう寝るかな・・・」

「じゃあ、私も部屋に戻るね、あっ・・・それとラグラ」

「ん？」

「これからよろしくね」

「ああ」

「うん、それじゃあおやすみ」

「おやすみな」

つと言いリビングを後にした、ラグラはソファに横になり考えた

「（初めてだな、誰かの家で寝るの・・・、あんなに美味しいご飯食べたの）」

「（よかったですねマスター）」

「（なあヘイザーノクト）」

「（はい？）」

「（俺・・・、みんなの役に立てるかな？）」

「（立ちます・・・いえ、立ってみましょう）」

「（・・・そうだな、やれるだけやってみるか）」

そう言い念話を切るとこんどこそ目を閉じて眠った、新たな朝を迎える為に・・・

第十三話 お世話になります！（後書き）

はあく最近スランプ気味だ、実際にかかってみるとこれは辛いものだ・・・、

次回もラグラ主体になりそうです、（レイウン好きな方は本当にすみません）

感想・アドバイスを文句でも構いません、よければお願いします！

第十四話 切欠（前書き）

相変わらず鈍足でホントすいません！、それでも自分なりにがんばって書きました

のどうか読んで下さい！！どうぞ！

第十四話、切欠

第十四話、切欠

えっ？あの後どうなったのかだって？、まあ色々あったな
俺にとっては始まりだった、あの時の出来事は・・・・・・・・

・・・・・・・・？？？？

深緑のジャケットを着た男性は自分の目の前にいる黒髪の少年に明るい声で訊いた

「そんなボロボロの服きて、身も心もズタズタだってな感じだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流れ者と名乗った男性は正直な感想を口にするが少年はジッと男性を見つめていた

「・・・・・・・・一人？」

「ん？」

「流れ者も・・・・・・・・一人？」

いきなり不思議な質問をされた流れ者は一瞬哑然としてしまうがニツと笑い答えた

「まあ一人つと言ったら一人か・・・・・・・・お前もか？」

「うん」

「そっか・・・・・・・・、ほら・・・・取り合えずこんな色気がない世界からとつとでようぜ」

そう言って手を差し出してくる流れ者、少年は迷うことなくその手を掴んだ・・・・・・・・しかし

「うおっと！」

手を掴んだ瞬間、少年は疲れたのか気を失ってしまった

「氣を失っただけか・・・やれやれ、・・・よつと」
そのまま自分の背におんぶするように乗せ、流れ者は少年を連れて
この世界から消えた

「う・・・うん・・・？」

少年が目覚めるとそこはさっきいた世界とは異なり草や木々がある
豊かな世界で

あった、自分に掛けられていた毛布を見たあと顔を別な方へと向け
るとすぐ目に入ったのは

何やら焚き火の前で座りながらにかをする流れ者だった

「おう、起きたか」

流れ者は振り向きもせずに声を出した、ちなみにフードは外してお
り茶色の後ろ髪が見えた

「・・・ここは？」

「さあな？、ただ言えるのは緑豊かな世界だってこと位か・・・」
そう言うとうまく流れ者は手を止め、振り向き自分の手に持つ何
かを差し出してきた

「ほらよ、腹減っただろ？、食いな」

流れ者の差し出す湯氣を立てるある物より少年は流れ者の顔の方に
注目してしまった

そこまで長くない前髪、そして何もかもを射抜きそうな鋭い目、し
かし少年には

その瞳からは優しさが感じられた

「？、どした？。そんなに俺の顔が珍しいか？」

「あ・・・うん・・・」

「変な奴だな、ほら、とりあえず食え」

ある物を手に取り少年はそれを見て首を傾げた

「これは？」

「ん？、それはこんがり肉だ、心配すんな、ちゃんと上手に焼けたからな」

流れ者の言った言葉をよくは理解できなかったが取り合えず少年はこんがり肉をパクついた

「パクッ・・・！・・・」

食べたら少年はそれはそれは祝福な気分になった、おいしいという感情が一気に体の

奥底から噴出した、それから物凄い勢いでこんがり肉を食べていった、ちなみに流れ者は

啞然とその少年の食べっぷりを見ていた

こんがり肉を平らげた流れ者と少年は体を向き合せていた、ちなみに一個でもかなりの量を

誇っていたこんがり肉をあっさりと食べてしまった少年は、その肉の多さに残してしまった

流れ者の分までも食べたのである

「それでお前、名前なんて言うんだ？」

「・・・わからない、ただ・・・」

「ただ？」

「ラグラっていう名前だけが、頭の中に残っている・・・」

「ふーん、そんなじゃそれがお前の名前だな、ラグラ」

「えっ？」

「ふつうそうだろ？、だって真っ先に自分の頭に出てくるのは自分の名前か、

よっぽど愛した人でしかないだろ、だからお前がラグラだ」

「・・・うん・・・」

少し嬉しい顔をしてラグラは返事をした

「おっ、ようやく嬉しい顔をしやがったな、それにしてもラグラか・
・・・」

逆から呼んでもラグラだな、はははははははは」

「・・・流れ者だって・・・変な名前・・・」

「俺のは名前じゃねーよ、役職みたいなもんだ」

「？」

「わからないか、うーんそうだな・・・、簡単に言うとなんか
一つだ」

「生き方？」

「ああ・・・生き方だ、俺はこの行き方をすごく気に入ってるし誇
りにも思っている」

活き活きとした顔で言う流れ者、その表情からはその言葉が本心だ
ということが伝わってくる

「・・・名前」

「ん？」

「本当の名前は・・・なんていうの？」

ラグラのその問いを聞いた流れ者は腕を組んで目を瞑り言った

「さあな、・・・忘れちゃった」

よっつと言いながら横になる流れ者は夜空を見ながら言った

「ほら、お前も見えてみろよ、絶景だぜこれは」

そう言われるとラグラは空をみた、そこには・・・・

・
「・・・！！・・・うわぁ・・・」

夜空一杯の星があった、ラグラは完全にその夜空に見とれてしまった
とても綺麗だ、それが頭に出てきた感想だった

「すげー綺麗だな、これを見てると多分この世界の星の海はすごい
んだろうなって思うよな」

「星の海？」

「宇宙だよ、この高い高い空を越えた先にある冷たい星の海のことさ」

「この空を……」

「……なあ、ラグラ」

「なんですか？」

「お前、これからどうすんだ？」

「……わからない……」

「……そっか」

どうする？と聞かれたラグラはこれからの事を考えた、記憶をあちこち途切れていて

自分が本当にラグラという名前なのかもわからない状況でもある、ハッキリいうと

行く当ても、探す当てもないのである

「なら、俺と一緒に来るか？」

「えっ？」

「俺は正直、お前が何者かなんてには興味はないが……お前のこれからに興味を持った

辛く険しい旅になるが……それでよかったらこいよ」

「でも……きっと邪魔になるよ……何も出来ないし……何も無いし……」

すっごく悲しい顔をして答えるラグラに流れ者はニツと笑い、その頭に手を乗せて

不器用にクシャクシャと頭を撫でてやりながら言った

「出来ないと思うなら出来るようになれ、そんなもって何もないなら目標をくれてやる、いいか？」

「うん」

「何か自分が打ち込めることを探せ、そうすればきっと自分にとって大切な何かが生まれる」

「大切ななにか？」

「そうだ、自分の身を投げ出しても守りたい大切ななにかだ……、

そのなにかは

俺にもわからないがな・・・、わかったか？」

「・・・うん、わかった、探してみるよ」

その時、ラグラはなぜ流れ者がこの目標を自分にくれたのかわからなかった

だけドラグラは返事をした、なぜなら彼がもはや空っぽだった自分に目標をくれたからである

午前六時二十三分・・・海鳴市・・・高町家

「う・・・うん・・・」

目覚め、まず目に入ったのは見慣れない天井だった、普段の彼なら朝起きたらまずは

空か生い茂ってる木々か洞窟の天井なのである

「（・・・そうか俺、昨日なのはに誘われて泊まったんだっけか・・・、起きるか）」

高町家のリビングにて、流れ者・・・ラグラがソファから目覚めた

「（てかもう朝か・・・、なんかまた懐かしい夢を見ちまった）」

「

ラグラは取り合えず起き上がり毛布を畳みながら思った

「（もしあの時、あの人と会わなかったら・・・俺はどうなっていたんだろう？

たぶん俺は・・・・・・・・よそう）」

そんな事を考えながら畳んだ毛布を丁寧に置き、そのままソファに腰をかける

「（結局まだあの人のくれた目標は見つかっていない・・・・か）」

」

「（なに難しい顔をしてるんですか？マスター）」

そんな中、彼のデバイス・ヘイザーノクトが念話を送ってきた

「（ヘイザーノクトか、・・・いや、ただ昔の事を考えていただけさ）」

「（わたしと出会う前ですか？）」

「（ああ、俺が流れ者になった時ことをな）」

そこまで考えるとリビングに誰かが入ってきた、眼鏡をかけた女の人

「あ、ラグラ君、起きてたんだ、おはよ」

「美由紀さん、おはようございます」

入ってきたのはなのはの姉こと高町美由紀、二人は朝の挨拶を交わした

「それにしても早起きだね、ラグラ君」

「たまたま起きてただけですよ、ところで美由紀さんはこんな朝早くから何を？」

「わたしはこれから朝鍛錬なんだ」

「鍛錬？、まさか剣術でもやってるんですか？」

まさかと思い冗談半分で聞いたラグラだがすぐ美由紀はちよつと驚いた表情で答えた

「よくわかったね、あたり」

「えっ、・・・そうなんですか」

「うん、家に入る前に道場があったの覚えてる？」

「はい、見ましたけど・・・まさか」

確かに待っている時、なのはの家の前に道場があったのを見ているがきつと別の人の道場だろうと思っていたが美由紀の口振りから察すると・・・

「そうだよ、あの道場はうちの家の道場なんだよ」

「ええっ!？」

「ふふ、驚いた？」

「だいぶ・・・」

参りましたという感じで両手をあげて言うラグラに美由紀は聞いた
「ところでラグラ君もやってるの？ 剣術」

「少しだけ・・・やってます」

ラグラは言うかどうかちょっと悩んだが話した

「そっか、じゃあ今度手合わせお願いしようかな」

「（今度って・・・）機会があれば・・・」

「うん、じゃあそろそろ行ってくるね」

片手をふりふりと振りながらリビングを後にした美由紀を見送った後、ラグラは小さく溜息をついた

「（どうしよう、美由紀さんマジだよ・・・）」

「（これは手合わせする時が楽しみですね〜♪）」

「（ごらあ！、なにを呑気な事言ってるんだよ、多分めっちゃくちゃ強いぞ美由紀さん）」

「（いいじゃないですか、きつといい経験になりますよ）」

「（そうか〜？、あーーーーーなんてやってるなんて言ったんだろ
う・・・・・・、あーーーーーもおー）」

やっちまったーーーーーっという感じで頭を抱えはじめるラグラ、それに比べて

ハイザーノクトはすっごく嬉しそうであった

「（それよりマスター、今日はどうするんですか？）」

「（今日はリンディさんのところにいく、なんか話したい事がある
そうだ）」

「（話したいことですか？）」

「（ああ）」

そこまで話すと、リビングにラグラが最近になってよく話すようになった女の子が入ってきた

「おはよー！、ラグラ」

「おはよう、ラグラ」

「おはよう、なのは、ユーノ」

元気な声で挨拶してきた女の子、高町なのはとそのなのはの肩に乗

っている

フェレット、ユーノ・スクライア、ラグラはソファから立ち上がり
挨拶を返した

「ラグラ、昨日はよく眠れた？」

「ああ、おかげさまでな、それよりどっか行くのか？」

「うん、日課の練習にいくの」

「練習？、・・・ああ、なるほど」

こういう場所では念話以外の時ではあまり魔法という単語を
ださないようにしていることをラグラは思い出した、

「ラグラも一緒に行かない？」

「俺もか？」

「うん、なのはの練習をみてほしんだ」

「そうだな、なら朝の空気を吸うがてら、行くか」

ユーノの誘いをラグラは承諾すると脱いでいた上着を着た

ラグラの起きた同時刻六時二十三分・・・八神家・・・

窓から差し込まれる朝日が少年の顔に当たった、金髪 of 髪は朝
日に

当たり、輝いているようにみえた、そして少年は静かに目を開けた

「朝・・・か」

八神家の居候、レイウン・クラフトルはそう言うとともに体を起こ
して大きく伸びをした

「うーーーーーん、さて朝食の準備をしないと・・・」

ベットから降りるとレイウンはすぐに部屋を出てリビングに向かった
そしてリビングに入るとすぐに目に入ったのが自分の部屋のベット
で寝ずに

ソファに腰をかけて寝ているシグナムとそのシグナムの目の前で寝ている

ザフィーラだった、二人とも毛布も掛けずに寝ていたのかなにもかかっていなかった

きつと昨日も蒐集しに行っていたのだろう、寝たのはきつと遅い時刻だったはずだ

特にレイウンはみんなが無理をしていないかとシグナムの傷が悪化していないかが

とても心配だった、戦闘恐怖症の事もあるが自分のはやての病気の原因を知ってなおただ

見守っているばかりであるから余計心配であった

「(あつ、毛布かけないと……)」

そう思うと自室から毛布を二枚とてくると二人に起こさないようにそつと優しくかけた

「(……これでよしと)」

そこまでするとリビングに車椅子に乗った少女、この家の主である八神はやてがきた

レイウンははやての傍に行き、小声で挨拶をした

「おはようございます、はやて」

「うん、おはようレイウン」

そう言うとはやてはシグナムとザフィーラの方に顔を向け小声で言う

「二人ともまだ寝てるん？」

「はい、起こさないでおきましょう」

「うん、そやね、じゃあ作り始めよか」

「はい」

頷きながら返事をし二人は朝食を作り始めた、そして今日も……
・長い一日が始まった

第十四話、切欠（後書き）

なんかすごく中途半端な終わり方で本当にすいません！、とくにレイウン好きの方はレイウンの出番が少なくて本当にすいません！
これからはもっと早く更新できるようにがんばりますので次回もよんでください！

第十五話 一日の始まり(前書き)

くおーぷにんぐく

少佐「・・・って、ETERNAL BLAZEから始まるんじゃないのか!？」

ラグラ「少佐、その前に言うことあるだろう?」

レイウン「そうですよ」

少佐「ちょー!待ってくれ、聞いてくれ!、ワザとじゃない!」

ラグラ「ワザとじゃないならこの更新の遅さは何だ?」

少佐「色々あったんだよ、まじで・・・」

レイウン「色々って言いますと?」

少佐「ニラと枝豆とスイカがこの世を支配する世界にいた」

ラグラ・レイウン「ダブルライダーキックッ!!!!!!!!!!」

少佐「うばああああああっっっ!!!」

ラグラ「全く、この駄目な男め」

少佐「お前ら・・・いつのまにそんな技を・・・」

レイウン「それは置いといて、ホントにそれだけですか？」

ラグラ「ブレイブルーの新作も買ってやってただろう？」

少佐「・・・やっちゃったぜ・・・」

ラグラ「闇に喰われ・」

少佐「わかった！、ごめんなさい！、あやまるからヤメチー！！！！」

レイウン「取り合えずツインブレイダーズを読んでいるみなさん、

更新が遅れて本当にすいませんでした、あれでも少佐さんは第十五話を必死で

書いていたので、どうか読んでください、ではどうぞ」

第十五話 一日の始まり

第十五話、一日の始まり

午前六時三十五分・・・海鳴市・・・海鳴市桜台林道

夜が明けて太陽と青空を覗かせている空は、今日も晴れますよと伝えてるかの

ように見えた、ここ海鳴市桜台林道からはそんな空と海鳴市全体が見えた

まだ午前六時三十五分というこの時間帯に、一人の少年と一人の少女と一匹のフェレットがいた

少女は何かを集中してやるように目を瞑りすぐに目を開き、両手を自分の胸元まで持って行く

そんな少女の目の前にはフェレットがこと成り行き見守るようにちよこんと立っている

「（俺の魔力を分けたとはいえ、リンカーコアが吸収されてからまだ日が浅い

状態でなのは魔法がつかえるのか？、・・・・・・実際に見てみないとわからないか・・・）」

この林道に設けられた多数あるベンチに座っている少年・・・ラグは思考を巡らせていた

前回の戦闘であの守護騎士達に少量とはいえリンカーコアを吸収されたなのはに応急処置として

ラグは自分の魔力を分けたのだがリンカーコアは完全に直るまではその魔力を発揮しないのだ

日にちが立てばふつうに直るのだが、まだあの戦闘からあまり日が経っていないので魔法が

発動するかは見てみないとわからないのであった

「（おっ、はじまるな）」

練習の開始を感じたラグラはジツとなのはの方を見た、なのはが目を閉じ自分の両手に魔力を

集中させ魔力弾を形成させる、桜色の魔力がなのはの両の手のひらで徐々に球体になっていくが

フツと消えてしまった、この結果になのはとユーノは揃って溜息をだした

「でなかったか・・・、まだ完全には直っていないってことか」その結果にラグラは残念そうに言うベンチから立ち上がり、なのは達の近くまで行く

「うーん、だせると思ったんだけど・・・」

「リンカーコアは完治しないと魔力を発揮できないからしかたないよ」

「だな、でもあれだけ魔力を形成できたんだから、あと数日・・・近いうちにだせるさ」

しょんぼりと言うなのはをユーノとラグラはフォローを入れる、だが実際にこの結果は

リンカーコアが完治するまで練習、または戦闘等の魔法を使ったことができないことを意味していた

「でも直るまでは練習や戦闘ができないんだよね・・・」

「そう気を落とすな、あの騎士達だってすぐに事を起こすとはわからないんだし、それに

もし直る前になにか起きても俺やみんなが何とかするから大丈夫だ、なあユーノ？」

「うん、ラグラの言うとおりだよなのは、治る間は僕達がなんとかするよ」

「ありがとう、二人共」

たとえば今自分が動けなくても、それを励まし後ろから支えてくれる二人の仲間に

なのはは満面の笑みでありがとうを言った

午前六時三十八分・・・八神家・・・

時間はほんのちょっと経ち八神家へ、ここ八神家の台所には今二人の男女が朝食を作っていた

女の子の方は車椅子に乗っており前髪には黄色と赤のヘアピンをつけている、男の子の方は少し尖った前髪が

垂れ下がっており後ろ髪も自分の後ろ首元あたりまで伸びておりもう少し伸ばせばロングヘアーになりそうである

そんな二人が静かに、そして元氣よく朝食を作っていた

「はやて、お味噌汁の具は油揚げと長ネギでいいですか？」

「うん、それが出来たらお箸を並べといてな」

「はい」

小声でやりとりする二人、なぜ小声なのかというと昨日夜遅くまで起きていたのであろう者が二人（ぶっちゃけいうと一人と一匹）が台所のすぐ近くにあるソファと床で寝ているからだ、八神家の居候、レイウン・クラフトルは長ネギをまな板の上に乗せると包丁でトントンと丹念に切っていた、するとその音で・・・・・・・・・・

「うっ・・・・・・・・ううん・・・」

ソファで寝ていたシグナムが目を覚ました

「あっ、すいません、起こしてしまいましたね」

「！・・・あっ、いや」

自分に掛けられている毛布に少し驚きながらレイウンに返事をするシグナムは立ち上がりリビングの電気をつける

そのやりとりで床で眠っていたザフィーラも目を覚まし顔を上げた「シグナム、夕べもまた夜更かししたんか？」

「あー・・・その・・・少しばかり・・・」

ありのままなほど素直にいうシグナムの言葉にはやては少しばかりクスクス笑うと牛乳をカップに入れて電子レンジで暖めはじめたシグナムとザフィーラは自分に掛けられていた毛布を畳む、ちなみにザフィーラは狼モードなのだが口で器用に畳んでいた

レイウンは切り終わった長ネギと油揚げを味噌汁の中へと入れた

「あの・・毛布は・・・・・主はやてが？」

「ううん、うちじゃないよ、多分・・・」

はやてはそこまで言うと言顔でレイウンの方を見る

「（また手間を掛けてしまったな・・・・）クラフトル、お前が？」

「はい、でもこれからはちゃんと自分のベットで寝てくださいね、シグナムさん」

「ああ、わかった」

はやては暖め終わった牛乳が入ったカップをお盆にのせるとシグナムの所まで行き差し出した

「シグナム、はいホットミルク、暖まるよ」

「あつ、ありがとうございます」

すこしギクシャクしながらシグナムはお礼を言い、ホットミルクが入ったカップを受け取った、カップを手に持つと

暖く、その暖かさの中には主の温もりも感じられて自然と表情が和らいだでいった

「ザフィーラの分もあるよ、おいで」

手招きしながら言うはやてのもとへとスタスタと歩いていくザフィーラ、レイウンは味噌汁の味見をする

「・・・・アチッ・・！」

暑かったがお味噌の分量は間違っていないことを確認すると火を止めた、すると火を止めた瞬間

「すいません！寝坊しちゃいました〜〜！」

今さっき起きたのだろうシャルマルが慌てて来た

「おはようシャルマル」

「おはようございます、シャルさん」

「おはよう、あーもうっ、ごめんなさい、はやてちゃんにレイウン君」

自分が寝坊したことに心の中で叱咤しつつはやてとレイウンに謝るシャル、最近は蒐集活動や最近不足しがちな

ある物の生産に忙しく家事をほとんどできないでいた、せめて朝ご飯だけでも思った結果がこれだった

「うー、おはよう~~~~~」

とうとう最後の一人が起きた、シャルが入ってきたドアからすぐ眠そうな顔をしたヴィータがきた

「ヴィータ、めっちゃ眠そうやな」

「・・・眠い・・・」

はやての言葉に今の自分の正直な気持ちを言うヴィータ、確かに今の状態でもう一回ベットに入ったら夕方まで爆睡しそうな感じであった

「もおー、顔洗ってらっしゃい」

「うー、ミルク飲んでから」

ヴィータがそう言うのとレイウンはホットミルクが入ったカップを持ってヴィータところまで持っていき渡した

「はい、ヴィータ」

「レイウン、ありがとう」

お礼をいい受け取るヴィータは椅子に座り、それをおいしそうに飲みはじめた、レイウンはふと周りを見た

はやてにシグナムにザフィーラにシャルにヴィータ、新しい家族がみんないた、言葉じゃうまく表せない嬉しい気持ち

これが先日シグナムが言っていた、心が踊る瞬間なのかもしれない「（今の僕の心は・・・確かに踊っている）」

そう思いながらレイウンは自分の分のホットミルクを飲みはじめた

午前七時四十一分・・・高町家・・・

「「「「「ごちそうさまでした!!」「」「」」」」

「・・・ごちそうさまでした」

時間が飛び場所は高町家、ちょうど今朝ご飯を食べ終わった頃であった、全員でごちそうさまでしたを

言うのだが、まだ全然この習慣に慣れないラグラは昨日の夕飯の時間と同様、みんなとは一歩遅れでごちそうさまでしたをいった

高町家のみんなはそれを苦笑いしながら見ていた、そしてみんな席を立ち今日もそれぞれ自分が行くべき所に行く準備をする

ラグラも今日はリンディのところに行く予定なので席を立つ、しかし立ち上がったラグラに士郎が声を掛けてきた

「ラグラ君、今日はどうするんだい？」

「うーん、友達を捜しますね、この辺りに住んでるってことは確かですから」

「そうか」

「あつ、士郎さん、その・・・ありがとうございます」

「ん?、何がだい？」

突然頭を下げてお礼を言ってくるラグラに驚きながらも士郎はラグラに訊いた

「泊めてもらって更にご飯までだしてくれて」

「なになに気にすることは無い、それより桃子の料理はおいしかっただろう？」

「はい、とても」

笑顔でいうラグラの顔を見て、士郎はそうかそうかと言いい、そらに今日の事について訊いた

「それで、友達が見つかったらどうするんだい？」

「多分そこでお世話になると思います」

「そうか・・・、見つからなかったら場合はどうする？」

「まあ一旦故郷に帰って連絡とるとかしますね・・・」

今ラグラが言った言葉は勿論嘘だ、取り合えずこの場所にいるのは今回限りにしようと思っていた

やっぱりこれ以上は迷惑を掛けられないと考えていたからである

「わかった、取り合えず見つかったにせよ見つからなかったせよ、一旦ここに帰って来ることに、いいね？」

「!!!!!!」

真顔で言う土郎のその言葉にラグラは驚いて言葉を失ってしまった

「ほら、返事は？」

「あつ、は・・・はい！」

そしてラグラは我に返りすぐに返事を言う

「よし、じゃあ出掛ける前に一つ頼まれてくれないか？」

「？、いいですが、一体なんですか？」

そう言う土郎は自分の三人目の子、なのはの方を見ながらその頼まれごとと言った

午前七時四十八分・・・海鳴市・・・

「しかしなのは、一体これからどこに行くんだ？」

「え？、学校だよ」

歩道を歩くラグラとなのは、そう土郎に頼まれた事はなのはをバス停まで送って行く事だった、そんな中ラグラはなのはに問いを飛ばした

「学校？、そうか・・・この世界にも学校があるんだったな」

ラグラがこの世界に来た時に行った場所、図書館で色々調べていた
時を思い出した

「今まで行った、違う世界にも学校はあったの？」

「ああ、あった」

「そうなんだ、今度そのお話、聞かせてほしいな」

「・・・機会があればな」

ラグラがそう言い終わったときに、ちょうど目的地のバス停に到着
した、しかもちょうどここに停まるであろうスクールバスも見えた
「あれに？」

「うん、そうだよ、あれに乗っていくんだよ」

バスが止まり、前も方のドアが開いた、なのははその開いたドアに
入り、すぐラグラに振り返り言った

「それじゃあラグラ、行ってくるね」

「ああ、行って・・・らっしやい・・・」

行ってくるねと言われたラグラは高町家を出た時に桃子が言ってい
た言葉を真似して言ってみたが、

朝ご飯の時のようにぎこちなかったのでそれにはなのはも苦笑いし
バスの奥のほうの席へと進んでいった

一番奥の席にいつも見る顔、とっても仲良しの友達が座っていた

「おはようなのは！」

「おはようなのはちゃん」

「おはよう、アリさちゃんにすずかちゃん」

そう言うとなのはは二人の間に座った、元気な声で挨拶をしたのは
金髪の少女のアリさ・バニングスで

静かな声で挨拶をしたのは紫色の髪の毛の月村すずかである、二人
共なのはにとって大切な友達である

「ところでなのは、あの男の子は一体だれよ？」

アリサはバスの窓の外を指差ししながらなのはに訊いた、ちなみに
指されているのはラグラだ

「珍しいね、男の子と一緒に来るなんて」

っとすずかが、それ以前に二人からしてみればなのはが家族以外の男の子と一緒にいること事態が物凄く

珍しいことなのであった、その時、バスのドアがしまり動きはじめた

「えっ、うくんなんて言ってるいいんだろう」

「まっ、取り合えず放課後、ちゃんと私達のも紹介しなさいよ」

「そうだね、私も教えてほしいな」

「うん、二人にもちゃんと紹介するね」

そんな会話をする中、バスを見送っていたラグラは振り返り歩き始めた

「うんじゃあ、行くかな」

一日が始まる……、ラグラにとっては全く新しい一日の始まりだった

第十五話 一日の始まり（後書き）

くおまけく

少佐「さ、さすがに死ぬなこれは」

レイウン「ラグラさん、やりすぎじゃあ・・・」

ラグラ「・・・ああ、これはやりすぎだな」

どうでしたか？、自分なり一生懸命書いたんですが・・・、グダグダでしたでしょうか？、次回も精一杯書くつもりなんで次回もどうか読んでください

第十六話、自分自身の強さ（前書き）

くおーぷにんぐく

ラグラ「少佐、気になったんだが・・・」

少佐「ん？なんだ？」

ラグラ「このコーナーって意味あるのか？」

少佐「・・・ほら、ショットガンもっていきな、俺はVS乗っていくから」

ラグラ「あっ、・・・行っちゃったか」

レイウン「少佐さん最近ロ○トプラ○ト2にハマリ気味ですね・・・」

ラグラ「確かにな〜〜」

敵AKに

少佐が倒された 戦力ゲージが1000減った

ラグラ「・・・・・・・・・・」

レイウン「と、取りあえずまたまた更新遅くなってますいません」

ラグラ「第十六話、自分自身の強さ・・・どうぞ！」

第十六話、自分自身の強さ

第十六話、自分自身の強さ

・・・海鳴市・・・

「うーんと、こっちをこう行って、・・・ここを右だったな」

朝を迎えた海鳴市の一角を歩く少年、ラグラは声を出しながらある場所を目指していた

先程、バス停でなのはを見送り終わった後、今日の行くべき場所にラグラは向かっていた

「（ヘイザーノクト、道順合ってるよな？）」

「（はいマスター、ちゃんとリンディさんの家への道順は合ってますよ）」

ラグラは自分のデバイス、ヘイザーノクトへと念話を送り、自分の道順が合ってるかどうかを確認した

「（そうか、合ってるか）」

「（はい、あとはこの路地を真っ直ぐ進めば到着です）」

「（・・・それにしても驚いたな）」

「（？、何がですか？）」

突然ラグラが神妙な声を出したので、ヘイザーノクトはその訳を訊いた

「（いやー、だってさ、あのシグナムの主があのはやてなんだぜ、騎士っていうのは誰かに仕えるもんだとは

聞いてたけど・・・！！）」

そこまで念話で話すとラグラは立ち止まり、何かとんでもない事に気付いてしまったような顔をした

「（どうしたんですか？）」

「（あ、いや、・・・なんでもない、おっ！、それより到着だな）」
ヘイザーノクトの声でハッと我に返ったラグラは話を逸らすように、
ようやく目的地に到着した事に話題を変えた

ラグラはマンションの階段を昇ろうと足を動かすと見覚えのある顔
が視界に入った、自分と同じ黒髪の少年の・・・

「（ん、あいつは確か・・・）おい、クロノ！」
「えっ」

ラグラの呼び声で振り返る少年、ラグラが今から会いに行く女性、
リンディ・ハラオウンの息子

クロノ・ハラオウンは自分呼び声に驚きながらラグラの方に顔を
向けた

「君は、流れ者・・・いや、ラグラだったか」

そう言うときクロノは体をラグラに向け、取り合えず朝の挨拶をした

「おはよう」

「ああ、・・・おはよう」

「？、随分ぎこちないな？」

「いや・・・その、慣れなくてな」

「そうか、普段は挨拶とかはしないのか？」

「しないな、ところで朝からどこに行ってたんだ？」

「フェイトを学校まで送りに行っていた、今日が初登校日だからな」
初登校日というクロノの言葉に疑問を持ちラグラは訊いた

「？、フェイトは今日が初なのか？」

「ああ、行くとき本人も少し緊張していたよ」

「驚きだな、前から行っているかと思っていた」

なのはとフェイトの仲の良さからしてもなのはが学校に行っている
事がわかった時から、きっと同年のフェイトも

一緒の学校に行っているのだろうとラグラは思っていたがその考え
を違っていたことに少々驚いていた

「まあ、色々と複雑な事情があつてな」

「・・・そうか、敢えてその事情を聞かないよ」

ラグラは複雑な事情に少しだけ気になったがそれを聞かなかった
そして二人は階段を昇り、クロノは帰宅、ラグラは訪問という形で
扉を入った

「ところでクロノ？」

「なんだ？ラグラ」

「なんでリンディ提督は俺を呼んだんだ？」

「それはすぐにわかるさ、さあリビングに行こう」

そう言われるとラグラはクロノの後につづきリビングに入った、リ
ビングにはリンディに

エイミィにアルフがいた、ソファに座っていたリンディは立ち上が
り言う

「おかえりなさいクロノ、そしていらっしゃいラグラさん」

「ただいま戻りました艦長」

「・・・・・・」

親子とはいえ、クロノは敬語でリンディに言い、ラグラは取り合え
ず無言で頭を少し下げ挨拶をした

「もお、クロノ君は相変わらず固いなく、ここでならちよっとく
位ふつうに話したらいいのに

それとラグラ君、そこは無言でじゃなくて、御邪魔しますだよ」

軽い口調で言うエイミィに二人は少し困った顔をする、しかしラグ
ラにとってはその

エイミィの指摘はこれからの自分にとって重要な事なので復唱した

「・・・おじゃまします」

「随分ときこちないね・・・ラグラ？」

さっき会ったクロノと同じ事をアルフに言われてしまったラグラは、
はあ～～～といった顔で返事をする

「・・・慣れてないんだ」

これもさっきと同じ返答

「そうかい、なら早く慣れなよ、挨拶とかは大事な事だからね」

「努力する」

ラグラはソファに座りリンディはそのむかいに座っている、クロノとエイミィと

アルフもソファに腰をかけていた、そんな中最初に口を開いたのがラグラだった

「それでリンディ提督、何の用で俺を？」

「用っていうのは、ラグラさん、あなたの技量がどれ程あるかを確かめたいっていう事がまず一つかしら」

「俺の技量？」

ラグラは首を傾げながら聞く

「ええ、これからあなたも私達と一緒にこの事件を捜査するのだけど、私達はまだあなたの技量を

詳しくは知らないから、一つ模擬戦をしてほしいのよ」

ラグラはなるほどと頷きながら一つの疑問を口にした

「構わないが、ここで結界張っていいのか？」

ラグラはデバイスをういた模擬戦やるとしたら外で結界を張ってやるのか？と思った

「いいえ、そんな事したら色々とまずいから本局の方で行います」「本局？、それって時空管理局の本部みたいな所か？」

「うゝん本部って言ったら本部なんだけど、まあ本部の一つかしら」

「なるほど、で模擬戦の相手は一体誰が？」

ラグラは誰が自分の相手をするのかが気になった、人が相手なのかそれとも機械が相手なのか思考を巡らせた

なのはとフェイトは学校に行っているからユーノはなのはの家に残っているから・・・

「僕が相手をする」

疑問の答えはクロノだった

「クロノが？」

「ああ、それに僕も君と一度戦ってみたかった」

戦ってみたいと言ったクロノの目は若干、執務官の目でなく戦士の目に見えた

「・・・お手柔らかにな」

ラグラはそれだけ言ってソファを立ち上がった

・・・海鳴市のとある店の前・・・

「ありがとうございますー！ー！」

明るい女性店員に見送られながら金髪の少年と赤髪の少女はお互いにある物を片手に店から出た

そのある物とは・・・

「あゝゝゝ、やっぱりこれはあたしにとってやっぱり最高の物だ！」
つと言い、赤髪の少女・・・ヴィータはある物・・・三段アイスを食べた、今の季節は冬・・・

空気読めっ！とか、冬こそアイスだろっ！という、人によっては大きく意見が違う組み合わせである

「本当にアイスが好きですね、ヴィータ」

その隣にいる金髪の少年、レイウンもそう言いアイスを食べはじめる、ちなみにお金を払ったはレイウンである

二人はそのまま近く公園のベンチに座り、アイスをおいしそうに食べている、傍から見ればそれは微笑ましいものであった

「ヴィータはこの後、ゲートボール同好会に行くんですよね？」

「ああ、その後ははやてのギガウマ昼ごはんを食べて、午後からはシグナムと一緒に蒐集活動だ」

「そうですか・・・ヴィータ、最近無理をしているんじゃないですか？」

「えっ？」

その問いにヴィータはアイスを食べる手を止め顔をレイウンに向けた、なぜレイウンがこんな事を

聞くかというと、今朝の事である、シグナムがソファで寝ていたこと、シャルが寝坊した事、ヴィータがすごく眠そうな顔で起きた事幸いはやてには怪しまれなかったが、これは少しづつだが守護騎士四人の生活に乱れが出てきたことを示していた

「べっ、別に無理なんかしてねーよ・・・、約束したじゃんか」

「だったら、なんで今朝ヴィータやザフィーラさん、シャルさんにシグナムさんはあんなに疲れているように見えるんですか？」

「そ、それは・・・」

レイウンの指摘に口籠もってしまうヴィータ、レイウンの指摘は確かに正しい、だがヴィータ達守護騎士にとっては

無理をしていないつもりだったが・・・自分達の体は皮肉な事に素直だった、現に蒐集活動の疲れが生活面にでてしまったのである

「で・・・でもよ、これ以上蒐集活動を遅らせたら完成する前に闇の書がはやてを・・・」

最後までは口が裂けても言えなかった、レイウンはハツとなって謝った

「ごめんなさい、みなさんがんばってるのに・・・」

「いや、いい・・・あたし達が約束を破ぶっちゃってるのは本当だし」

そして二人は黙ってしまおう、その時、冬なのに手に握られていたアイスが少し溶けていた

公園でアイスを食べ終わったレイウンとヴィータは黙って歩いていった、少し気まずい空気になってしまったからである
歩いている道の隣にある広い原っぱで学校が休みなのか中学生ぐらい子達が草野球をしていた、原っぱは広く、その道からはよっぽどのホームランボールでもない限り届くことはないので歩行者は安心して道を歩けるのである

カキイン！

つと誰かがヒットを打った音を聞きながらヴィータは何か話題を出そうと必死に考えを巡らせていた

「(うー、なんかこういう空気は苦手だな、なんかねーか・・・、
そういうえげなでレイウンは

デバイスなんて持ってるんだ？、レイウンの居た世界だと持つてるのが普通なのか？、でもレイウンのは戦闘用だ

あの・・・えーとソリッドアーマーだっけか、あれもバリバリ戦闘用だしな、でもなんでレイウンが戦闘用デバイスを・・・

この性格からしてぜってー戦いなんて好まそうにないのにな・・・
・・・、本人に聞か)な、なあレイウン？」

「何ですかヴィータ？」

微笑を向けながら答えるレイウン、いつもどおりでホッとしたヴィータは問いを飛ばした

「なんでレイウンは・・・戦闘用デバイスなんか持ってたんだ？」

カキイン！

またヒットを打った音がした、レイウンはその問いに答えた

「それは・
・
・
・
・
！」

答えを言ようとした瞬間、レイウンが突然話すのを止めて隣にいたヴィータの前を守るように立ち有無を言わず右手を突き出す。ヴィータはレイウンの突然の行動の意味がわからず棒立ちしていた、そして右手が突き出された瞬間……

バチイ!!!!!!!!!!!!!!

甲高い音を立ててそれはレイウンの右手により受け止められた、ヴィータは思わず目を疑った、だがレイウンの手には間違いなく野球ボールが握られている、自分目掛けて飛んできた野球ボールをレイウンは確かにその右腕で受け止めていた

その受け止めた本人であるレイウン自身が驚いているがヴィータはレイウン以上に驚いていた、原っぱのほうで草野球を

やっていた者達が慌ててこっちに走ってくるのが見える、そんな事は別にヴィータはふと思った、自分を助けようと目の前に飛び出した時のレイウンの目は戦う騎士の目だった、答えは聞きそびれてしまったがレイウンがかなりの強さの持ち主なのではないのかと改めて実感させられたのである

・・・時空管理局本局・・・戦闘訓練施設・・・

時空管理局本局にある戦闘訓練施設、ラグラはリンディの家から転送ポートを使って本局に行きすぐこの訓練施設に

通された、今ラグラの立っているのは廃ビルの屋上、その目の前に今回の模擬戦の相手である、時空管理局執務官のクロノ

が立っている、戦闘マップは廃墟された街、勿論これは高度なプログラムで作られた物であり実物ではない

しかし実物には限りなく近い物である事には変わりはなかった、もう両者共バリアジャケットを纏っており何時でも開始可能な

状態である、クロノの姿はラグラのバリアジャケットと同じでほとんど色が黒である、しかしラグラのバリアジャケット

のような大雑把なデザインではなく、綿密なデザインである、ラグラはそれを見て、似合ってるな〜っという感想を

抱きつつ自分の腰の鞘に仕舞われているノクトとヘイザーの柄に手を添える

「手加減は・・・しないからな」

「ああ」

クロノは自分の愛杖・・・杖の形をしたデバイス・S2Uを構えて言う、ラグラをただ真面目に返事を返した

そこに今回の模擬戦の審判であるエイミィのアナウンスが響く

「それじゃあルールを説明するね、勝利の条件は相手のライフポイントをゼロにすること、行動制限とかは特に

ないけど訓練施設自体にあまりダメージは与えないでね、あとはお互い大きな怪我をしないようにってこれくらいかな」

「わかった」

「オーケーだ」

「あ、いい忘れてた、ライフポイントはお互い2500、受けたダメージ分ちゃんと減るからね、模擬戦中は

しっかり気に止めとおいてね」

エイミィの補足に対して二人は頷いた

「それじゃあ、クロノ君対ラグラ君……試合……開始!」
模擬戦開始……、果たして勝利はどちらが手にするのであ
ろうか?

第十六話 自分自身の強さ（後書き）

くおまけ？く

ラグラ「レイウン！、少佐の死体は見つかったか！」

レイウン「見つかりません、少佐さんの乗っていたVSの破片なら見つかりました」

ラグラ「まったく少佐の奴、どこいったんだ？」

・・・雪山・・・エリア8にて・・・

少佐「ここどこ？・・・ってか寒ーーーーー！！！」

色々と変ですいません！、次回は久しぶりのバトルを書きます！、次回もどうか読んでください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1365k/>

魔法少女リリカルなのはツインブレイダーズAS

2011年10月6日20時50分発行